

山口大学埋蔵文化財資料館年報
－平成16年度－

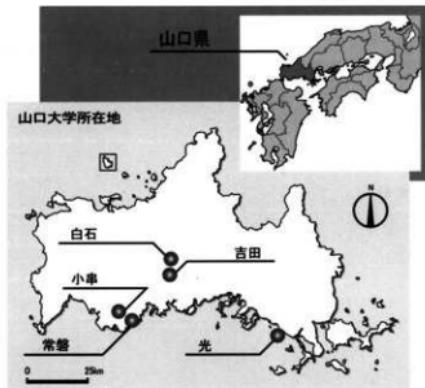
2006

山口大学埋蔵文化財資料館

山口大学埋蔵文化財資料館年報

平成16年度 山口大学構内遺跡発掘調査概報

平成16年度 山口大学埋蔵文化財資料館活動報告



2006

山口大学埋蔵文化財資料館

序

平成16年度は、全国の国立大学が「国立大学法人」として新たな一步を踏み出した記念すべき年です。山口大学でも法人化を迎える大きな組織変更が行われ、埋蔵文化財資料館は学術情報機構内の一組織として位置づけられることになりました。

学術情報機構は、情報をキーワードにした全学教育研究施設であり、山口大学の教育、研究、社会連携活動を学術情報基盤の面から総合的に支援すると同時に、社会へ向けた学術情報の発信を目的として設立されました。従って当館も、大学構内遺跡の調査・研究を業務の柱とすることに変わりはありませんが、その調査成果を情報として学内外に広く還元する活動を従来以上に行う使命を課されたということになります。

本書には、当館が平成16年度に実施した構内遺跡の調査成果をはじめ、収蔵資料の展示活動や社会連携活動、さらに館員の研究活動までが収録されています。本書が山口大学および学外研究機関の教育・研究の材料として、さらに地域社会の学習の材料などとして幅広く活用されることを期待しています。

最後になりましたが、当館の調査・研究活動を様々な形で支えてくださった関係機関、関係者各位に厚く御礼申し上げるとともに、今後とも変わらぬご指導、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成18年3月
山口大学埋蔵文化財資料館長
糸長 雅弘

例言

1. 本書は、山口大学埋蔵文化財資料館(以下「資料館」と呼ぶ)が平成16年度に実施した、山口大学構内の遺跡発掘調査成果報告と、同年度に資料館が実施した社会教育等の活動報告を記したものである。
2. 構内遺跡発掘調査に関しては、現地での調査は資料館員である田畠直彦(学術情報機構助手)・横山成己(学術情報機構助手)・有本浩紀(事務局学術情報部情報サービス課教務補佐員)が担当した。
また、現地での調査に際しては、前田産業株式会社、中国産建株式会社に協力を依頼した。
3. 出土資料の整理は、平成16年度から平成17年度にかけて、資料館員である横山・植木美佳(事務局学術情報部情報サービス課事務補佐員)・有本が担当した。
4. 発掘調査における現地での実測は横山・有本が、写真撮影は田畠・横山が行った。出土遺物に関しては、実測・写真撮影を横山が行った。製図・整図は横山・植木・有本が行った。
5. 発掘調査に伴う事務は、事務局学術情報部総務課総務係が統括した。
6. 発掘調査の諸記録類と出土資料は資料館で適正に保管している。
7. 本文の執筆分担は目次に記した。
8. 本書の編集は資料館員の補佐を得て横山が行った。

凡例

1. 山口大学の吉田・白石・小串・常盤・光構内は、そのいずれもが埋蔵文化財保護法(法律第214号)で示されるところの「周知の埋蔵文化財包蔵地」内に位置している。山口大学各構内の位置する遺跡名は以下の通りである。

吉田構内～吉田遺跡　　白石構内～白石遺跡　　小串構内～山口大学医学部構内遺跡
常盤構内～山口大学工学部構内遺跡　　光構内～御手洗遺跡・月待山遺跡
2. 吉田構内における調査区および層位・遺構の位置は、日本測地系に基づいた国土座標を基準として北から南へ1～24、西から東へA～Zの番号を付して50m方眼に区画した、構内地区割のA-24区南西隅を起点(構内座標x=0, y=0)とする構内座標値で表示している。なお、平面直角座標系第III系における座標値(X, Y)と構内座標値(x, y)とは下記の計算式で変換される。
$$x = X + 206,000$$
$$y = Y + 64,750$$
3. 平成16年度に実施した試掘調査に関しては、以下の略号により資料整理を行っている。

小串構内基幹環境整備(地下タンク設置)に伴う試掘調査…………KG2004-1
小串構内排水管路整備(公共下水接続)に伴う試掘調査…………KG2004-2
常盤構内亞速度応力腐食割れ試験用実験室新営に伴う試掘調査……TW2004-1
常盤構内光半導体素子実験室新営に伴う試掘調査…………TW2004-2
4. 各遺構は下記の記号で表記することがある。

竪穴住居……SB	土壤……SK	溝……SD
柱穴・ピット……Pit	落ち込み……SX	
5. 本書で使用した方位は、吉田構内では国土座標を基準とした真北、他の構内では磁北を示す。
6. 標高数値は海拔標高を示す。
7. 土層および土器の色調記号は、農林省農林水産技術会事務局監修『新版標準土色帖』(1976)に準拠した。
8. 遺物の実測図は、下記のように分類した。

断面黒塗り……須恵器、陶器、磁器
断面白抜き……縄文土器、弥生土器、土師器、土質土器、瓦質土器、石器、木器、金属器

本文目次

第1章 平成16年度山口大学構内遺跡の調査	1
第1節 平成16年度に実施した遺跡調査の概要.....	(横山) 1
第2節 白石構内（白石遺跡）の調査.....	(田畠) 5
1 白石地区市道歩道改修工事（電柱移設工事）に伴う立会調査.....	5
2 教育学部附属山口小学校事務室棟新営工事に伴う立会調査.....	6
3 教育学部附属山口幼稚園・小学校フェンス・通用門改修工事に伴う立会調査.....	7
第3節 小串構内（山口大学医学部構内遺跡）の調査	(横山) 8
1 医学部基幹整備（地下オイルタンク他）工事に伴う試掘調査	8
2 医学部職員宿舎他公共下水接続工事に伴う試掘調査.....	16
3 医学部総合研究棟北側連絡用渡り廊下取設工事に伴う立会調査.....	44
第4節 常盤構内（山口大学工学部構内遺跡）の調査	(横山) 45
1 工学部定歪速度応力腐食割れ試験用実験室新営工事に伴う試掘調査.....	45
2 工学部光半導体素子実験室新営に伴う試掘調査.....	47
3 工学部雨水幹線工事に伴う立会調査.....	49
第5節 その他構内の調査.....	(田畠) 50
湯田宿舎B棟自転車置場新営工事に伴う確認調査.....	50
付節1 平成16年度 山口大学構内遺跡調査要項.....	51
付節2 山口大学構内の主な調査.....	54
第2章 平成16年度山口大学埋蔵文化財資料館の活動報告.....	74
第1節 資料館における展示・公開活動.....	(横山) 74
第2節 資料館における社会教育活動.....	(田畠) 76
付篇 山形重弧文覚書.....	(田畠) 78

挿図目次

第1章第1節 平成15年度に実施した遺跡調査の概要	
図1 山口大学吉田・白石構内位置図	2
図2 小串・常盤構内位置図	3
図3 光構内位置図	4
第1章第2節 白石構内（白石遺跡）の調査	
図4 調査区位置図	5
図5 調査区位置図	6
図6 調査区位置図	7
第1章第3節 小串構内（山口大学医学部構内遺跡）の調査	
図7 調査区位置図	8
図8 調査区平面図・断面図	9
図9 出土遺物実測図	12
図10 調査区位置図	16
図11 調査区割図	17
図12 第1・第2調査区土層断面図	19
図13 第3調査区土層断面図	20
図14 第4調査区土層断面図	21
図15 第5・第6調査区土層断面図	22
図16 第7調査区土層断面図①	23
図17 第7調査区土層断面図②	24
図18 第7調査区土層断面図③	25
図19 第7調査区土層断面図④	26
図20 第7調査区土層断面図⑤	27
図21 第2層出土遺物実測図	30
図22 第3-1層出土遺物実測図	32
図23 第3-2層出土遺物実測図	34
図24 第3-1・2層出土遺物実測図	36
図25 第4層・第6層出土遺物実測図	38
図26 調査区位置図	44
第1章第4節 常盤構内（山口大学工学部構内遺跡）の調査	
図27 調査区位置図	45
図28 調査区土層断面図	46
図29 調査区位置図	47
図30 調査区平面図・土層断面図	48
図31 調査区位置図	49
第1章第7節 その他構内の調査	
図32 調査区位置図	50
図33 詳細位置図	50
第1章付第2 山口大学の主な調査	
図34 山口大学吉田構内地区割および主な調査区位置図	67・68
図35 山口大学白石構内（幼稚園・小学校）調査区位置図	69
図36 山口大学白石構内（中学校）調査区位置図	70
図37 山口大学小串構内調査区位置図	71
図38 山口大学常盤構内調査区位置図	72
図39 山口大学光構内調査区位置図	73
付圖 山形重弧文窓書	
図40 山形重弧文施文土器の分布図	79
図41 山形重弧文施文土器①	86
図42 山形重弧文施文土器②	87
図43 山形重弧文施文土器③	88
図44 山形重弧文施文土器④	89
図45 山形重弧文施文土器⑤	90
図46 山形重弧文施文土器⑥	91
図47 山形重弧文施文土器⑦	92
図48 山形重弧文施文土器⑧	93
図49 山形重弧文施文土器⑨	94
図50 山形重弧文施文土器⑩	95
図51 山形重弧文施文土器⑪	96
図52 山形重弧文施文土器⑫	97
図53 山形重弧文施文土器⑬	98
図54 山形重弧文施文土器⑭	99

写真目次

第1章第1節 平成16年度に実施した遺跡調査の概要	
写真1 吉田構内航空写真	2
写真2 白石構内（教育学部附属山口幼稚園・小学校）	
航空写真	2
写真3 白石構内（教育学部附属山口中学校）	
航空写真	2
写真4 小串構内航空写真	3
写真5 常盤構内航空写真	3

写真6 光構内航空写真	4	写真32 第2層出土遺物	30
第1章第2節 白石構内（白石遺跡）の調査		写真33 第2層出土遺物	31
写真7 C地点土層断面	5	写真34 第3-1層出土遺物	32
写真8 D-1地点土層断面	6	写真35 第3-1層出土遺物	33
写真9 D-2地点土層断面	6	写真36 第3-2層出土遺物	34
第1章第3節 小車構内（山口大学医学部構内遺跡）の調査		写真37 第3-2層出土遺物	35
写真10 調査前全景	8	写真38 第3-1・2層出土遺物	36
写真11 調査区北壁土層断面	9	写真39 第3-1・2層出土遺物	37
写真12 調査区東壁土層断面	9	写真40 第4層・第6層出土遺物	38
写真13 第7層上面（貝堆積層）検出状況	11	写真41 第4層・第6層出土遺物	39
写真14 遺物出土状況	11	写真42 調査区全景	44
写真15 第7層貝除去後全景	11	第1章第4節 常盤構内（山口大学工学部構内遺跡）の調査	
写真16 調査区西部遺物出土状況	11	写真43 A区北東壁土層断面	45
写真17 調査区南東部遺物出土状況	11	写真44 B区北東壁土層断面	45
写真18 出土遺物	12	写真45 A区全景	46
写真19 出土遺物	13	写真46 A区全景	46
写真20 調査前全景	16	写真47 B区全景	46
写真21 発掘調査に從事した作業員	16	写真48 調査区南西部南西壁土層断面	47
写真22 第2調査区土層断面②	28	写真49 調査区北部北西壁土層断面	47
写真23 第2調査区土層断面⑤	28	写真50 調査区北西部	48
写真24 第3調査区土層断面	28	写真51 調査区南東部	48
写真25 第4調査区土層断面	28	写真52 調査区断面	49
写真26 第5調査区土層断面	28	第2章第1節 資料館における展示公開活動	
写真27 第6調査区土層断面	28	写真53 第20回企画展ポスター・展示目録	74
写真28 第7調査区（A棟北）土層断面	28	写真54 第20回企画展の展示模様	75
写真29 第7調査区（B棟南）土層断面	28	第2章第2節 資料館における社会教育活動	
写真30 第3調査区第3-1層上面検出状況	29	写真55 第4回公開授業の模様	77
写真31 第4調査区第3-1層上面検出状況	29		

表目次

第1章第1節 平成16年度に実施した遺跡調査の概要	
表1 平成16年度山口大学構内遺跡調査一覧表	1
第1章第3節 小車構内（山口大学医学部構内遺跡）の調査	
表2 出土遺物（土器）観察表	10
表3 出土遺物（石器）観察表	10
表4 出土遺物（土器）観察表	41
表5 出土遺物（石器・土製品・ガラス製品 ・金属器）観察表	43

第1章付録2 山口大学構内の主な調査	
表6 山口大学構内の主な調査一覧表	54
第2章 山口大学埋蔵文化財資料館の活動報告	
表7 埋蔵文化財資料館利用者の推移	74
付録 山形重弧文覚書	
表8 山形重弧文施文土器の集成表①	84
表9 山形重弧文施文土器の集成表②	85

第1章 平成16年度山口大学構内遺跡の調査

第1節 平成16年度に実施した遺跡調査の概要

山口大学の関連諸施設は、山口市(吉田・白石構内)、宇部市(小串・常盤構内)、光市(光構内)の県内各市に分散しているが、各構内は「周知の埋蔵文化財包蔵地」内、つまり遺跡の上に立地している。各構内の様相を概略すると、吉田構内は縄文時代後・晩期から江戸時代にかけての全時代を網羅する複合集落遺跡として県内でも著名である吉田遺跡内に、白石構内は弥生時代から古墳時代を中心とした集落遺跡である白石遺跡内に、小串・常盤構内は旧石器時代から江戸時代にかけての遺物が出土する山口大学医学部構内遺跡・山口大学工学部構内遺跡内に、光構内は縄文時代から江戸時代にかけての集落遺跡・遺物散布地である御手洗遺跡・月待山遺跡内に位置している。

このような環境の中、山口大学埋蔵文化財資料館は山口大学構内の埋蔵文化財を保護・活用する施設として、昭和53年(1978)に設置された。設置以降現在まで継続的に全構内遺跡の調査・研究を担当してきたが、国立大学が法人化された初年度である平成16年度の調査体制は以下の通りとなった。

まず、各構内において地下掘削を伴う工事が立案・計画された場合には、埋蔵文化財資料館専門委員会(平成16年度より設置)において事業計画の確認を行った後、文化財保護法の諸手続の下、山口大学各構内が位置する地方公共団体(山口県および各市)の指導により、埋蔵文化財保護の立場から事前・試掘・立会の三種の方法で調査を厳密に行う。また、これらの法に基づいた調査以外でも、「周知の埋蔵文化財包蔵地」外に位置する一部の大学関連施設(職員宿舎等)敷地内で地下掘削を伴う工事が実施される場合には、埋蔵文化財の新規発見の可能性を考慮して掘削時に資料館員が確認調査を行う。

上記の調査の結果、埋蔵文化財が確認された場合には、埋蔵文化財資料館専門委員会を速やかに開催し、遺跡のさらなる現状変更を避けるために工事計画の変更が可能であるか等を協議し、仮にやむを得ず記録保存のための発掘調査の実施が決定されたとしても、その調査方法等について厳密な協議を行う。

以上の調査体制の下、資料館が平成16年度に実施した埋蔵文化財の調査は、下記の通り試掘調査4件、立会調査5件、確認調査1件の計10件であった。当該年度は、過去数年と比しても小規模な開発に止まったと言える。以下に各構内遺跡での調査成果の概要を述べる。

表1 平成16年度山口大学構内遺跡調査一覧表

調査区分	調査名	構内地区	構内地区割	面積(m ²)	調査期間	本書掲載頁
試掘	医学部基幹整備(地下オイルタンク他)工事	小串		144	8月17日～9月28日	8～15
	医学部職員宿舎他公共下水接続工事	小串		400	11月24日～4月25日	16～43
	工学部定査速度応力腐食剝れ試験用実験室新設	常盤		20	8月31～9月3日	45～46
	工学部光半導体素子実験室新設	常盤		52.5	11月8日～11月15日	47～49
立会	白石地区市道歩道改修工事に伴う電柱移設工事	白石		1	8月18日	5
	教育学部附属山口小学校事務室新設	白石		101	12月21日、1月14・24日 2月4日	6～7
	教育学部附属山口幼稚園・小学校フェンス・通用門改修	白石		11	2月18・22日	7
	医学部総合研究棟北側連絡用渡り廊下取設	小串		37.5	3月8日	44
	工学部雨水幹線工事	常盤		9	2月3日	49
確認	湯田宿舎B棟自転車置場新設	その他		11	1月21日	50

吉田構内(本部、人文・文化、教育・経済・理・農の各学部;山口市大字吉田1677-1、教育学部附属養護学校;岡吉田3003)

平成16年度は埋蔵文化財調査を必要とする開発工事等は計画されなかつた。

白石構内(教育学部附属山口幼稚園;山口市白石三丁目1-2、岡山口小学校;白石三丁目1-1、岡山口中学校;白石一丁目9-1)

立会調査3件を実施した。

白石地区市道歩道改修工事(電柱遺跡工事)に伴う立会調査では、部分的ではあるが弥生時代以降の所産と推定される構ないし河川堆積の土層を確認した。教育学部附属山口小学校事務室棟新営工事に伴う立会調査では、部分的に土壤もしくは溝の埋土と考えられる遺構や、河川もしくは遺構埋土と推定される土層などを確認した。教育学部附属山口幼稚園・小学校フェンス・通用門改修工事に伴う立会調査では埋蔵文化財は確認されなかつた。

教育学部附属山口小学校事務室棟新営工事に伴う立会調査地周辺では、当館による過去の調査により、弥生時代から古墳時代にかけての堅穴住居跡や土壤が確認されている。今後とも開発工事などによる地下の掘削には十分に注意が必要な地点といえる。



写真1 吉田構内航空写真（南東から）



図1 山口大学吉田・白石構内位置図



写真2 白石構内（教育学部附属山口幼稚園・小学校）
航空写真（南東から）



写真3 白石構内（教育学部附属山口中学校）
航空写真（南から）

小串構内（医学部、岡村真病院：宇都市南小串1丁目1-1）

試掘調査2件、立会調査1件を実施した。

基幹整備（地下オイルタンク他）工事に伴う試掘調査は、第2病棟北側の空閑地が調査対象となった。調査の結果、従来小串構内で遺物包含層として認識されてきた青灰色粘土層が検出され、さらにその下層（現状海拔約0m地点）において旧海底面と推定される砂層が確認された。砂層上面には汽水域に生息する貝類が多量に堆積しており、それらに混ざる状況で縄文土器・土師器・石錐が出土した。職員宿舎他公共下水接続工事に伴う試掘調査は、構内北東部に位置する体育館及び職員宿舎周辺の広域が調査対象となった。調査の結果、造成土以下の堆積層がいずれも遺物包含層であることが確認された。出土した遺物に関しては弥生時代から江戸時代にかけてのものが主体となっている。平成16年度の調査及び過去の調査成果により、小串構内北部では埋蔵文化財が密に埋存することがより明白となった。今後とも埋蔵文化財の保護には十分な注意が必要な地域と言える。

常盤構内（工学部：宇都市常盤台2丁目16-1、尾山宿：岡上野中町2658-3）

試掘調査を2件、立会調査1件を実施したが、いずれも埋蔵文化財は確認されなかった。



図2 小串・常盤構内位置図



写真4 小串構内航空写真（南東から）



写真5 常盤構内航空写真（南から）

光構内(教育学部附属光小学校、同光中学校:光市宝積8丁目4番1号)

平成16年度は埋蔵文化財調査を必要とする開発工事等は計画されなかった。

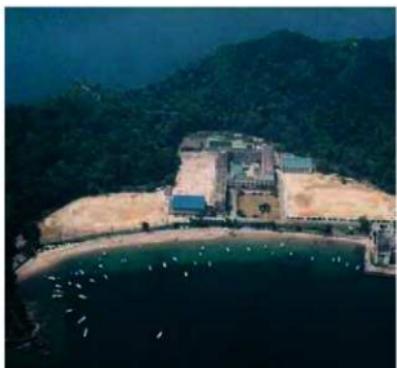


写真6 光構内航空写真（南東から）



図3 光構内位置図

平成16年度は、吉田・光の二つの構内で調査を必要とする事案が発生しなかった。特に吉田構内では、昭和53年(1978)の当館設置以降、調査が全く実施されない初めての年度となった。吉田遺跡、月待山遺跡、御手洗遺跡にあってはまことに穏やかな1年であったと言える。

第2節 白石構内(白石遺跡)の調査

1. 白石地区市道歩道改修工事(電柱移設工事)に伴う立会調査

調査地区 白石構内

調査面積 約1m²

調査期間 平成16年8月18日

調査担当 田畠直彦

調査結果 山口市による白石地区市道歩道改修工事に伴い、歩道に設置されていた2本の電柱について、白石構内への移設が計画された。工事は、北側の電柱(A地点)とその支柱(B地点)、南側の電柱(C地点)について、A地点、C地点は直径約60cmの円形の範囲内、B地点は50cm×80cmの範囲について掘削を行うものであり、立会調査を行った。

A地点は現地表下約90cmが表土・造成土で、約90～150cmが緑灰色砂礫土であった。B地点は現地表下約100cmが表土・造成土で、約100～137cmが緑灰色砂礫土であった。C地点は現地表下約23cmが表土・造成土で、約23～34cmが水田耕土、約34～47cmが床土であった。以下、約47～106cmが溝ないし河川の埋土と考えられる灰色砂礫土、約106～180cmが地山である淡黄色粘土であった。しかし、いずれの地点からも遺物は出土しなかった。

C地点で確認された灰色砂礫土は遺物が出土していないが、弥生時代以降の溝ないし河川堆積によるものと考えられる。これまでの調査で調査区の周辺では顕著な遺構・遺物は確認されていないが、今後の施設整備にあたっては、埋蔵文化財の保護に十分な注意を払う必要がある。

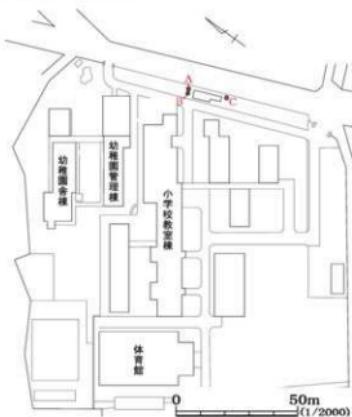


図4 調査区位置図



写真7 C地点土層断面（南から）

2. 教育学部附属山口小学校事務室棟新営工事に伴う立会調査

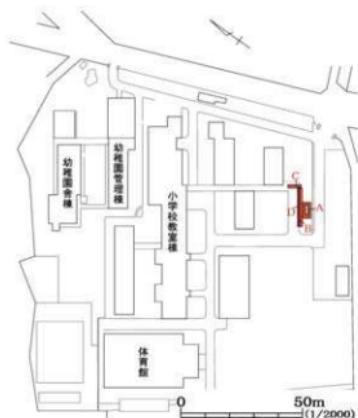


図5 調査区位置図

調査地区 白石構内

調査面積 約132m²

調査期間 平成16年12月21日

平成17年1月14日・24日、2月4日

調査担当 田畠直彦

調査結果 教育学部附属山口小学校で、事務室棟の新営工事並びにこれに伴う玄関スロープ、渡り廊下、排水管新設工事が計画された。事務室棟の新営工事予定地は、工事前まで人工の池が設けられていたため、埋蔵文化財が存在したとしてもすでに破壊されたと考えられる場所であること、事務室棟はプレハブ建物で工事掘削規模が小さく、他の工事も同様であることから、埋蔵文化財に影響を与える可能性は小さいものと推測された。そこで、埋蔵文化財資料館専門委員会の審議・判断に基づき、文化財保護法の下に立会調査を行うこととなった。

事務室棟の基礎工事(A地点)は約6.3m×約12m四方の縁辺部を幅約1.5m、現地表下約45cmまで掘削を行うもので、全て造成土の範囲内であった。

玄関スロープ新設工事(B地点)は約2m×約18mの範囲を現地表下約50～70cmまで掘削を行うもので、全て造成土の範囲内であった。

渡り廊下新設工事(C地点)は、約1.6m×約4.7mの範囲内を現地表下約60cmまで掘削を行った。現地表下約44cmが造成土、約44～54cmが水田耕土、約54～66cmが水田床土であった。

配水管新設工事(D地点)は、幅約0.6m、長さ約18mの範囲を現地表下約45cmまで掘削を行った。全般的に搅乱が著しかったが、事務室棟の北～北東部の一部で埋蔵文化財を確認した。

東端部のD-1地点は、現地表下約20cmが水田耕土、約35cmが水田床土であった。以下は溝ないし、河川埋土と考えられる土層で、約35～45cmが黒褐色シルト・暗灰色粗砂、約45～70cmが灰色粗砂であった。また、東端部においては、現地表下約60cmで地山と考えられる灰白色シルトを確認した。遺



写真8 D-1地点土層断面（南から）



写真9 D-2地点土層断面（南から）

物は出土していない。

D-1地点の西側約2mに位置するD-2地点は、現地表下約10cmが水田耕土、約40cmが水田床土、約40~45cmが地山である緑灰色シルトであった。この地点では、約50cm×60cmの範囲で緑灰色シルトから掘りこまれた土壤もしくは溝と考えられる遺構を検出した。埋土は黒褐色粘質土である。遺物は出土していない。

事務室棟のほぼ北側にあたるD-3地点は、現地表下約22cmが造成土、約23~37cmが水田耕土、約37~45cmが水田床土、底面が河川もしくは遺構埋土と考えられる灰色シルトであった。

以上の調査の結果、調査区の大半では埋蔵文化財は確認されなかつたが、D地点の一部で溝もしくは河川埋土と考えられる土層と遺構を確認した。今回の調査の東側では平成元年度に行われた污水管布設に伴う発掘調査で弥生時代~古墳時代の竪穴住居跡、土壙が検出されており、調査区一帯に間連遺構が遺存している可能性が高い。^{註1}

[註]

- 1) 河村吉行(1991)「第3章 龜山構内教育学部附属幼稚園・山口小学校汚水管布設に伴う発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報IX』,山口

3. 教育学部附属山口幼稚園・小学校フェンス・通用門改修工事に伴う立会調査

調査地区 白石構内

調査面積 約11m²

調査期間 平成18年2月18日・22日

調査担当 田畠直彦

調査結果 教育学部附属山口幼稚園・小学校で安全対策向上のため、フェンス・通用門の改修工事が計画された。A地点は新設するフェンスの基礎部分について、約40cm×40cmの範囲で現地表下約55cmまでの掘削を13ヶ所で行うものであった。B地点は幼稚園の門柱の基礎部分について、約250cm×150cmの範囲で現地表下約40cmまでの掘削を2ヶ所で行うものであった。C地点は小学校の門柱の基礎部分について、約90cm×90cmの範囲で現地表下約70cmまで掘削を行うものであった。調査の結果、いずれも造成土の範囲内であり、埋蔵文化財に支障はなかつた。



図6 調査区位置図

第3節 小串構内(山口大学医学部構内遺跡)の調査

1. 医学部基幹整備(地下オイルタンク他)工事に伴う試掘調査



調査地区 小串構内第2病棟北側空閑地

調査面積 約144m²

調査期間 平成16年8月17日～9月28日

調査担当 横山成己

調査結果

(1) 調査の経緯(図7、写真10)

山口大学医学部(小串構内)において、基幹環境整備事業(地下タンク設置及び埋設管布設)が確定したことを受け(発掘調査を要する工事計画として、平成16年3月18日に埋蔵文化財資料館運営委員会にて承認)、開発予定地の埋蔵文化財試掘調査を実施することとなった。開発予定地周辺は、当館による発掘調査の事例が希薄な地点であるため、遺構等埋蔵文化財の存否は予測が不可能な状況であった。そのため、開発工事において最も掘削深度が深くなる地下タンク設置地点を対象に試掘調査を実施することとなった。

調査区は、1辺を12mとする正方形に設定したが、調査の安全性を考慮して壁面には現地表下約1.5m地点に幅約1mの段差を設けることとした。

(2) 調査の経過

・8月11～13日 安全フェンス設置等準備工

・8月17～18日 重機による表土・造成土の掘削

・8月19日～9月21日

重機・人力による堆積土の掘削、測量、写真撮影

・9月22日～28日 現況測量、埋め戻し、現場撤去



写真10 調査前全景（南から）

(3) 基本層序(図8、写真11・12)

調査の結果確認された基本層序は、

第1層…にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土(層厚約20～40cm)～表土

第2層…造成土(層厚約100cm)

第3層…褐色(10YR4/1)粘土(層厚約10～15cm)～旧耕土

第4層…褐色(10YR5/1)粘土(層厚約40cm)～旧床土

第5層…黄褐色(2.5YR5/3)粗砂に黄灰色(2.5YR5/1)粘土が混ざる(層厚約40～60cm)

第6層…暗青灰色(10BG4/1)砂(層厚約30～50cm)

第7層…暗青灰色(10BG4/1)砂に貝類が多量に混ざる(層厚20cm以上)

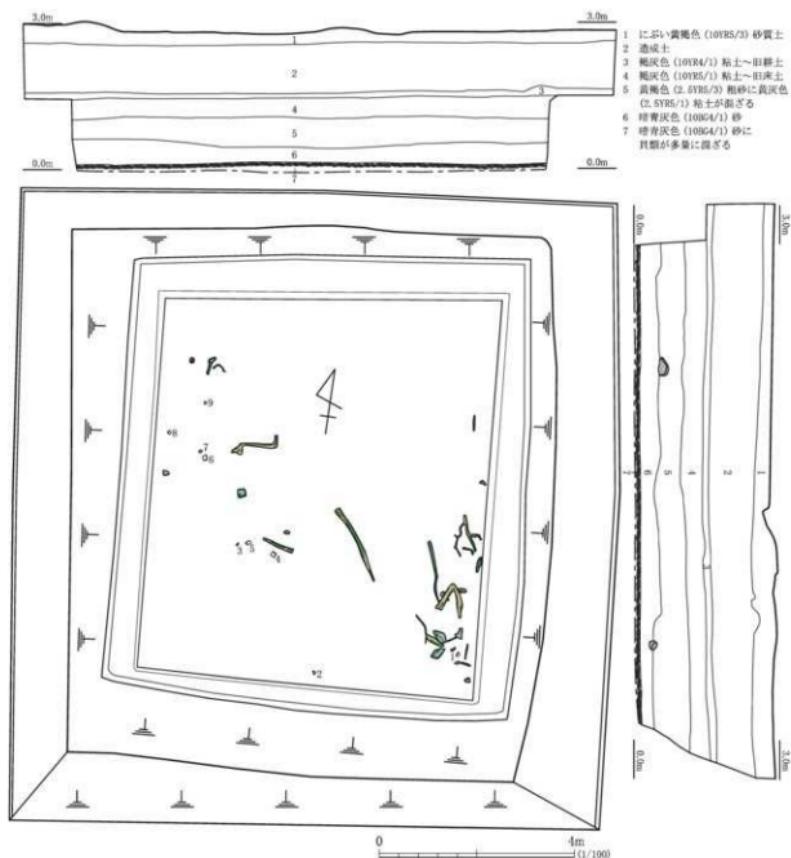


図 8 調査区平面図・断面図



写真 11 調査区北壁土層断面（南から）



写真 12 調査区東壁土層断面（西から）

となっている。

この内第3層は構内造成以前にこの地が耕作地であったことを物語っており、床土と見なされる第4層は平均して約40cmもの厚みを有している。この第4層の土色に関しては、層上部では有機物等による土壤化が進行しており褐灰色を呈しているが、下部では青灰色を帯びている。土質的には同質であるところから同一層として認識しておく。第3~4層の層間および第4層中からは磁器、陶器、土師器、瓦質土器の小片が出土している。

第5層以下はいずれも砂を主体とする脆弱な堆積層である。第4層から第6層までは自然木・炭化木が検出されるにとどまっており、無遺物層であった。

第7層からは貝類が多量に検出された。貝の種類としては、ハマグリとアサリが大多数を占めているが、カキ、ハイガイ、ヘナタリなども存在する。のことから、過去においてこの地が汽水域の河口部或いは内湾地の陸上に近い海底部であったことが推測される。第7層上面に1平米の貝類サンプル区を設けて調査したところ、遺物収納コンテナ(40cm×60cm、深さ7cm)に6箱分の貝類が採取された。この貝類に関しては、未だ整理・分類調査が完了していない。また、貝類と共に自然木や歯骨なども出土している。人工遺物としては、層上面から縄文土器、土師器、石錐が出土している。土器類の表面はあまり風化・摩耗していないため、近隣から、小串構内の現況地形から考えると構内の北西から北方に南延している丘陵部からの流入物と推測される。

(4) 出土遺物(図9、写真18~19)

上述したように、今回の調査では耕土・床土層である第3~4層と、過去における海底面と考えられる第7層上面から人工遺物が出土している。大多数が小片であるため図化が可能な資料は極少数である。

第3層~第4層出土遺物

遺物は主に層間から出土している。両層は重機による掘削を行ったため、各遺物の所属層に関しては明言しかねるのが実情であり、ここでは一括して報告しておく。

表2 出土遺物(土器)観察表

遺物番号	層位	器種	部位	法量(cm)			胎土	備考	法量()は復元値
				①口径	②底径	③器高			
1	第3~4層	磁器 皿	底部~体部	②(8.0)			素地 釉 透明	白灰色(2.5GY8/1) 精緻	豊付釉剥ぎ
2	第3~4層	磁器 碗	底部~体部				素地 釉 透明	白灰色(2.5GY8/1) 精緻	染付
3	第3~4層	陶器 碗	底部~体部	②(4.1)			素地 釉 灰黄色(2.5Y7/2)	にいわい黄橙色(10YR7/2) 精緻	薬灰釉 豊付釉剥ぎ
4	第3~4層	磁器 皿	口縁部	①(12.4)			素地 釉 透明	白灰色(5GY8/1) 精緻	染付
5	第3~4層	磁器 皿か	口縁部				素地 釉 透明	白灰色(2.5GY8/1) 精緻	輪花 染付
6	第3~4層	陶器 碗か	口縁部				素地 釉 褐色(7.5YR4/4)	褐灰色(7.5YR6/1) 精緻	鉄釉 外面刷毛且
7	第3~4層	土師器 皿	底部	②(5.5)			①②にいわい黄橙色(7.5YR6/4)	精緻	底部糸切り
8	第7層	土師器 瓢か	体部				①灰色(N4) ②灰色(5Y5/1)	0.5~3mmの石英等 砂粒多く混ざる	
9	第7層	縄文土器 深鉢	底部~体部	②(10.8)			①②にいわい黄灰色(2.5Y6/3) ~黄灰色(2.5Y6/1)	0.5~5mmの粗砂粒 多く混ざる	

表3 出土遺物(石器)観察表

遺物番号	層位	器種	法量(cm)		重量(g)	石質	備考	法量()は復元値
			全長	最大幅				
10	第7層	石錐	全長9.8	最大幅6.4	最大厚2.0	162	片岩	



写真13 第7層上面（貝堆積層）検出状況（北から）



写真14 遺物出土状況（南西から）



写真15 第7層貝除去後全景（北から）



写真16 調査区西部遺物出土状況（西から）



写真17 調査区南東部遺物出土状況（南から）

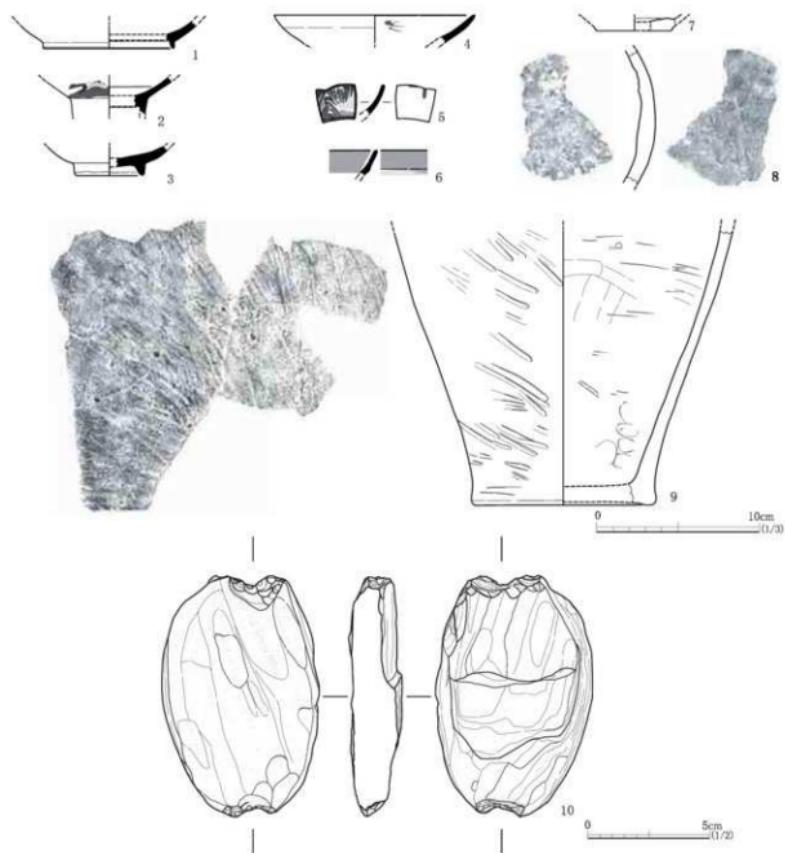


図9 出土遺物実測図



写真18 出土遺物



写真 19 出土遺物

1は磁器皿底部片。高台は疊付有刺ぎ。2は磁器碗底部片。高台端部を欠く。3は陶器碗底部片。高台内まで施釉されており、疊付有刺ぎ。4は磁器皿口縁部片。5は磁器輪花口縁部片である。6は陶器口縁部片。外面刷毛目。7は土師器皿底部片。底面に糸切り痕が残る。

第7層出土遺物

第7層からは縄文土器1個体、土師器1点、石錐1点が出土している。土器類に関しては調査区平面図(図8)に出土地点を示している。縄文土器に関してはやや広範囲に分布しているものの、その多くは接合する。接合しないものに関しては胎土及び調整の特徴から同一個体と見なして良いようである。

8は土師器壺体部片。外面調整はタテハケ、内面調整はナデである。外面には煤が付着している。9は縄文土器深鉢。底部は周縁の一部しか残存しないが、端部をやや外方に突出させており、底面は僅かに上げ底状を呈するものと思われる。底部から体部にかけてはやや外反しつつ緩やかに立ち上がる。外面調整は右下から左上方方向の二枚貝条痕の後、部分的にナデ消しており、一部ミガキ状に処理されている。内面調整はナデ。このように二枚貝条痕をナデ消す特徴は岩田四類cの新相に見られる特徴であるが、底部から体部形態の特徴は月崎上層Ⅰ出土例に類似する。従ってここでは当資料の所属時期を縄文時代後期から晩期中頃までと見なしておく。10は石錐。平面形態ラグビーボール状の扁平な石材を利用してあり、両頂部を敲き込んで凹部を形成している。凹部周辺には使用による摩耗が見られる。

(5) 小結

今回の調査では遺構の検出には至らなかったが、確認された堆積層からは調査地周辺の古環境を復元する上で興味深い成果を得ることができた。

まず、今回の調査で確認した限りの最下層である第7層は、貝類の堆積状況からこの地が汽水域の水底であったことを示している。層中に石錐が埋存していた事実もこの状況を雄弁に物語っている。また、出土した土器資料から、少なくとも古墳時代まではこの地が水底であった事が提示できる。

第7層以降の堆積状況を見ると、第6～5層は脆弱な砂層となっており、とても人類が陸上生活を行える地盤状態ではない。この層中からは自然木や炭化木以外の人工遺物が出土しておらず、また貝類などの水生生物遺体も検出されていない。

一転して第4層は非常に硬質の粘土層となっており、その上部には旧耕土である第3層が堆積している。この環境の劇的な変化は何に起因するものであろうか。

現在山口大学小串構内は、宇部市域を南北に流れる真締川の右岸に面して所在している。この真締川は、現在は小串構内東側からそのまま南進を続け河口へと至っているが、古くは小串構内の南端部、樋ノ口橋で流れを西に向か、助田町(現JR居能駅南側)付近を河口としていたようである。近世文書「舟木宰判本控」に所収されている未ノ二月(寛政11年(1799)2月)の「御届申上候事」には、「宇部村福富前殿領本川筋砂余分流出、川尻は遠干拓にて砂引不申、次第二川内高相成、洪水之筋は勿論地道ニても川筋の田地余分水損有之、年々御所務落猶百姓迷惑不大形儀ニ付、川尻を床海之所に付替被申付度、一」と記されている。本川(真締川)が上流から運んできた土砂で河口が埋まってしまい、洪水被害が大きいので、河口を付け替えさせてほしいという内容である。また、同文書中には、河口付け替え工事の結果、「一 弥水砂共ニ引宣ニ付、只今迄之川をは川尻留被申候、一」とあり、付け替え工事によって川の流れが良くなつたので旧河口を封鎖して耕地にしたいと萩藩に願い出ている。

この文書から、18世紀末の本川(真締川)河口一帯の状況を窺うことができる。つまり当時の真締川が「土砂を多く流す川」であったこと、そしてその土砂により河口一帯は度々洪水に見舞われたため、「氾濫原」の様相を呈していたであろう、ということである。調査地での第6～5層の堆積状況は、18世紀以前

のこのような古環境を反映しているのではなかろうか。また、河口付け替えにより安定した水流が確保されたことによる旧河口の封鎖→氾濫原の耕地化という流れが、調査地における第4層を成立させたものと考えたい。第5層までの地盤状況は農耕を営むにはあまりにも脆弱であり、また塩害による農作物への被害も想定される。必然的に耕地化へは大規模な地盤改良が必要となったであろう。この地盤改良こそが今回の調査で確認された第4層、約40cmもの厚みを持つ良質な粘土層なのではなかろうか。

この第4層と同一のものと推定される層は、過去の調査においても確認されている。医学部体育館新營に伴う試掘調査での第4層(青黄灰色粘土)、第5層(青灰色粘土)や医学部基幹環境整備に伴う試掘調査における保健学科棟北側Dトレーニングの第11層(暗灰色粘質土)、医学部看護婦宿舎改修に伴う試掘調査での第5層(淡青灰色粘土)、医学部附属病院病棟新營に伴う試掘調査におけるBトレーニング第9層(灰色土)などである。これらの層は当館による小串構内遺跡の調査開始期から遺物包含層として認識されており、主に構内北部に存在することが指摘されている。これらの層からは、旧石器、古墳時代に遡りうる須恵器片、中世の土師器、瓦質土器、近世の陶磁器などの多様な遺物が相当数出土している。

仮に筆者の推測を妥当とすると、これらの遺物は地盤改良土=客土中に含まれていたことになり、土採集地は少なくとも旧石器時代から中世にかけての複合遺跡であり川津寺が推測される川津遺跡が存在している。今後とも山口大学医学部構内遺跡の継続的な調査・研究が、周辺地域の歴史的環境の復元に果たす役割は大きいものと考えられる。

[註]

- 1) 小川国治(1992)「第4編近世第3章近世村落の成立と発展」,宇部市史編集委員会(編)『宇部市史通史篇』上巻,宇部(山口)
- 2) 河村吉行(1985)「第7章 宇部(小串構内)医学部体育館新營に伴う試掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』,山口
- 3) 森田孝一(1986)「第4章 宇部(小串構内)医学部基幹環境整備に伴う試掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅳ』,山口
- 4) 河村吉行(1987)「第5章 小串構内医学部看護婦宿舎改修に伴う試掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』,山口
- 5) 木村元浩(1989)「第4章 小串構内医学部附属病院病棟新營に伴う試掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅵ』,山口

2. 医学部職員宿舎他公共下水接続工事に伴う試掘調査

調査地区 小串構内体育館・職員宿舎周辺

調査面積 約400m²

調査期間 平成16年11月24日～平成18年4月25日

調査担当 横山成己

調査結果

(1) 調査の経緯(図10、写真20)

山口大学医学部(小串構内)において公共下水を本学職員宿舎等に接続させる工事が確定したことを受け(発掘調査をする工事計画として、平成15年3月13日に埋蔵文化財資料館運営委員会にて承認)、開発予定地の埋蔵文化財試掘調査を実施することとなった。当館による開発予定地周辺での過去の調査成果から、埋蔵文化財の存在は十分に予想される地域であったが、公共下水接続という工事の性格および接続部分の地下深度(最深部で約3mの掘削を要する)から工法の変更は困難であり、地下の埋蔵文化財は記録保存以外に選択肢を得ない状況であった。

従って今回の調査では、埋蔵文化財の存在が推定される地下深度以上の工事掘削が予定されている管路のすべてを調査対象地とした。また、調査終了から工事着工までの期間を最大限に短縮するため



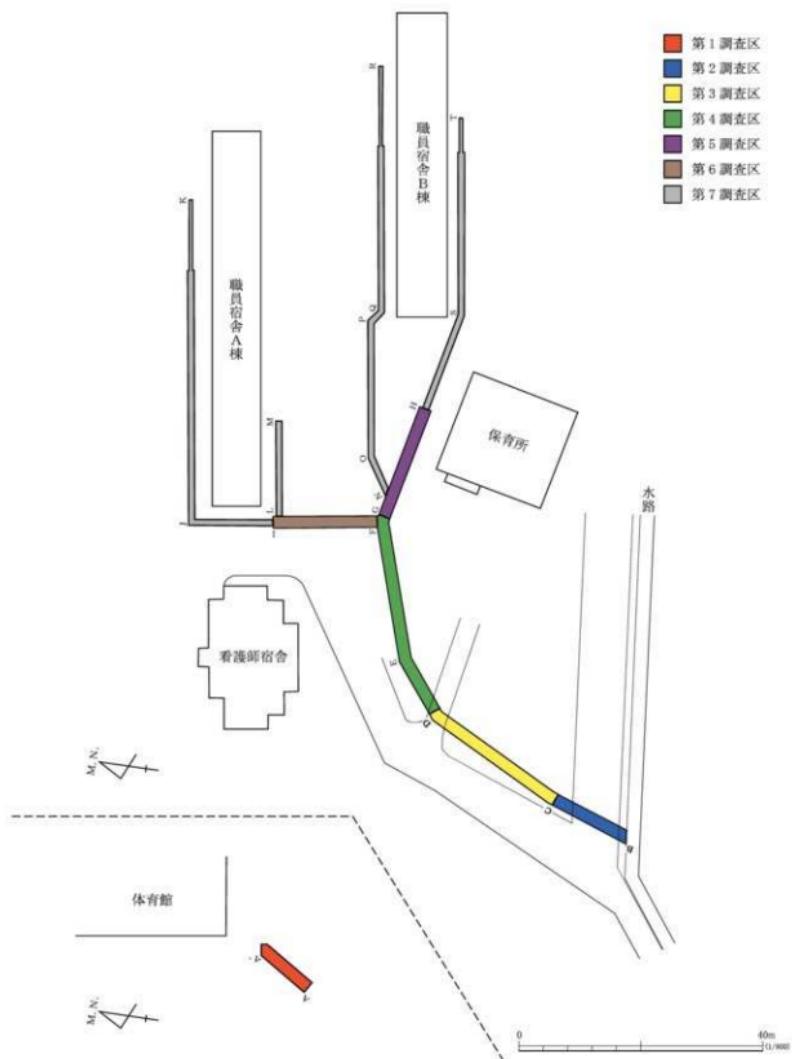
写真20 調査前全景（南東上空から）



写真21 発掘調査に從事した作業員



図10 調査区位置図



※調査区横の英文字は断面図(図12-20)に対応

図11 調査区割図

に調査対象地を7調査区に区分し、調査が終了した区域から順次開発部局に引き渡すという方法を探用した。

(2) 調査の経過

各調査区の調査期間は以下の通りである。

第1調査区…平成16年11月24日～平成16年12月7日

第2調査区…平成16年12月8日～平成17年1月5日

第3調査区…平成17年1月4日～平成17年1月31日

第4調査区…平成17年1月31日～平成17年3月4日

第5調査区…平成17年3月7日～平成17年3月17日

第6調査区…平成17年3月18日～平成17年3月29日

第7調査区…平成17年3月30日～平成17年4月25日

(3) 基本層序(図19～20、写真22～29)

第1～第6調査区までは掘削深度が深いことから管路両側に工事用矢板が必要であったため、発掘調査においては矢板片側に土層観察用の畦を残しながら掘削を行った。しかしながら、季節柄降雨降雪が多く、調査途中に畦が崩落することが度々あった。そのため、調査範囲の一部に土層断面の記録が行えなかった箇所が存在する。

調査において確認した基本層序については以下の通りである。

第1層…造成土(層厚約100～150cm)

第2層…褐灰色(10YR4/1)弱粘質土(層厚約10cm)～旧耕土

第3-1層…にぶい黄色(2.5Y6/3)粘土(層厚約10～25cm)～旧床土

第3-2層…青灰色(10BG5/1)粘土(層厚約10～40cm)

第4層…粘土と砂の混合層(4-1～4-5に細分可能であり、層厚約10～35cm)

第5層…暗青灰色(10BG5/1)砂…第1調査区 灰色(N4)砂質土に灰色(N5)粘土ブロックが少量混ざる…第4・5調査区(層厚約10～15cm)

第6層…オリーブ黒色(10Y3/1)粘性細砂(層厚約30～100cm以上)

第7層…灰色(10GY4/1)強粘質土に青灰色(10BG5/1)砂が少量混ざる(層厚約35～70cm以上)

第8層…灰色(10GY4/1)細砂に同色の粘土ブロックが少量混ざる(層厚20cm以上)

確認した各層位の性格を見ると、第2層は造成前の最終的な土地利用状況を示しており、層中に多量のタニシを含むところから見て水田耕土である。第3-1層と第3-2層は土質的に同一のものと考えられるが、同時に実施した医学部基幹整備(地下オイルタンク他)工事に伴う試掘調査で確認した第3層と同様の性格のもの、つまり第3-2層上面が床土として利用されたために土壤化したもののが第3-1層と見なされる。しかしながら、調査地東部(第5調査区および第7調査区職員宿舎B棟南側)では第2層と第3-1層間にさらに旧耕土および旧床土が確認されているため、第3-1層は長期間に及ぶ水田耕作に伴う代掻き等により複数層が攪拌された状態である可能性が残る。よって今回の調査では出土遺物の所属層を厳密に分離させるため、第3-1・2に分層を行った。第4層は砂と粘土で構成された脆弱な堆積層である。各調査区で微妙に土質を変化させているが、基本的な層序としては第4層として同一視しておく。第5層は第1調査区と第4・5調査区においてのみ確認している。両地区は距離にして約100m離れており、土質も大きく異なるが、無遺物層であったこともありここでは基本層序第5層として統一した。今後の調査においては注意が必要である。第6層以下は汽水域の貝類が混ざる水底堆積層である。医学部基幹整備

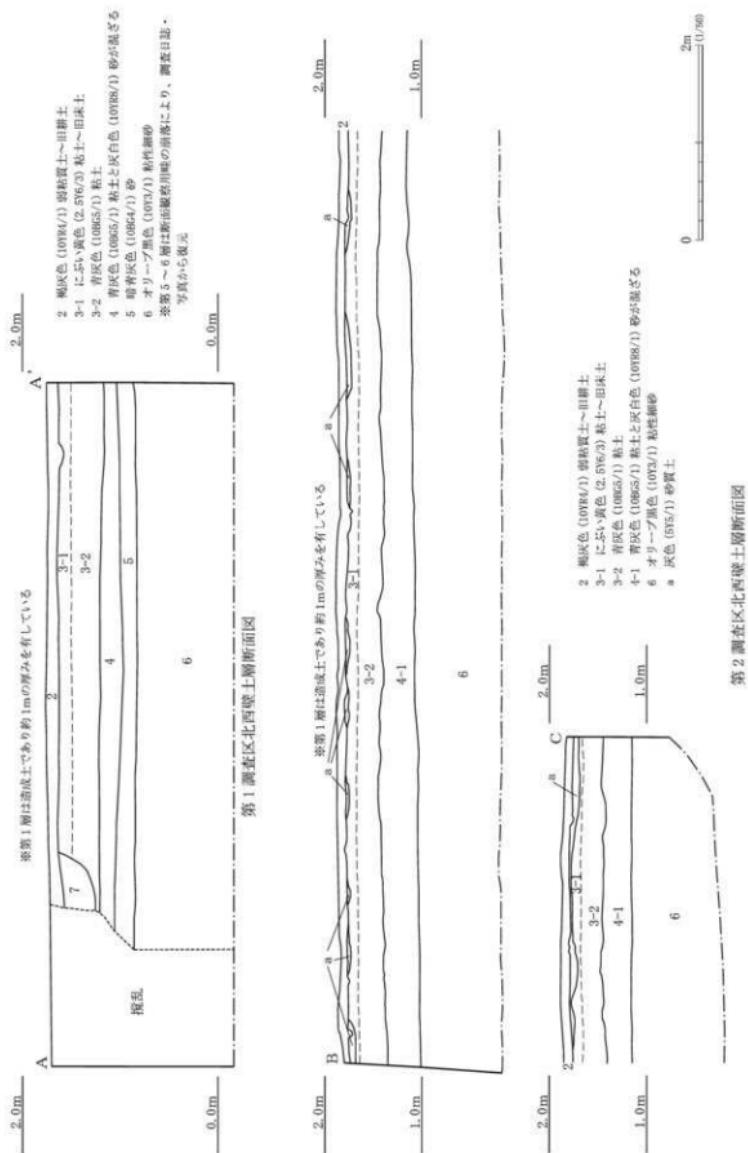


図 12 第 1・第 2 調査区土層断面図

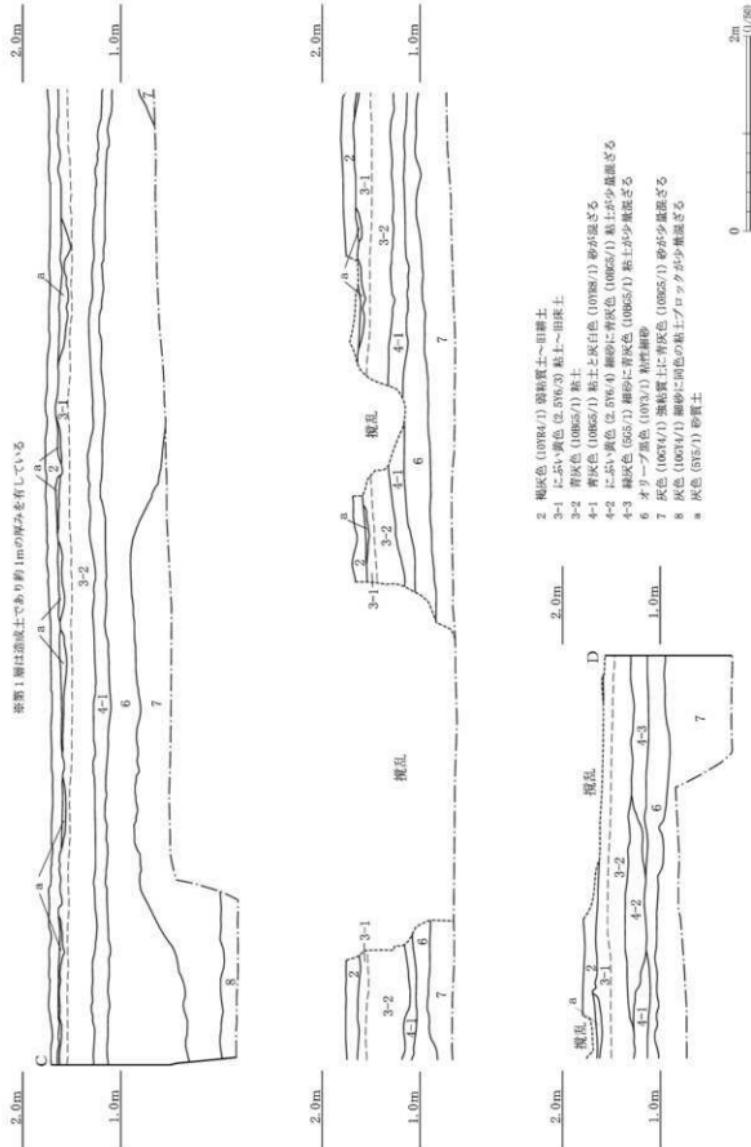


図 13 第3調査区土層断面図

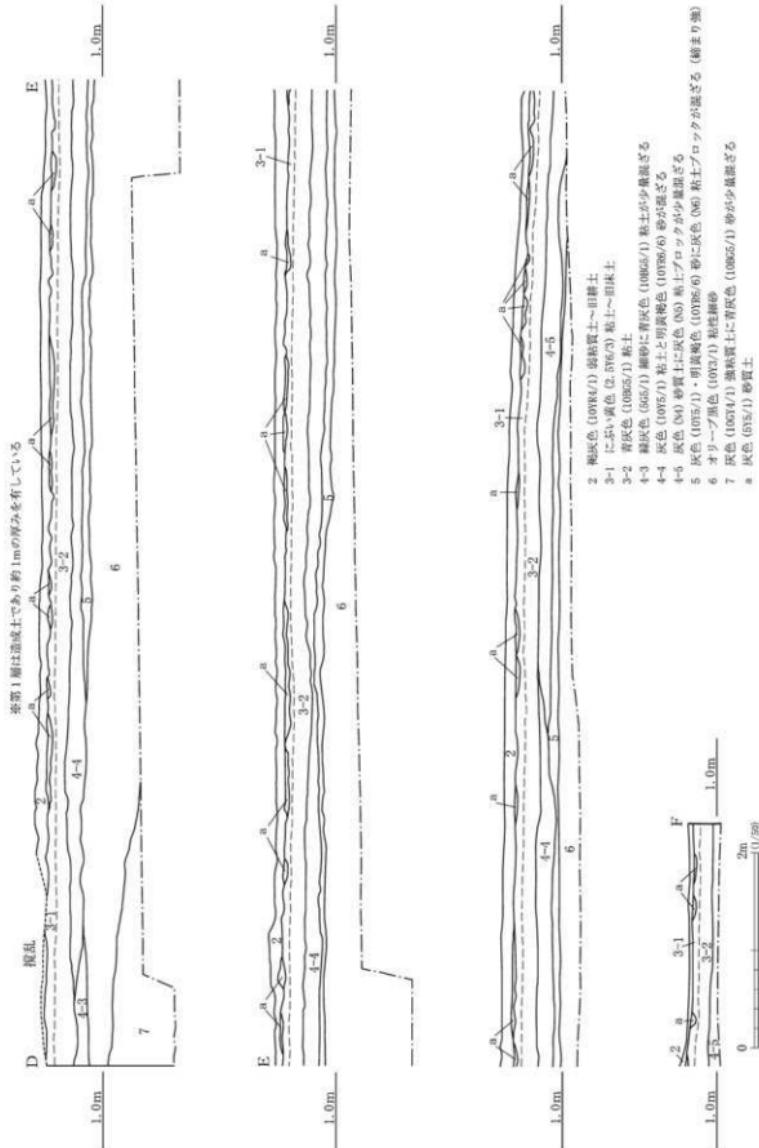


図14 第4調査区土層断面図

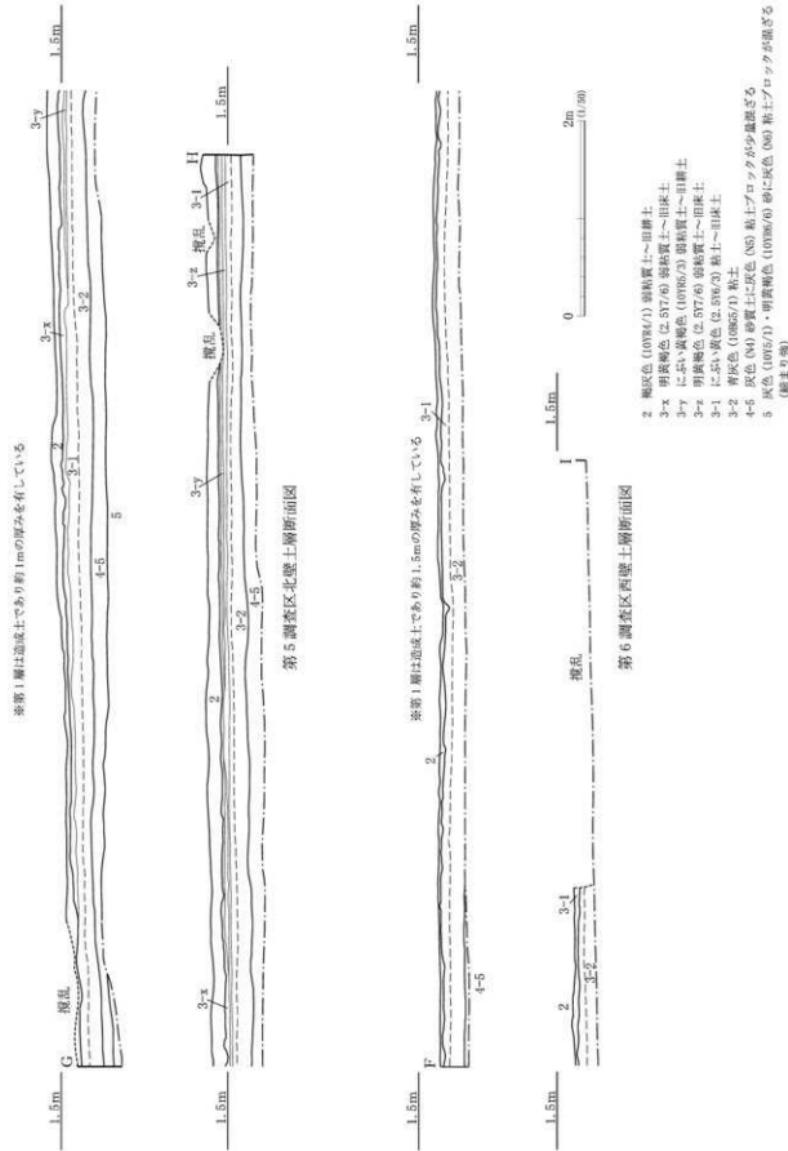


図 15 第5・第6調査区土層断面図

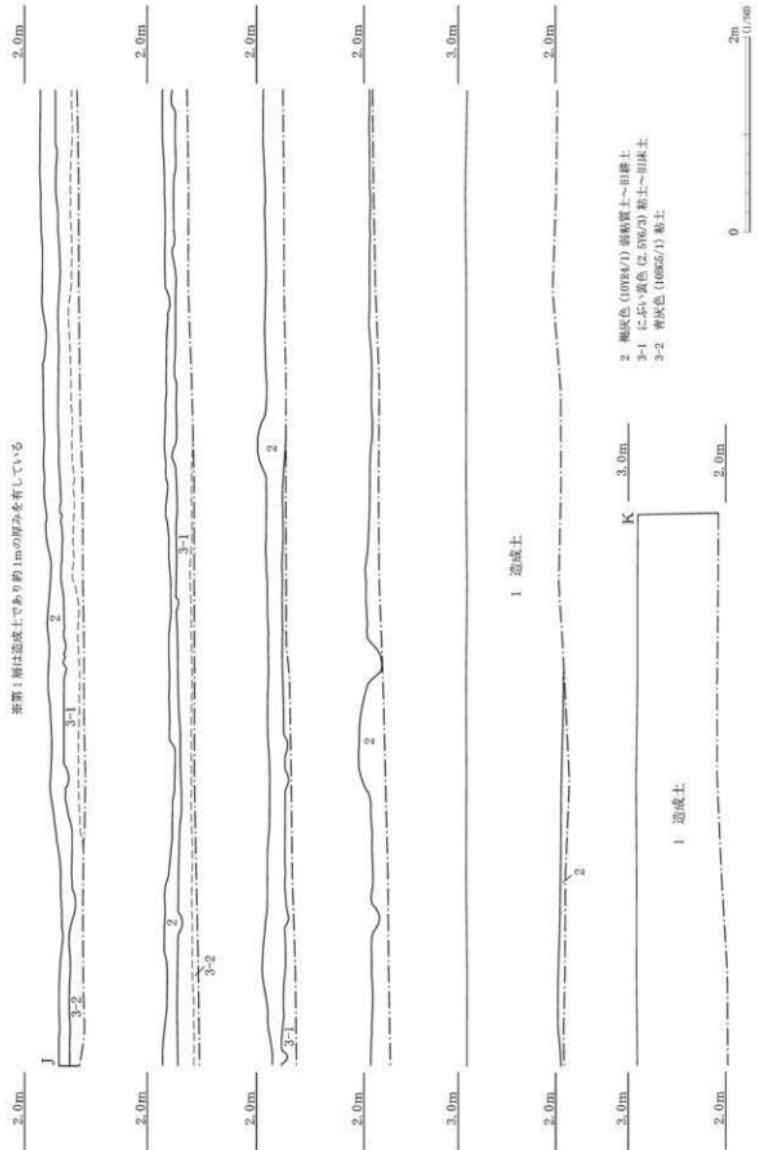


図 16 第7調査区土層断面図①

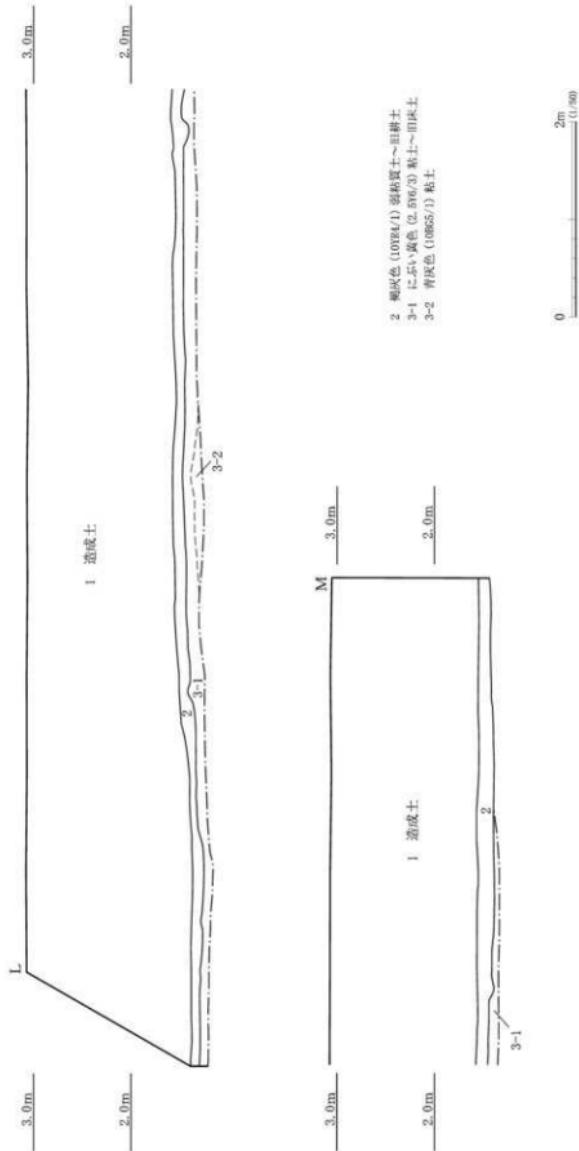


図 17 第7調査区土層断面図②

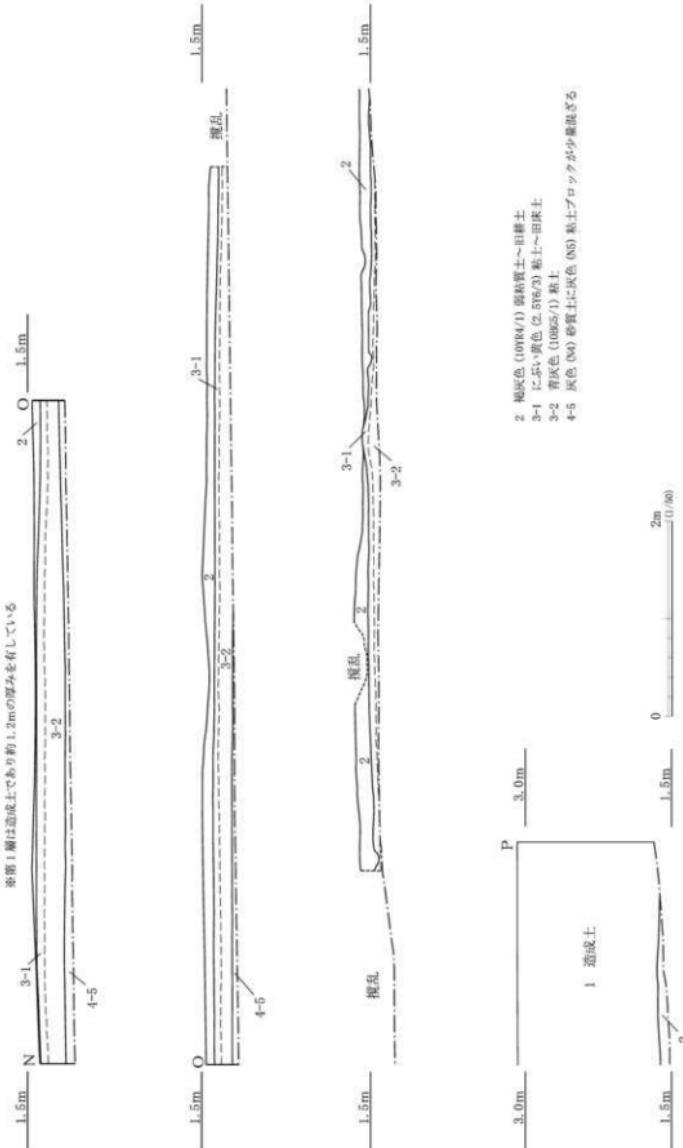


図 18 第7調査区土層断面図③

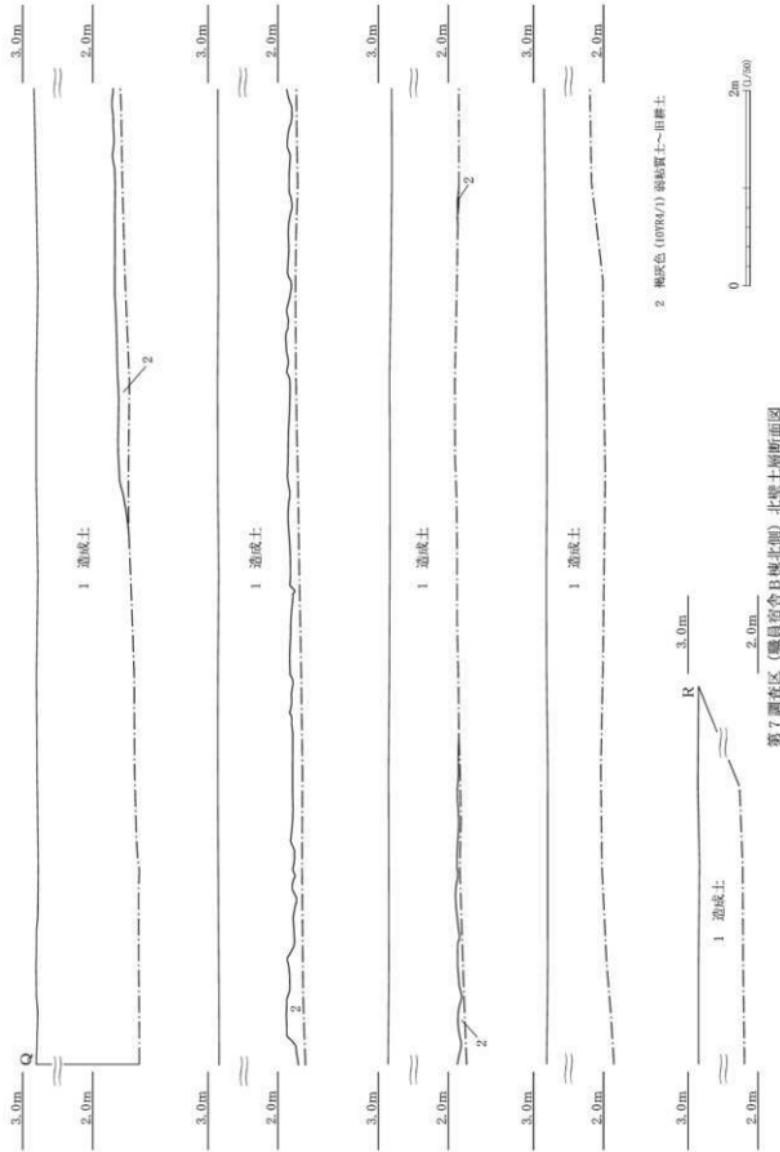


図 19 第7調査区土層断面図④

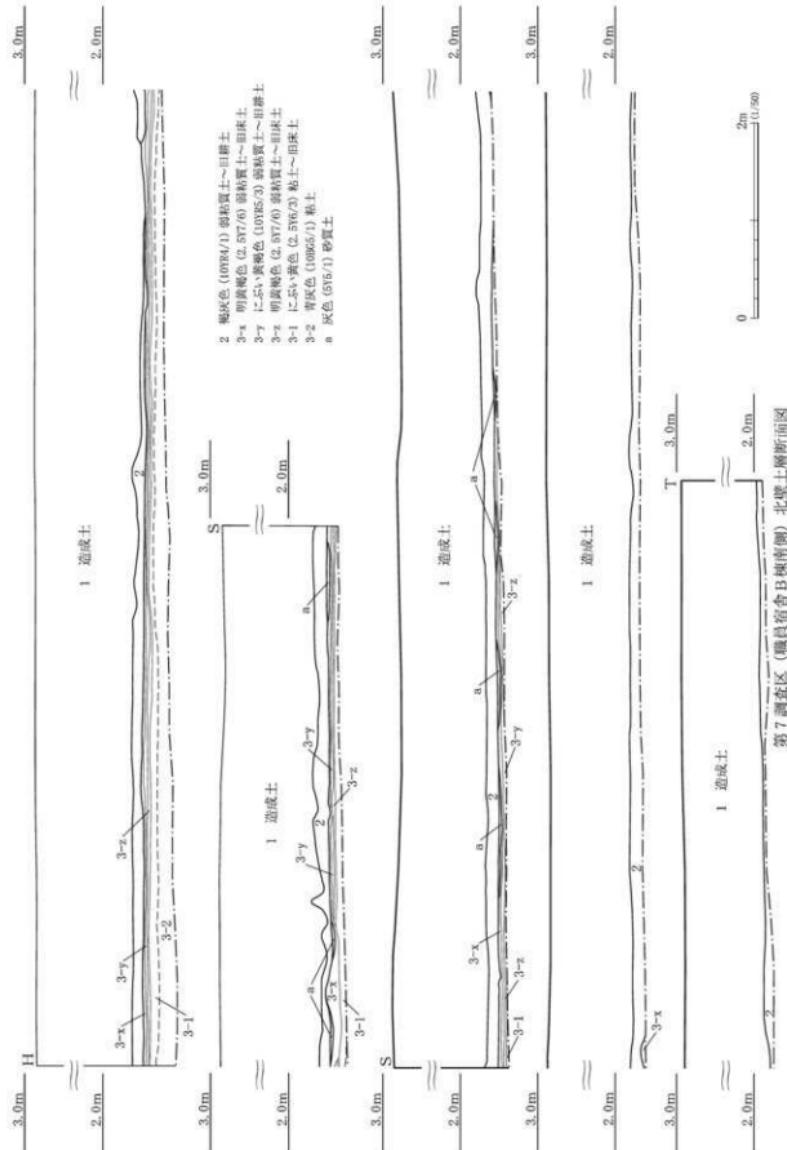


図 20 第7調査区土層断面図⑤



写真22 第2調査区土層断面①（北東から）



写真23 第2調査区土層断面②（北東から）



写真24 第3調査区土層断面（南から）



写真25 第4調査区土層断面（南西から）



写真26 第5調査区土層断面（南東から）



写真27 第6調査区土層断面（南東から）



写真28 第7調査区(A棟北)土層断面（南西から）



写真29 第7調査区(B棟南)土層断面（南東から）

(地下オイルタンク他)工事に伴う試掘調査で確認した第7層と性格を等しくするものと考えられるが、前者では大量の貝類が検出されているのに対し、本調査地での貝類の埋存密度は希薄と言える。

(4) 遺構(写真30・31)

今回の調査では、第2層下、第3-1層上面において検出された水田耕作関連の遺構しか確認されていない。調査地の過去においての地盤状況は、第3-2層形成期以前は脆弱な水底及び水流堆積であり、人類が陸上生活を行えた環境にないものと推定される。第3-2層の形成をもってはじめて調査地周辺は安定した地盤を得ることとなり、水田としての土地利用が開始したものと考えられる。

第3-2層上面で検出された遺構は、溝状遺構および耕作に伴う歩行跡、畝と推定される高まりなどである。いずれも方向は南東一北西方向である。これらの遺構については図化等記録作業を行っているが、古地図を見ると昭和13年(1938)に発行された『宇部市全図』では調査地は田地となっていることがわかる。よってこれらの遺構は土地造成前の最終的な土地利用状況を反映しているものとして、ここでは第3-1層上面の検出写真を掲載するにとどめたい。

(5) 遺物(図21~25、写真32~41)

今回の調査で確認した堆積層の内、造成土および基本層序第5層、基本層序第7・8層は無遺物層であったが、他層は良好な遺物包含層であった。出土した人工遺物の総数は1972点に登り、その他に植物遺体(貝類、獸骨類、植物種子類)なども出土している。本書の作成には時間的な制約が存在するため、遺物の大多数は図化作業を終了していない状況である。ここでは各層毎に遺物をピックアップし、概略を記すこととする。

a. 第2層出土遺物

前述したように第2層は調査地造成前の最終的な耕土層であり、層中には近現代に属する遺物が存在する。1から13は陶磁器。この内3は陶胎染付の碗。5は青磁蓋。焙烙蓋か。6は輪花紅皿。7は陶器蓋。土瓶蓋か。9は陶器蓋。外面に縦方向の平行タタキ痕が残る。10は陶器底部であり、外面に胎土目



写真30 第3調査区第3-1層上面検出状況 (南西から)



写真31 第4調査区第3-1層上面検出状況 (西から)

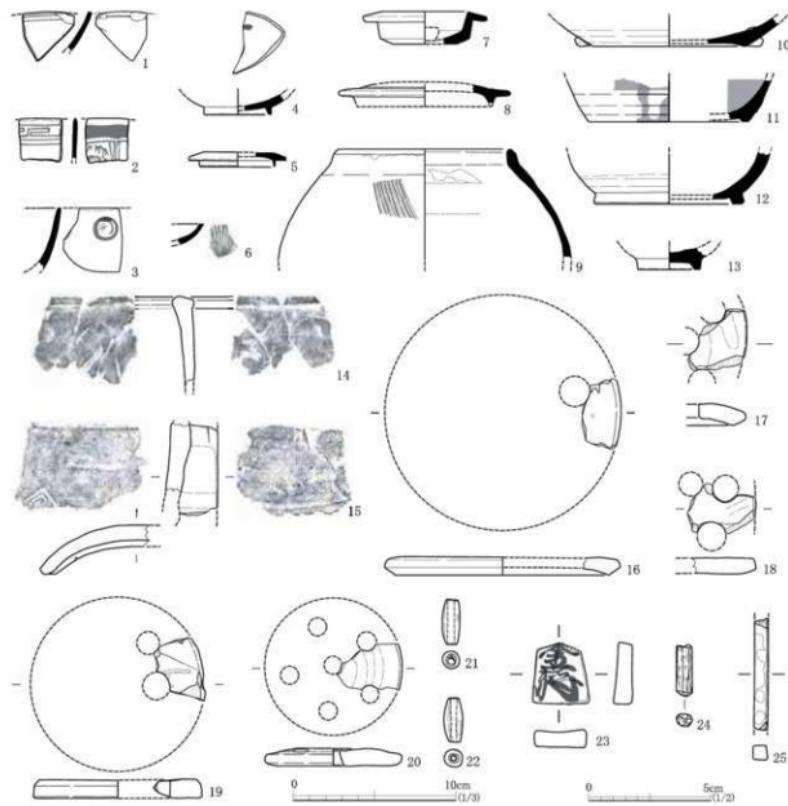


図21 第2層出土遺物実測図

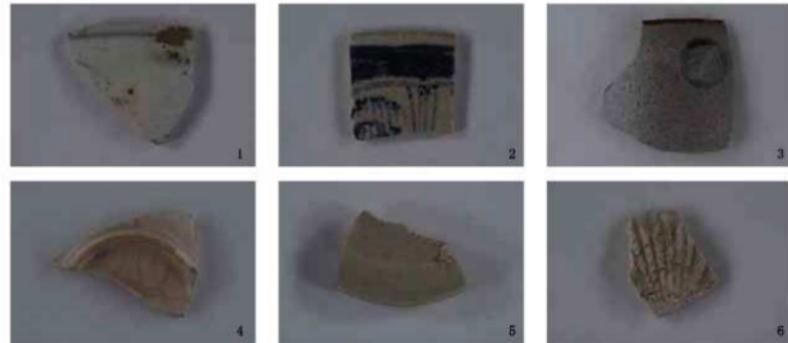


写真32 第2層出土遺物



写真33 第2層出土遺物

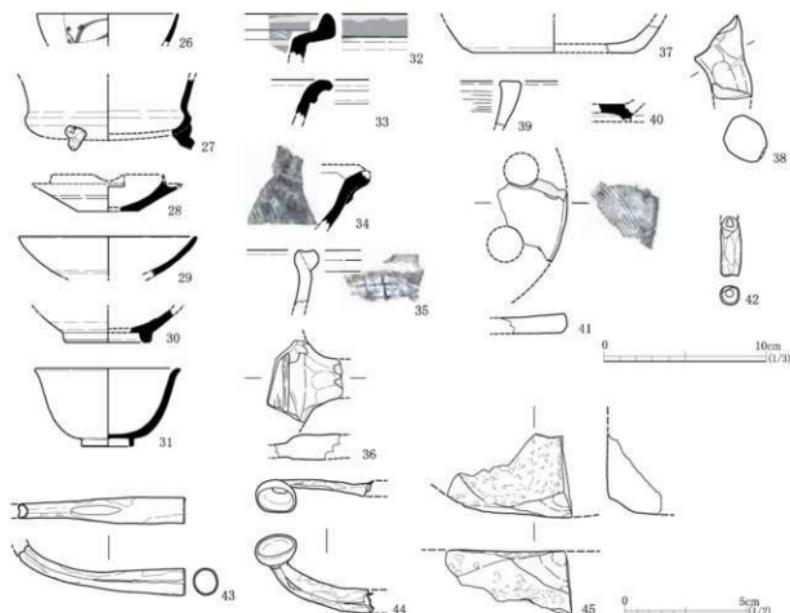


図22 第3-1層出土遺物実測図

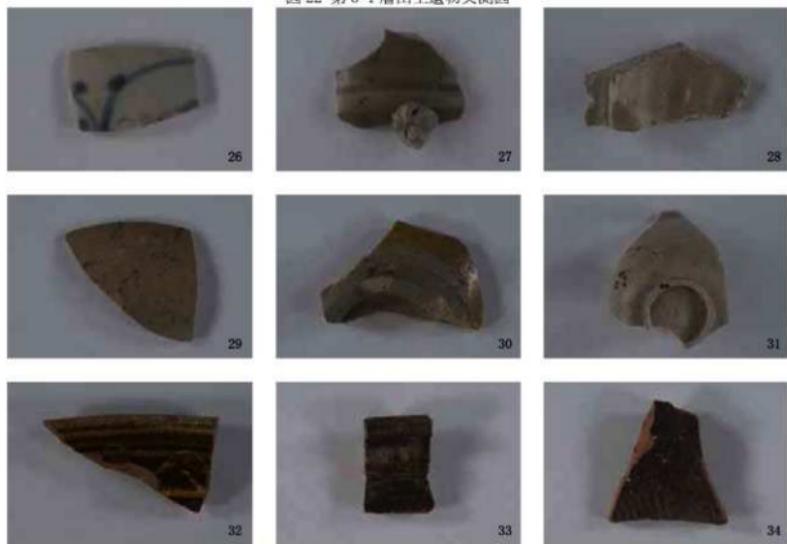


写真34 第3-1層出土遺物



写真35 第3-1層出土遺物

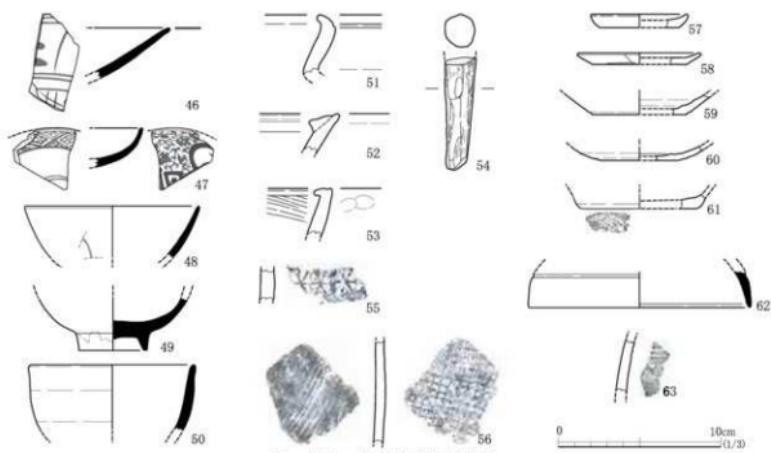


図23 第3-2層出土遺物実測図



写真36 第3-2層出土遺物



写真 37 第3-2層出土遺物

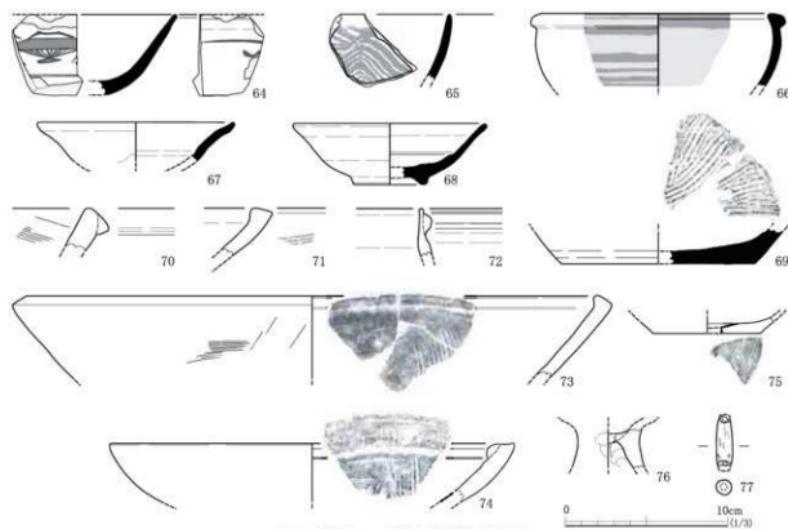


図24 第3-1・2層出土遺物実測図



写真38 第3-1・2層出土遺物



写真39 第3-1・2層出土遺物

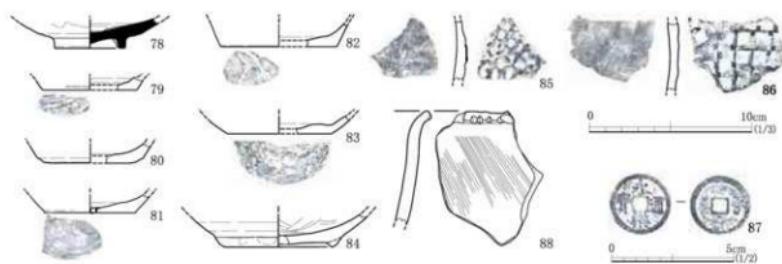


図25 第4層・第6層出土遺物実測図



写真40 第4層・第6層出土遺物



写真41 第4層・第6層出土遺物

が付着する。14は土師器甕口縁部。やや内湾して收まる形態であり、端部は外面に折り返し、内面は肥厚させる。外面調整は継ハケ後横ナデ、内面は指押さえと横ナデであるが、両面ともに板状工具の木口による圧痕が見られる。15は土師質焼成された土製品である。凸面に刻印が施され、内面には布目が観察される。焼成状況や器壁の薄さに問題は残るもの、ここでは丸瓦として報告する。16から20は土師器サナ。21・22は土錐。23は磁製の将棋駒「金」。基底部が釉剥ぎされ砂目が残ることから、絵付け、施釉後に直立させた状態で本焼されたことがわかる。24は基形の石器。全面を緻密に研磨しており、断面形態は7~8角形状を呈している。先端部を鈍く尖らせているが、用途不明品である。25は棒状のガラス製品。断面方形であり半損している。用途不明品であるが、笄などの可能性も考えられるため掲載した。

b. 第3-1層出土遺物

ここで第3-1層として報告するものは、第3-2層上面が床土として利用されたために土壤化した部分と、第2層の下位に存在する旧耕土および旧床土から出土したものが混在する。

26から34は陶磁器。27は粗雑な脚を有する香炉。28は磁胎陶器の灯明受け皿。31は磁胎陶器の小型碗。19世紀以降の所産。31は陶器擂鉢の片口片。35から38は瓦質土器。36は把手状の破片であるが、熔接の把手と考えられる。38は足鍋の脚部片。39は土師器甕の口縁部片。端部内面を肥厚させる。調整は外面がナデ、内面が横ハケ。40は高台を有する須恵器坏底部片。41は土師器サナ。片面にハケ調整が見られる。42は土錐。43・44は銅製煙管の雁首。45は花崗岩製の石製品であるが、小破片であるため用途不明品。平面形態が円形に復元されることから石臼片である可能性を有する。

c. 第3-2層出土遺物

第3-2層は非常に硬質な粘土層であり、当館の過去の調査で度々遺物包含層として報告されているいわゆる「青灰色粘土層」である。今回の調査においても本層からは多量の遺物が出土している。

46から50は陶磁器。49は磁器碗であるが、高台部分には釉薬が及んでおらず、焼成は素焼き状態を保っている。トキン状高台。51から56は瓦質土器。54は足鍋の脚部片。55の外面には方形区画のスタンプが連続して施されている。火鉢片か。56は体部片。外面には格子タキが、内面にはハケ調整が施されている。57から61は土師器。57から60は皿であり、59の底部外面には糸切り痕が残る。61は体部の立ち上がりから見て坏か。底部外面に糸切り痕が残る。62は須恵器坏蓋口縁部片。古墳時代後期中頃の所産。63は弥生土器片。外面には現状で3条の沈線が残る。調整は外面が縦ハケ、内面がナデ。

d. 第3-1・2層出土遺物

各調査区において、土層観察用の畦の崩落や、矢板の土の引き込み作用によって、出土遺物の所属層を判断しかねるもののが生じた。ここに掲載するのは第3-1層もしくは第3-2層に埋存していたことは確実であるが、両者の判別がつかなかったものである。

64から69は陶磁器。64は磁器碗口縁部片。見込みには2条の圈線と伴に扇が描かれる。65は陶器口縁部片。内面刷毛目。69は粗陶器擂鉢底部片。70から73は瓦質土器。73は擂鉢片。口縁端部内面を三角形状に肥厚させる。74は土師質土器の擂鉢片。口縁端部内面を蒲鉾状に肥厚させる。75は土師器皿底部片。底部外面に糸切り痕が残る。76は土師器高坏の脚柱部片。調整はナデ及び指押さえ。77は土錘である。

e. 第4層出土遺物

78は第4層上面から出土した陶器皿もしくは碗の底部片。高台と見込みに砂目が見られる。トキン状高台。79から83は土師器皿もしくは坏の底部片。79、81～83は底部外面に糸切り痕が残る。84は椀の底部片。底部は糸切りの後外周に高台を貼り付ける。高台の断面形態は鈍い三角形である。椀内面は丁寧に磨かれている。ここでは白色土器として報告する。87は1403年初鋤の明錢「永楽通宝」。

f. 第6層出土遺物

第6層は汽水行きに生息する貝類が検出される水底堆積層であり、調査地周辺の古環境の復元に重要な意味を与える。

88は弥生時代前期に属する甕の口縁部から体部片。口縁部は緩やかに外反しており、下端部に刻目を施す。風化が激しく施文具は特定できない。体部外面は左斜め上がりの縦ハケ。内面はナデか。第6層からはこの他に88と同一個体の可能性を有する体部片や、内外面にハケ調整が行われている弥生土器もしくは土師器片などが出土しているが、いずれも小片であるため掲載を略す。

(6) 小結

本年度は、小串構内北部地域を対象にした発掘調査を2件(本調査と8月から9月にかけて行った医学部基幹整備(地下オイルタンク他)工事に伴う試掘調査)実施したことにより、調査地周辺の歴史的環境の復元に大きな手がかりを得ることとなった。2件の調査地で確認した基本層序は基本的に統一のとれたものとなっている。概略を記すると、造成土下が旧耕土であり、その下層に厚く堅固な粘土層が存在する。その下層は砂を中心とした脆弱な堆積層であり、人類が陸上生活を行えた環境ではない。さらに下層は汽水域の水底堆積層である。各堆積層の性格については推論を既述したのでここでは再記しない。いずれにせよ本年度の調査によって、小串構内北部地域では造成土下に人工遺物が密に埋存する堆積層が存在する事実が明白となった。今後とも埋蔵文化財の保護には十分な注意が必要である。

表4 出土遺物(土器)観察表

法量()は復元値

遺物番号	地区	層位	器種	部位	法量(cm)			色調 ①外面 ②内面	胎土	備考
					①口径	②底径	③器高			
1	4	2	磁器 瓢	口縁部				素地 灰白色(10Y8/1) 釉 透明	精緻	染付
2	3	2	磁器 瓢	口縁部				素地 灰白色(10Y8/1) 釉 透明	精緻	染付
3	4	2	陶器 瓢	口縁部				素地 灰白色(N7) 釉 透明	精緻	陶胎染付
4	7	2	磁器 盆	底部	②(4.0)			素地 灰白色(5Y8/1) 釉 透明	精緻	染付 墨付釉剥ぎ
5	4	2	青磁 蓋	口縁部	①(4.5)	③0.9		素地 灰白色(7.5Y8/1) 釉 明緑色(7.5GY8/1)	精緻	
6	4	2	磁器 紅皿	口縁部				素地 灰白色(5Y8/1) 釉 透明	精緻	
7	7	2	陶器 蓋	口縁部 ～体部	①(5.8)	③2.0		素地 灰黄色(2.5Y7/2) 釉 オリーブ灰色 (10YR6/2)	精緻	土灰釉 土瓶蓋か
8	7	2	陶器 蓋	口縁部	①(8.2)			素地 灰色(10Y6/1) 釉 透明	0.1～0.5mm φの 細砂粒少量混ざる	
9	4	2	陶器 壺	口縁部 ～体部	①(10.5)			素地 浅黄色(2.5Y7/3) 釉 灰白色(5Y7/2)	精緻	灰釉
10	7	2	陶器 焼か	底部	②(9.4)			素地 灰白色(7.5Y7/1) 釉 黄オリーブ色(5Y6/2)	精緻	胎土目
11	7	2	陶器 壺か	底部	②(9.8)			素地 灰黄色(2.5Y6/2) 釉 青黒色(5PB7/3)	精緻	鉄釉
12	4	2	陶器 瓢または鉢	底部	②(9.0)			素地 淡黄色(2.5Y8/3) 釉 灰色(N8)	精緻	藁灰釉
13	7	2	陶器 瓢	底部	②(3.8)			素地 灰白色(2.5Y8/2) 釉 黒色(10YR2/1)	やや粗 やや粗 墨付釉剥ぎ	鉄釉 墨付釉剥ぎ
14	3	2	土師器 壺	口縁部			①②にぶい緑色(7.5YR6/4)	0.5～1mm φの砂粒 少量混ざる		
15	7	2	丸瓦か				①②浅黃橙色(10YR8/3)	密	刻印	
16	7	2	土師器 サナ	端部	③1.1径(14.5)		①②にぶい黄橙色(10YR7/4)	0.1～0.5mm φの細砂粒 極少量混ざる		
17	7	2	土師器 サナ	端部			①②にぶい緑色(7.5YR7/4)	0.1～5mm φの砂粒 少量混ざる		
18	7	2	土師器 サナ	端部			①②にぶい黄橙色(10YR7/4)	0.1～0.5mm φの細砂粒 少量混ざる		
19	7	2	土師器 サナ	端部	③1.2径(10.8)		①②にぶい緑色(7.5YR6/4)	0.1～0.5mm φの細砂粒 少量混ざる		
20	7	2	土師器 サナ	端部	③1.1径(8.4)		①②にぶい黄橙色(10YR7/2)	0.1～0.5mm φの細砂粒 少量混ざる		
25	2	3-1	磁器 瓢	口縁部	①(8.6)		素地 灰白色(2.5GY8/1) 釉 透明	精緻	染付	
27	5	3-1	磁器 香炉	底部～ 体部	②(10.2)		素地 灰色(N8) 釉 オリーブ灰色 (2.5GY6/1)	精緻		
28	3	3-1	陶器 灯明受皿	底部～ 体部	②(3.6)		素地 灰白色(2.5Y7/1) 釉 透明	精緻	磁胎	
29	4	3-1	陶器 盆	口縁部	①(10.8)		素地 灰黄色(2.5Y6/2) 釉 透明	精緻		
30	3	3-1	陶器 瓢	底部	②(5.2)		素地 灰色(N8) 釉 明黄褐色(2.5Y6/6)	精緻	灰釉	
31	5	3-1	陶器 瓢		①(9.0)②3.2③4.8		素地 灰白色(7.5Y7/2) 釉 透明	精緻	磁胎	
32	2	3-1	陶器 焼か	口縁部			素地 にぶい赤褐色(5YR5/3) 釉 暗赤褐色(5YR3/3) 淡黄褐色(10YR8/3)	精緻	鉄釉 藁灰釉	
33	5	3-1	陶器 鉢	口縁部			素地 にぶい赤褐色 (2.5YR5/4) 暗赤褐色(2.5YR3/1)	精緻	鉄釉	
34	3	3-1	陶器 楠鉢	口縁部			素地 にぶい橙色(5YR6/4) 釉 黒褐色(VR3/1)	精緻	鉄釉	
35	7	3-1	瓦質土器 鉢か	口縁部			①灰色(N4) ②浅黄色(2.5Y7/3)	0.5～5mm φの砂粒 少量混ざる		

遺物番号	地区	層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高		色調 ①外面 ②内面	胎土	備考
					①	②			
36	7	3-1	瓦質土器 焙烙	把手か			①②暗灰色(N3)	0.1~1mm φ の砂粒 少々混ざる	
37	7	3-1	瓦質土器	底部	②(10.0)		①暗灰色(N3) ②浅黄色(2.5Y7/2)	0.1~1mm φ の細砂粒 極少量混ざる	
38	7	3-1	瓦質土器 足鍋	脚部			①②灰白色(5Y8/1)	0.5~2mm φ の砂粒 少々混ざる	
39	4	3-1	土師器 壺	口縁部			①②灰白色(5Y8/1)	0.1~0.5mm φ の細砂粒 少々混ざる	
40	4	3-1	須恵器 壺	底部			①②青灰色(5B5/1)	密	
41	3	3-1	土師器 サナ	端部	③(1.2径)(14.4)		①②浅黄色(10YR8/3)	0.5~2mm φ の砂粒 少々混ざる	
46	7	3-2	磁器 盆	口縁部			素地 灰白色(2.5Y8/2) 胎 透明	精緻	染付
47	3	3-2	磁器 盆	口縁部			素地 灰白色(10Y8/1) 胎 透明	精緻	染付
48	5	3-2	磁器 碗	口縁部～体部	①(10.6)		素地 灰白色(2.5GY8/1) 胎 透明	精緻	
49	6	3-2	磁器 碗	底部～体部	②4.2		素地 にぶい黄橙色 (10YR7/3) 胎 明緑灰色(10G7/1)	精緻	トキン状高台 高台露胎
50	5	3-2	陶器 碗	口縁部～体部	①(10.0)		素地 灰白色(2.5Y8/2) 胎 浅黄色(2.5Y7/3)	精緻	萩
51	3	3-2	瓦質土器 鍋	口縁部			①②灰白色(N7)	0.5~2mm φ の砂粒 極少量混ざる	
52	2	3-2	瓦質土器 鉢	口縁部			①②灰白色(2.5Y7/1)	0.1~0.5mm φ の細砂粒 極少量混ざる	
53	4	3-2	瓦質土器 鉢か	口縁部			①②暗灰色(5Y8/1)	0.5~2mm φ の砂粒 少々混ざる	
54	3	3-2	瓦質土器 足鍋	脚部			①②灰色(N4)	0.1~0.5mm φ の細砂粒 少々混ざる	
55	6	3-2	瓦質土器	体部			①暗灰色(N3) ②灰白色(5Y8/1)	0.1~1mm φ の砂粒 少々混ざる	
56	3	3-2	瓦質土器	体部			①②灰白色(N8)	1~5mm φ の砂粒 多く混ざる	
57	4	3-2	土師器 盆		①(5.8)②(5.0)③0.8		①②灰黃褐色(10YR5/2)	0.1~0.3mm φ の細砂粒 極少量混ざる	
58	4	3-2	土師器 盆		①(7.4)②(5.8)③0.7		①②浅黄色(2.5Y8/3)	0.1~0.5mm φ の細砂粒 極少量混ざる	
59	5	3-2	土師器 盆	底部	②(5.8)		①②灰黄色(2.5Y7/2)	0.1~0.5mm φ の細砂粒 極少量混ざる	
60	2	3-2	土師器 盆	底部	②(4.8)		①②浅黄色(2.5Y8/2)	0.1~1mm φ の砂粒 少々混ざる	
61	7	3-2	土師器 壺か	底部	②(7.2)		①②にぶい黄橙色(10YR7/4)	0.1~0.3mm φ の細砂粒 極少量混ざる	底部糸切り
62	5	3-2	須恵器 壺蓋	口縁部	①(13.6)		①灰色(N6)②灰白色(N5)	0.1~0.3mm φ の細砂粒 極少量混ざる	
63	5	3-2	弥生土器	体部か			①②灰白色(2.5Y8/2)	0.5~2mm φ の砂粒 少々混ざる	
64	6	3	磁器 碗	口縁部～体部			素地 灰白色(N8) 胎 透明	精緻	染付
65	2	3	陶器 碗か	口縁部			素地 にぶい橙色(7.5YR6/4) 胎 透明	精緻	刷毛目
66	1	3	陶器 鉢	口縁部～体部	①13.4		素地 黄灰色(2.5Y6/1) 胎 黒褐色(7.5YR2/2)	精緻	鉄釉
67	1	3	陶器 盆	口縁部～体部	①12.0		素地 にぶい黄褐色 (10YR7/3) 胎 灰オリーブ色(5Y6/2)	精緻	土灰釉
68	1	3	陶器 盆		①(11.8)②(4.4)③3.75		素地 灰白色(N7) 胎 灰色(10Y6/1)	精緻	砂目 墨付釉剥ぎ
69	4	3	粗陶器	底部	②(12.0)		①にぶい赤褐色(5YR5/3) ②橙色(YR6/6)	0.1~1mm φ の砂粒 少量混ざる	

遺物番号	地区	層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高		色調 ①外面 ②内面	胎土	備考
					①	②			
70	3	3	瓦質土器 鉢	口縁部			①②黄灰(2.5Y6/1)	0.5~2mm φの砂粒 多く混ざる	
71	3	3	瓦質土器 鉢	口縁部			①②褐灰色(10YR6/1)	0.1~1.5mm φの砂粒 少量混ざる	
72	3	3	瓦質土器	口縁部			①②灰白色(5Y8/1)	0.1~1mm φの砂粒 少量混ざる	
73	2	3	瓦質土器 摺鉢	口縁部~体部	①(34.6)		①②灰色(5Y5/1)	0.1~1mm φの砂粒 少く混ざる	
74	3	3	土質土器 摺鉢	口縁部~体部	①(21.5)		①にぶい黄色(2.5Y6/4) ②橙色(2.5YR6/6)	0.1~1mm φの砂粒 多く混ざる	
75	3	3	土師器 皿	底部	②(6.6)		①②にぶい黄橙色(10YR7/4)	0.1~0.5mm φの細砂粒 極少量混ざる	
76	2	3	土師器 高壺	脚柱部			①②灰黄色(2.5Y7/2)	0.1~2mm φの砂粒 少量混ざる	
78	4	4上	陶器 皿か	底部	②4.3		裏地 灰黃褐色(10YR6/2) 輪 明オーラー灰 (5GY7/1)	精緻	トキン状高台 砂目・灰釉
79	3	4	土師器 皿か	底部	②(5.8)		①②にぶい黄橙色(10YR7/3)	0.1~0.5mm φの細砂粒 やや多く混ざる	底部糸切り
80	4	4	土師器 壺か	底部	②(5.8)		①灰黄褐色(10YR6/2) ②にぶい黄褐色(10YR7/4)	0.1~0.3mm φの細砂粒 極少量混ざる	
81	4	4	土師器 皿か	底部	②(5.5)		①暗灰色(N3) ②灰黄褐色(10YR5/2)	0.1~0.5mm φの細砂粒 極少量混ざる	底部糸切り
82	4	4	土師器 壺か	底部	②(7.1)		①②にぶい黄橙色(10YR7/3)	0.1~0.3mm φの細砂粒 極少量混ざる	底部糸切り
83	4	4	土師器 皿	底部	②6.4		①②灰褐色(7.5YR5/2)	0.1~1mm φの砂粒 少量混ざる	底部糸切り
84	3	4	白色土器 梗	底部~体部	②6.6		①②灰白色(5Y8/1)	精緻	内面ミガキ
85	6	4	瓦質土器	体部			①灰白色(7.5YR8/2) ②灰白色(N4)	0.5~2mm φの砂粒 少量混ざる	
86	5	4	瓦質土器	体部			①にぶい橙色(5YR7/4) ②暗灰色(N3)	0.5~2mm φの砂粒 少量混ざる	
88	4	6	赤生土器 壺	口縁部~体部			①②灰黄色(2.5Y7/2)	0.5~1.5mm φの砂粒 多量に混ざる	

表5 出土遺物(石器・土製品・ガラス製品・金属器)観察表

法量()は復元値

遺物番号	地区	層位	器種	法量(cm)	重量(g)	材質	備考
21	5	2	土鍤	全長2.8 最大幅1.05	3.78	粘土	色調 橙色(7.5YR6/6)
22	7	2	土鍤	全長2.8 最大幅1.1	2.97	粘土	色調 橙色(7.5YR7/6)
23	4	2	磁製 将棋駒「金」	全長2.5 最大幅2.35	7.17	陶石	染付 基底部砂目
24	6	2	磁形磨製石器	残長2.1 最大幅0.63	1.24	滑石か	
25	4	2	ガラス製品 箕か	残長4.5 最大幅0.55	5	鉛ガラス	
42	7	3-1	土鍤	残長3.6 最大幅1.2	4.32	粘土	色調 にぶい赤褐色(2.5YR5/4)
43	3	3-1	煙管 羽首	残長6.8	8.04	銅	
44	4	3-1	煙管 羽首	残長4.9	5.94	銅	
45	3	3-1	石臼片か	残長5.1 残高2.6	34.54	花崗岩	
77	3	3	土鍤	残長3.05 最大幅1.0	2.27	粘土	色調 橙色(7.5YR6/4)
87	4	4	銅鏡「永楽通宝」	直径2.5 孔径5.5	3.6	銅	

[註]

1)本書第1章第3節の1参照

2)本書第1章第三節の1、14~15頁。

3. 医学部総合研究棟北側連絡用渡り廊下取設工事に伴う立会調査



図 26 調査区位置図

調査地区 小串構内総合研究棟北側空閑地

調査面積 37.5m²

調査期間 平成17年3月8日

調査担当 横山成己

調査結果 医学部総合研究棟の北面に渡り廊下の新設工事が計画されたことを受け、工事掘削時に立会調査を実施することとなった。

掘削範囲は、総合研究棟北面西側に1.3m×1.3mの基礎坑8ヶ所、東側に幅1.2m、長さ10mの基礎坑2ヶ所であった。掘削深度は最深部で現況地表面から0.9mである。調査の結果、全ての掘削は造成土内に止まっており、埋蔵文化財の保護上支障がないことが確認された。

医学部総合研究棟では、新営確定後の平成14年に試掘調査が実施されており、当時の地表面から1.2~1.5mまでが造成土であり、以下が旧耕土(遺物包含層)、粘土層、砂層であることが確認されている。この内砂層からは量的には少ないものの繩文土器、土師器、須恵器、瓦質土器、土師質土器、磁器など多様な遺物が出土している。このように多様な遺物の存在は、これまでの継続的な調査・研究により、主に小串構内の北半部で確認されるということが明らかとなっているが、構内南東部に位置する総合研究棟周辺にも一部及んでいるという事実は重く受け止めなくてはならない。

今後とも調査地周辺での埋蔵文化財の確認および保護には十分に注意を払う必要がある。

[註]

- 1) 村田裕一(2003)「小串総合研究棟新営に伴う試掘調査」、平成15年5月29日山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会資料



写真 42 調査区全景（南西から）

第4節 常盤構内(山口大学工学部構内遺跡)の調査

1. 工学部定査速度応力腐食割れ試験用実験室新設工事に伴う試掘調査

調査地区 常盤構内課外活動棟北側

調査面積 約20m²

調査期間 平成16年8月31日～9月3日

調査担当 横山成己

調査結果

(1) 調査の経緯(図27)

常盤構内北東部の駐車場敷地西側に定査速度応力腐食割れ試験用実験室の新設が計画されたことを受け(発掘調査を要する工事計画として、平成16年6月22日に埋蔵文化財資料館専門委員会にて承認)、開発予定地の埋蔵文化財発掘調査を実施することとなった。開発予定地の内、実験室建設予定地は谷を埋め立てた造成地であることが明白であり、開発による掘削が地山面まで到達する可能性はない判断されたため、調査は課外活動棟の北西侧道路における配水管予定地(A区)と、課外活動棟北側空閑地における配水管・埋設電線予定地(B区)を対象地とした。A区は幅0.6m×長さ22m、B区は幅0.7m×10.5mの規模を有する。

(2) 基本層序(図28、写真43・44)

A・B区で確認した層序は以下の通りである。

第1層…アスファルト舗装(厚5cm)

第2層…鉱滓(層厚7~50cm)

第3層…造成土(層厚14~100cm以上)

第4層…明黄褐色(10YR7/6)粘性砂質土に赤褐色(5YR5/8)粘土が混ざる~地山

(3) 小結

今回の調査では、A・B両区の南西部において造成土直下に地山を検出した。地山は北東方向に向かって緩やかに降下しており、調査区北東端部では現況地表下1.2m以下に下っている。常盤構内の北端部は北に降下する谷地形を埋め立てて造成されていることから、これは旧地形を反映しているものと考えられる。地山面には遺構は存在しておらず、仮に過去において存在していたとしても土地造成さるの掘削により現在は消滅したものと思われる。

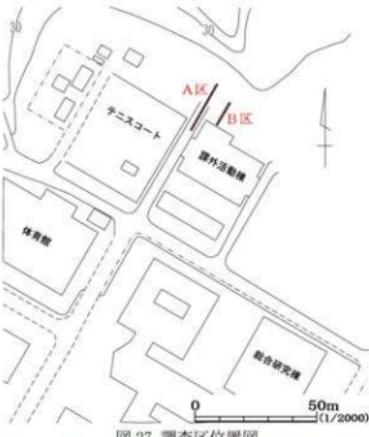


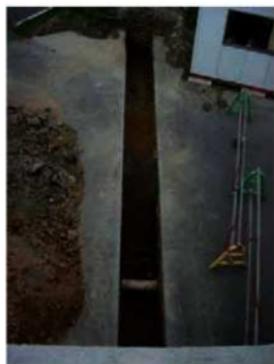
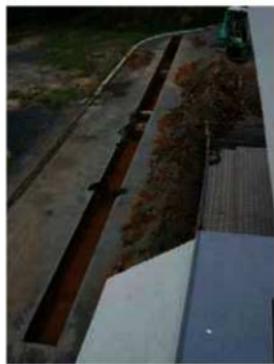
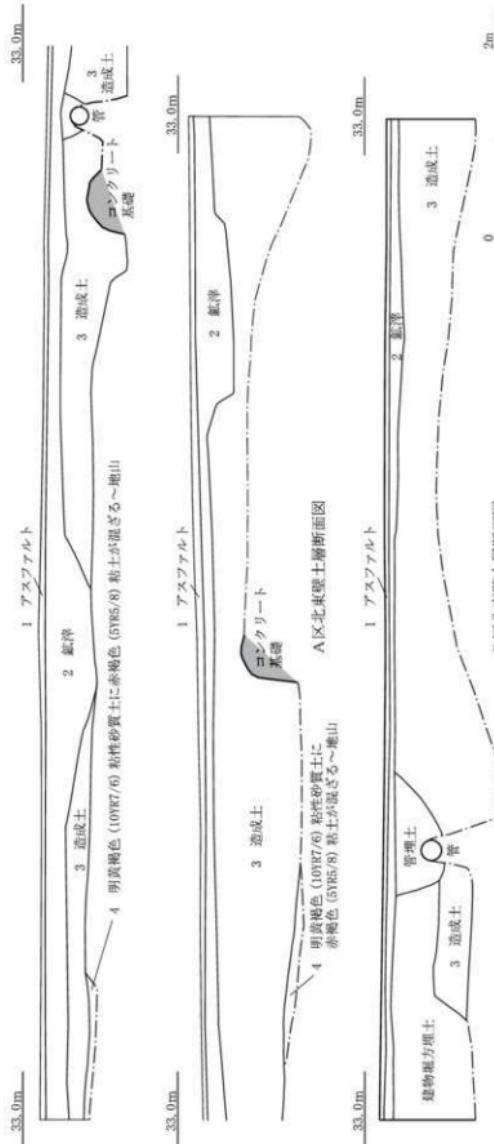
図27 調査区位置図



写真43 A区北東壁土層断面(南東から)



写真44 B区北東壁土層断面(南東から)



2. 工学部光半導体素子実験室新営に伴う試掘調査

調査地区 常盤構内テニスコート北東側空閑地

調査期間 平成16年11月1日 ～11月15日

調査面積 52.5m²

調査担当 横山成己

調査結果

(1) 調査の経緯(図29)

常盤構内北東部、テニスコート北東側の空閑地において、光半導体素子実験室の新営工事が計画されたことを受け(発掘調査を要する工事計画として、平成16年8月20日に埋蔵文化財資料館専門委員会にて承認)、開発予定地の埋蔵文化財発掘調査を実施することとなった。開発予定地は同年9月に実施した調査地(工学部定査速度応力腐食割れ試験用実験室新営工事に伴う試掘調査)の北西に隣接した地点であり、その調査成果から今回の調査地も南西から北東に向かい地山が降下していくことが予想された。従って今回の調査では、地山の高所と予想される新営予定地南西側に幅1.5m×長さ25mの調査区を設け、さらに地山の降下状況を確認するため北東に直行する方向に調査区を設けた。従って調査区全体の形状はT字形を呈している。

(2) 基本層序(写真48・49)

調査区全域で確認した層序は以下の通りである。

第1層…表土(層厚10～40cm)

第2層…造成土(層厚10～150cm)

第3層…明黄褐色(10YR7/6)粘性砂質土に赤褐色(5YR5/8)粘土が混ざる～地山

(3) 遺構(図30、写真50・51)

地山の高所側に設けた南東～北西方向の調査区では、地表面に小規模なピット2基を検出した。造成土上から掘り込まれたものではなかったために慎重に検出・遺構掘削を行ったが、ピット1の埋土からは近現代のガラス容器や磁器片が出土した。従ってこのピットは当地が造成される以前に形成されたものではあるが、時期的に新しいものであることが確認された。ピット2は埋土中に遺物を含まなかつたが、埋土の性質はピット1と類似していることから、その性格もピット1と同様なものであろう。

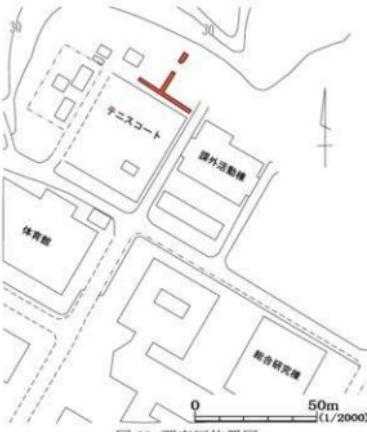


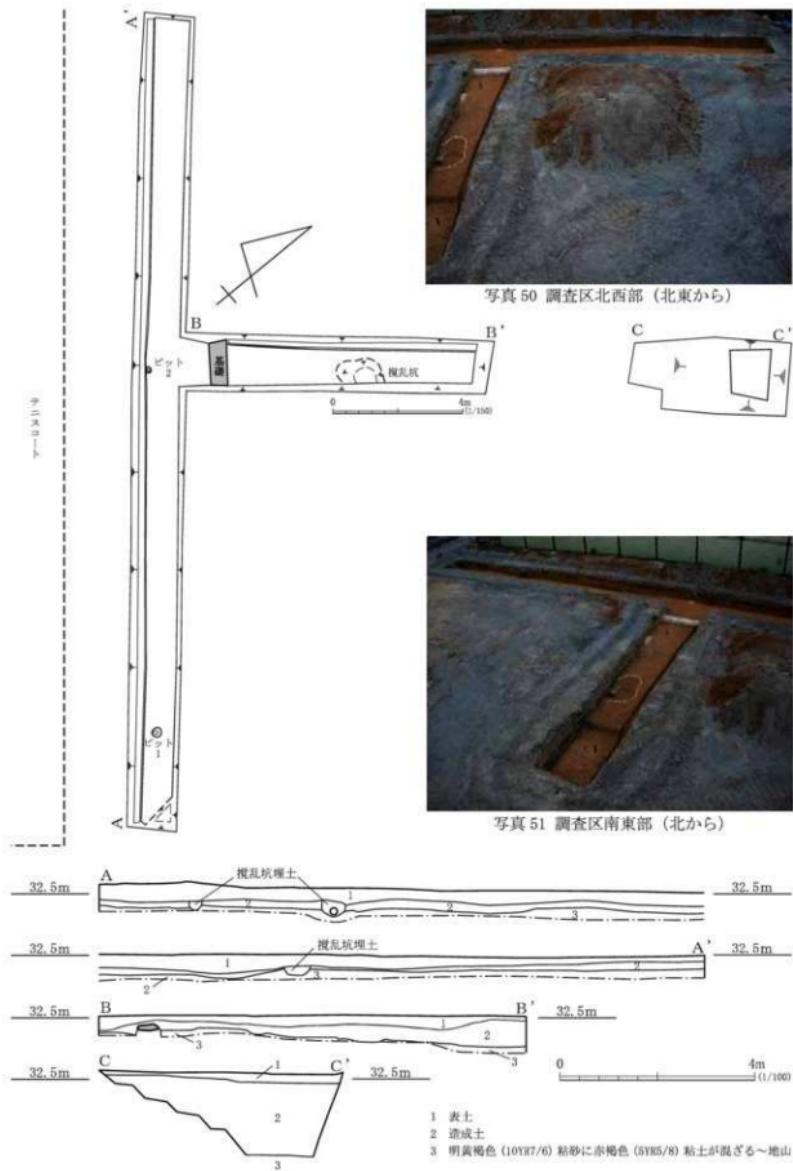
図29 調査区位置図



写真48 調査区南西部南西壁土層断面(北西から)



写真49 調査区北部北西壁土層断面(南から)



(3) 小結

今回の調査では、当初の予測通り南西から北東方向への地山の降下が確認された。地山面は、調査区南西部では現況地表面の下0.4mで検出されるが、北東端部では現況地表面から下に1.8mでの検出となっており、急激な降下を見せている。検出した2基のピットに関しては近現代のものであり、埋蔵文化財保護の対象外である。

本年度に実施した常盤構内北部での2次の試掘調査により、調査地周辺に埋蔵文化財が存在する可能性は極めて低くなったと言える。しかしながら、調査地の南東約200mに位置する国際交流会館新営業調査区では段状遺構が確認されるとともにナイフ形石器が出土している。¹¹⁾今後とも常盤構内での土地掘削に関しては慎重な対応が必要であろう。

[註]

- 1) 田村裕一(2004)「第2章 常盤構内国際交流会館新営業に伴う発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報X VI・X VII』,山口

3. 工学部雨水幹線工事に伴う立会調柶

調柶地区 常盤構内門所衛南側空閑地

調柶期間 平成17年2月3日

調柶面積 9m²

調柶担当 横山成己

調柶結果 宇部市東梶坂地区の浸水を解消するため、宇部市による雨水幹線工事が計画された。工事に伴い常盤構内に立坑の設置が計画されたため、掘削時に立会調柶を実施した。

確認した層序は以下の通りである。

第1層…表土(層厚70cm)

第2層…旧表土(層厚12cm)

第3層…蛇紋岩風化層(層厚90cm以上)～地山

常盤構内南部では、当館がこれまでに実施した調柶によって遺構が検出された事例は皆無である。しかしながら、表土中から須恵器がするなど、過去においては遺跡地であった可能性が十分にある。常盤構内の大部分は大学建設時に大規模に造成され、旧地形は大きく改変されている。従って今後とも埋蔵文化財の確認は困難である可能性が高いと言えるが、継続的な調柶は必要であろう。

[註]

- 1) 河村吉行(1985)「第5章 宇部(常盤構内)工学部校舎新営に伴う試掘調柶」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調柶研究年報III』,山口



図 31 調柶区位置図



写真 52 調柶区断面（北西から）

第5節 その他構内の調査

湯田宿舎B棟自転車置場新設工事に伴う確認調査

調査地区 湯田宿舎(山口市湯田温泉6丁目8-29)

調査面積 約11m²

調査期間 平成17年1月21日

調査担当 田畠直彦

調査結果 湯田宿舎で自転車置場の新設が計画された。工事は自転車置場の基礎部分、幅約3m、長さ約17mの範囲内について、約60cm×60cmの規模で現地表下約50cmまでの掘削を14ヶ所で行うものであった。調査の結果、いずれも造成土の範囲内であり、工事は続行された。



図32 調査区位置図

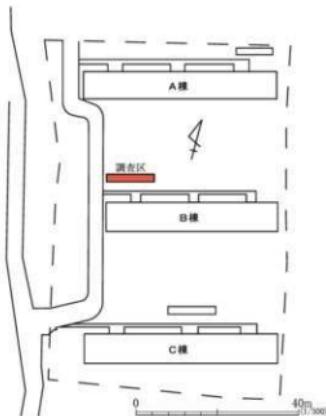


図33 詳細位置図

付節1 平成16年度 山口大学構内遺跡調査要項

山口大学学術情報機構規則

改正 平成16年4月1日規則第139号

(趣旨)

第1条 この規則は、国立大学法人山口大学学則(平成16年規則第1号)第9条第2項の規定に基づき、国立大学法人山口大学(以下「本法人」という。)の学術情報及び情報基盤を総合的に整備する山口大学学術情報機構(以下「機構」という。)に関し必要な事項を定める。

(組織)

第2条 機構は、次の施設をもって組織する。

(1)図書館

(2)メディア基盤センター

(3)埋蔵文化財資料館

2 前項の施設に関し必要な事項は、別に定める。

(業務)

第3条 機構は、次の業務を行う。

(1)学術情報及び情報基盤の戦略的整備計画の策定に関すること。

(2)学術情報及び情報基盤の整備の施策及び実施に関すること。

(3)情報セキュリティの施策及び実施に関すること。

(4)その他機構が必要と認めた事項に関すること。

2 前項の業務を行うため、機構は、各学部、各研究科、全学教育研究施設及び事務組織と相互に連携を図るものとする。

(運営委員会)

第4条 機構に、機構の管理及び運営に関する事項を審議するため、

山口大学学術情報機構運営委員会(以下「運営委員会」という。)を置く。

2 運営委員会に関し必要な事項は、別に定める。

(情報セキュリティ委員会)

第5条 機構に、情報セキュリティに関する事項を審議するため、国立大学法人山口大学情報セキュリティ委員会(以下「情報セキュリティ委員会」という。)を置く。

2 情報セキュリティ委員会に関し必要な事項は、別に定める。

(情報基盤整備委員会)

第6条 機構に、情報基盤の整備に関する事項を審議するため、国立大学法人山口大学情報基盤整備委員会(以下「情報基盤整備委員会」という。)を置く。

2 情報基盤整備委員会に關し必要な事項は、別に定める。

(機構長)

第7条 機構に機構長を置き、学術情報担当副学長をもって充てる。

2 機構長は、機構の業務を統括する。

(副機構長)

第8条 機構に副機構長2名を置き、本法人の専任教授のうちから機構長が指名した者をもって充てる。

2 副機構長は、機構長を補佐する。

3 副機構長の担当は、機構長が定める。

4 副機構長の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、機構長である副学長の任期の終期を超えることはできない。

5 副機構長に欠員が生じた場合の後任の副機構長の任期は、前任者の任期期間とする

(専任大学教育職員)

第9条 機構に、専任大学教育職員を置く。

2 専任大学教育職員の選考は、運営委員会の議に基づき、学長が行う。

3 専任大学教育職員の選考に關し必要な事項は、別に定める。

(事務)

第10条 機構に関する事務は、総務部総務課事務情報化推進室、学術研究部研究協力課及び学務部学務課の協力を得て、学術情報部において処理する。

(雑則)

第11条 この規則に定めるもののはか、機構に關し必要な事項は、別に定める。

附 則

この規則は、平成16年4月1日から施行する。

山口大学学術情報機構運営委員会規則

改正 平成16年4月1日規則第140号

(趣旨)

第1条 この規則は、山口大学学術情報機構規則(平成15年規則第11

号)第4第2項の規定に基づき、山口大学学術情報機構運営委員会(以下「運営委員会」という。)の組織及び運営に關し必要な事項を定める。

(審議事項)

第2条 運営委員会は、山口大学学術情報機構（以下「機構」という。）

に關し、次の事項について審議する。

(1)管理及び運営に関する事項

(2)活動方針に関する事項

(3)予算に関する事項

(4)大学教育職員の人事に関する事項

(5)その他の機構の管理及び運営に關し必要な事項

(組織)

第3条 運営委員会は、次の委員をもって組織する。

(1)機構長

(2)副機構長

(3)埋蔵文化財資料館長

(4)各学部副学部長

(5)医学部附属病院医療情報部長

(6)機構の専任教授

(7)機構長が指名した者若干名

(8)事務局長

(9)学術情報部長

2 前項第8号及び第9号の委員は、前条第4号の事項の審議には参加しないものとする。

(委員の任期)

第4条 前条第7号の委員の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、

委員に欠員が生じた場合の後任の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員長)

第5条 運営委員会に委員長を置き、機構長をもって充てる。

2 委員長は、運営委員会を招集し、その議長となる。

3 委員長に事故あるときは、あらかじめ機構長が指名した副機構長がその職務を代行する。

(議事)

第6条 運営委員会は、委員の過半数の出席により成立する。

2 議事は、出席委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

(委員以外の出席)

第7条 運営委員会が必要と認めたときは、委員以外の者を運営委員会に出席させることができる。

(専門委員会等)

第8条 運営委員会は、必要に応じて専門委員会等を置くことができる。

2 専門委員会等に關し必要な事項は、運営委員会が別に定める。

(事務)

第9条 運営委員会の事務は、学術情報部学術情報課において処理する。

(雑則)

第10条 この規則に定めるもののはか、運営委員会に關し必要な事項は、運営委員会が定める。

附 則

この規則は、平成16年4月1日から施行する。

山口大学埋蔵文化財資料館規則

平成16年4月1日規則第148号

(趣旨)

第1条 この規則は、山口大学学術情報情報規則（平成16年規則第13

9号）第2条第2項の規定に基づき、山口大学埋蔵文化財資料館（以下「資料館」という。）の組織及び運営に關し必要な事項を定める。

(目的)

第2条 資料館は、文化財保護法（昭和25年法律第214号）に基づき、国立大学法人山口大学（以下「本法人」という。）に所在する遺跡の埋蔵文化財の発掘調査及び研究を行い、出土品を収蔵・公開することを目的とする。

(業務)

第3条 資料館は、次の業務を行う。

(1)本法人構内等から出土した埋蔵文化財の収蔵・展示及び調査研究

(2)本法人構内等における埋蔵文化財の発掘調査及び報告書の刊行

(3)その他の埋蔵文化財に関する必要な業務

(職員)

第4条 資料館に、次の職員を置く。

(1)館長

(2)副館長

(3)資料館所属の専任大学教育職員

(4)その他必要な職員

2 埋蔵文化財に関する特別な分野の調査研究を行うため、資料館に特別調査員若干名を置くことができる。

3 特別調査員は、専門委員会の議に基づき、館長が委嘱する。

(館長)

第5条 館長は、学術情報機構長をもって充てる。

2 館長は、資料館の業務を掌理する。

(副館長)

第6条 副館長の選考は、国立大学法人山口大学の専任教師のうちから山口大学学術情報機構運営委員会の議に基づき、学長が行う。

2 副館長の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、副館長に欠員が生じた場合の後任の副館長の任期は、前任者の残任期間とする。

3 副館長は、館長を補佐し、日常的な業務の執行及びこれに必要な意思決定に関し、館長を助けるものとする。

(事務)

第7条 資料館に関する事務は、学術情報部において処理する。

(雑則)

第8条 この規則に定めるもののほか、資料館に関し必要な事項は、別に定める。

附 則

1 この規則は、平成16年4月1日から施行する。

2 第5条第1項の規定にかかわらず、平成17年3月31日までの間、館長は、この規則施行の日の前日に法人化される前の館長であった者をもって充てる。

山口大学埋蔵文化財資料館専門委員会内規

(趣旨)

第1条 この規則は、山口大学学術情報機構運営委員会(平成16年規則第140号)第8条第2項の規定に基づき、山口大学埋蔵文化財資料館専門委員会(以下「専門委員会」という。)の組織及び運営に関し必要な事項を定める。

(審議事項)

第2条 専門委員会は、山口大学埋蔵文化財資料館(以下「資料館」という。)に関し、次の事項について審議する。

(1)管理及び運営に関する事項

(2)整備充実に関する事項

(3)予算に関する事項

(4)その他資料館に関し必要な事項

(組織)

第3条 専門委員会は、次の委員をもって組織する。

(1)館長

(2)副館長

(3)資料館所属の専任大学教育職員

(4)考古学担当の国立大学法人山口大学専任の大学教育職員

(5)メディア基盤センター所属の専任大学教育職員のうち館長が指名した者1名

(6)施設部長

(7)学術情報部学術情報課長

(8)発掘調査地に開港のある部局の事務部の長

(任期)

第4条 前条第5号の委員の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、委員に欠員が生じた場合の後任の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員長)

第5条 専門委員会に委員長を置き、館長をもって充てる。

2 委員長は、専門委員会を招集し、その議長となる。

3 委員長に事故あるときには、副館長がその職務を代行する。

(委員以外の者の出席)

第6条 専門委員会が必要と認めたときは、専門委員以外の者を専門委員会に出席させることができる。

(部会等)

第7条 専門委員会は、必要に応じて部会等を置くことができる。

2 部会等に関し必要な事項は、専門委員会が別に定める。

(事務)

第8条 専門委員会の事務は、学術情報部学術情報課において処理する。

(雑則)

第9条 この内規に定めるもののほか、専門委員会の運営に関し必要な事項は、専門委員会が定める

附 則

この規則は、平成16年4月1日から施行する。

平成16年度 山口大学埋蔵文化財資料館専門委員会

委員長 中村 友博(埋蔵文化財資料館長・人文学部教授)

委員 村田 裕一(人文学部講師)

板野 剛(施設部長)

田畠 直彦(埋蔵文化財資料館助手)

王 輝(メディア基盤センター講師)

古賀 幸成(学術情報課長)

横山 成己(埋蔵文化財資料館助手)

付録2 山口大学構内の主な調査

表6 山口大学構内の主な調査一覧表

吉田構内

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積 (m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和41年	第I地区A・B区	L~N-15	1	30?	土壙・柱穴	弥生土器、土師器、須恵器	事前	調査担当 小野忠熙	年報 XI
	第II地区家畜病院新營	R-20-21 S-T-19-20	2	2,000	溝、柱穴	弥生土器、土師器、瓦質土器、須恵器	#	#	
	第II地区		3			弥生土器、土師器	試掘	#	
	第IV地区牛舎新營	S-T-10-11	4	300	弥生溝・土壤、古墳堅穴住居、中世住跡溝、溝	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、陶磁器	事前	#	
	第IV地区		5				試掘	#	
	第III地区机利区 および陸上競技場	D-19-20 E-17-19~21 F-17-18	6	1,600	杭列、弥生堅穴住居	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、矢板状木杭	事前	#	
	第III地区南区	G-21~23 H-22	7		河川跡、柱穴	縄文土器、弥生土器、木器、石器	#	#	
	第III地区北区	H-20 I-19~21 J-20-21	8	1,400	堅穴住居、溝、土壤、柱穴		#	#	
	第III地区東南区	G-23 H-23-24 I-J-24 K-23-24 L-23	9		弥生堅穴住居	弥生土器	#	#	
	第III地区野球場		10		中世柱穴	瓦質土器	試掘	#	
昭和42年	第V地区学生食堂	J-20 N-14 P-18	11		弥生溝、古墳土壤	弥生土器、土師器	事前	#	
	第V地区		12		河川跡、柱穴、土壤	弥生土器、土師器	試掘	調査担当 山口大学吉田遺跡調査団	
	第I地区C区大学本部新營	K-L-14	13	600	堅穴住居、溝、土壤	土師器、須恵器、瓦質土器	事前	#	
	第V地区教育学部				河川跡	弥生土器、土師器、須恵器	試掘	#	
	第I地区D区第1地点	L-13	14		近世大廈	弥生土器、木炭屑	#	#	
昭和46年	第I地区D区第2地点	L-13	15			弥生土器、土師器、瓦質土器、石鍋	#	#	
	第I地区D区第3地点	M-13-14	16		土壤、柱穴	弥生土器、瓦質土器	#	#	
	第I地区D区第4地点	M-N-14	17		土壤、絆穴	弥生土器、土師器、瓦質土器、石器	#	#	
	第I地区D区第5地点	L-12-13	18		弥生溝	弥生土器、土師器	#	#	
	第I地区D区第6地点	M-13	19		柱穴	弥生土器、土師器、石器	#	#	
	第I地区D区第7地点	M-N-13	20			須恵器	#	#	
	第I地区E区第2学生食堂新營	M-N-14-15 O-15	21	900	古墳堅穴住居、土壤溝、柱穴	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、石器、鉄製品	事前	#	年報 X II
昭和50年	第II地区					弥生土器	試掘	#	
昭和51年	第III地区				堅穴住居	弥生土器、土師器、須恵器	#	#	
昭和53年	人文学部校舎新營	M-N-21	22	160			#	調査担当 近藤義一	年報 X
昭和54年	教育学部附属養護学校新營	A-20-21 B-19-20 C-19	23	410	溝、土壤	縄文土器、弥生土器	試掘	山口大学埋蔵文化財資料館 山口市教育委員会	年報 IX
	理学部校舎新營	N-O-19-20	24	250			#		年報 X
	農学部動物舎新營	P-19	25	380			#		
	本部管理棟新營	L-14	26	740	溝、土壤、柱穴、中世井戸、土壤墓、住跡跡	弥生土器、土師器、石製品	事前		年報 X
昭和55年	経済学部校舎新營	K-21	27	66			試掘		
	農学部農業機械施設新營	P-Q-15	28	50	溝、土壤		事前		年報 X
	本部環境整備	E-14~16 F-15-16	29				立会		

調査年度	調査名	構内地割	地点	面積 (m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和55年	農学部農場整備	N-11 O-10・11 P-9・10	30				#		年報X
	教育学部校舎新営	H-19	31		弥生堅穴住居、土壙、溝、柱穴	弥生土器、石製品	事前		
	教育学部音楽棟新営	H-16	32		溝		#		
	教育学部美術科・技術科実験実習棟新営	J-K-19・20	33		羽河川、溝、柱穴	縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器	#		
	正門橋脚新営	I-11	34				立会		
	時計塔建設	I-14	35				#		
	本館構内擁壁取扱	K-L-13・14	36				#		
	教養部構内擁壁取扱	I-15～17 J-17	37				#	工法等変更	
	構内駒鹿道路舗装	J-M-15 M-N-16	38				#		
	農学部中庭整備	N-O-17	39				#		
昭和56年	建房施設改修	O-16	40				#	工法等変更	年報Y
	学生部文化会車庫新営	M-R-9	41				#	工法等変更	
	学生部馬場整備	M-N-8・9	42				#		
	附属図書館増築	L-M-16	43	600	弥生～古墳期、土壤、柱穴、杭列	弥生土器、土師器、須恵器、石器	事前		
	大学会館新営	M-N-14・15	44	130	弥生堅穴住居、溝	弥生土器	試掘		
	教育学部附属風養護学校プール新営	A-H-21	45	880			立会		
	放射性元素結合実験室	G-18	46	2			#		
	体育部自転車置場						#		
	別跡口新営	I-17	47	10			#		
	教養部中庭環境整備	J-K-16	48	150			#		
昭和57年	大学会館新営	M-N-12・13	49	2,000	古墳井戸、土壤、柱穴、中世井戸、籠立建物	弥生土器、土師器、須恵器、輸入陶磁器、国産陶器、瓦質土器、鍍錫陶器、木簡、石器	事前		年報Z
	ラグビー場防球ネット新営	G-18・19 H-19・20	50	114	弥生層、弥生～古墳堅穴住居、土壤	弥生土器、土師器、石製品	#	堅穴住居は工法変更により現地保存	
	理学部大学院校舎新営	M-N-20	51	409			立会		
	正門・南門二輪車置場	I-J-12・13 H-23	52	183			#		
	学生部アーチェリー場の台・電柱設置	N-8・9	53	33			#		
	学生部籠合整備	M-7・8	54	1.6			#		
	学生部野球場敷水栓取扱	K-21 K-22	55	1			立会		
	教養部農場整備	I-15・16 J-15 K-17・18 L-18	56	81			#		
	C-18 D-17 E-15・16 F-16	57	12				#		
	大学会館ケーブル布設	N-12	58	160	弥生土壤、柱穴	弥生土器	事前		
昭和58年	大学会館排水水管布設	J-I-13	59	180	弥生～中世遺物包含層、古墳土壤、古代～中世土壤、溝、柱穴	弥生土器、土師器、須恵器、青磁、白磁、瓦質土器	#		年報IV
	学生部テニスコートフェンス改修	B-17 C-16・17 D-16 E-15	60	25	古墳以降の遺物包含層	土師器	試掘		
	経済学部樹木移植	K-19・21	61	8			立会		
	大学会館環境整備	I-14・15 M-N-15	62	592	弥生～中世遺物包含層、弥生堅穴住居、土壤、古代～近世土壤、溝、柱穴	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、輸入陶磁器、瓦質土器、輸入磁器、国産陶器、土製品、石斧、原石、鉄器、窓櫻	試掘		
昭和59年	経済学部環境整備(樹木移植)	K-L-20	63	5			立会		年報V
	農学部附風呂農場倒斜面排水渠修復整備	R-17～19	64	30	古代末～中世河川跡	須恵器、土師器、輸入陶磁器、輪口、石器、鉄滓	#		
	農学部附風呂農場改修	V-15～17	65	325			#		
	教育学部前庭環境整備(樹木移植)	I-J-19	66	430			#		
	中央ボイラー種車止設置	O-P-16	67	2.5		須恵器	#		

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積 (m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和60年	大学会館環境整備(樹木移植)	M-15	68	9		弥生土器、土師器、須恵器、石鍋、砥石、鉄滓	#		年報V
	交通標識設置	J-20 N-14 P-18	69	3			#		
	農学部解剖実験棟周辺環境整備 (実験場設置)	Q-18	70	16			#		
	理学部運動整備(藤棚設置)	N-21	71	4			#		
昭和61年	農学部附属農畜病院舎	S-T-19	72	270			#		年報VI
	国際交流会館新館	M-22-23 N-22	73	70	弥生～古墳河川跡 中世～近世構	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、須恵質土器、陶磁器、鐵範玉、加工後の刺片	試掘		
	山口銀行現金自動支払機設置 (電線路埋設)	J-19	74	11	包含層(河川跡か)	弥生土器	立会		
	農学部附属農場農道整備	S-20 T-U-19	75	165	中世構、柱穴	土師器、瓦質土器	# 工法変更		
	農学部附属農場農道規制 (施設ボール設置)	M-10 P-15 Q-15～17	76	12			#		
	正門横(木田内)境界杭設置	J-10	77	0.25	包含層か		#		
	経済学部農場整備 (樹木移植・記念碑建立)	L-20	78	3			#		
	吉田構内交通標識設置	G-23 K-9 O-22 S-20 V-17	79	3		須恵器	立会		
昭和61年	市道神郷1号線および 間田神郷線の送水管設置	B-17-18 C-18-19 D-19-20 E-20-21 F-21-22 G-22-23 H-23-24 I-J-K-24 L-23-24 M-N-23 O-22-23 P-Q-22 R-21-22 S-21 T-20-21 U-19-20 V-18-19 W-X-18	80	2,100	古墳・弥生構、 古代河川跡、 弥生包含層	弥生土器、土師器、 須恵器 (墨書きのあるもの含む) 瓦質土器、製塙土器、 石斧、板石	立会	山口市教育 委員会 山口大学埋蔵 文化財資料館	年報VI
	美術部自動販売機設置 (屋根設置および観覧席移動)	K-L-18	81	3.5			#		
	教育部身体障害者用 スロープ設置	L-15-16	81	3			#		
	経済学部散水線取扱	L-20	83	4			#		
	吉田構内水泳プール 改修等	E-15 F-15-16 H-15	84	26.5	包含層		#		
	農学部附属農場 木道埋設	S-12	85	3			#		
	吉田構内汚水排水管等 整修改修	M-18 O-15	86	15.5		土師質土器	#		
	本部身体障害者用スロープ 取扱	L-14	87	12			#		
	経済学部身体障害者用 スロープ取扱	K-18～20 L-18	88	78			# 工法等変更		
	附属図書館荷物運搬用 スロープ取扱	L-16	89	8		弥生土器	#		
昭和62年	教養部37番教室改修	K-16	90	1			#		年報VII
	教育学部附属教育実践 研究指導センター新設	J-K-18-19	91	240		ブランク、削器、 植物遺体	事前		
	教養部複合棟新設	J-K-17	92	35	埋甕上壇、構、柱穴	土師質土器、石斧	試掘		
	教養部複合棟新設	I-J-16	93	30	廣状遺構	弥生土器	立会		

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積 (m ²)	遺情	遺物	調査区分	備考	文献
昭和62年	教養部複合棟新営	J-K-17・18	94	900	廻穴、河川跡、 堅立柱根、土礫、漂、 井戸、埴生土器、 堅立柱埋植物跡、 谷立道構、柱穴	縄文土器、土師器、 須恵器、土師質土器、 須恵質土器、 陶磁器、石器、石斧、 木製品	事前		年報 Ⅷ
	九田川局部改修	B-16・17 C-16	95	20			立会	山口県教育 委員会 山口大学埋蔵 文化財資料館	
	国際交流会館新営	M-N-22・23	96	195			#		
	教育学部附属幼稚園 自転車置場設置	B-20	97	1			#		
昭和63年	農学部附属農場G7農場 排水管埋設及び E6農場進入路拡幅	L-N-12	98	55	中世土壤層か	弥生土器、土師器、 須恵器、輸入白磁、 國產磁器、磁石	#		年報 Ⅸ
	農学部植栽	N-17	99	3			#		
	経済学部集水樹取設	J-20	100	0.5			#		
	教養部複合棟新営に伴う 自転車置場設置	I-16	101	1	包含層か		立会		
昭和64年	国際交流会館新営に伴う 排水管設置	N-O-22	102	35	河川跡(構か)、 包含層	弥生土器、須恵器	#		年報 Ⅹ
	教養部複合棟新営に伴う ケーブル埋設	J-18	103	1			#		
	サッカーラグビー場改修	F-19・21 G-18	104	25	性格不明	弥生土器	#		
	消防用水設置	K-M-22	105	7.5			#		
平成元年	木銀灯新営	J-L-15	106	4	古墳構造溝構柱穴	弥生土器、土師器、 須恵器、 六連式製塙土器	事前		年報 Ⅺ
	樋野寮ボイラー設備改修	O-20・21	107	25			立会		
	野球場防球ネット新営	H-22 I-21・22 J-K-21	108	7	包含層	弥生土器、土師器、 須恵器、瓦質土器、 陶器	#		
	防火水槽配管布設	K-21・22	109	15	柱穴		#		
平成2年	吉田寮ボイラー設備改修	M-8	110	4			#		年報 Ⅻ
	体育施設給水管改修	G-H-16	111	50		陶器	#	工法等変更	
	大学会館前記念植樹	M-13	112	6			#		
	吉田寮ボイラー棟 地下貯油槽設備改修	M-8	113	45	包含層	土師器、須恵器、 土師質土器、陶器、 剝片、 二次加工のある剝片	#		
平成3年	第2武道場排水構新営	G-15	114	2	溝		#		年報 X I
	菓子標識設置	I-14 L-18	115	0.5			#		
	本部車庫給水管改修	L-13	116	6.5		弥生土器	#		
	大学会館前庭廣場整備	N-14・15	117	35	中世廣		#		
平成4年	大学会館前庭廣場整備	M-15	118	2			#		年報 X II
	第1学生食堂設備改修	I-J-19	119	7			#		
平成5年	教育学部附属幼稚園案内板設置	E-20	120	1			#		年報 X III
	農学部連合駕学校案内板設置	O-P-17	121	76	繩文河川	縄文土器、石器	試掘		
	農学部仮設ハバク倉庫設置	P-17	122	6		須恵器	立会		
	農学部微生物実験室 その他の規格特機械設備改修	P-17	123	8			#		
平成6年	大学会館前庭記念植樹	L-M-15	124	2			#		年報 X IV
	サークル棟新営	F-14	125	1			#		
平成7年	農学部連合駕学校案内板設置	O-P-17	126	980	繩文河川	縄文土器、石器	事前		年報 X V
	交通規制標識及びバリカーセット	H-22 M-10 O-22 R-19 S-20	127				立会		
	吉田構内道路 (南門ロータリー)設設	H-23	128	40			#		
	ボイラーパン給水管漏水補修	O-16	129	4			#		
平成8年	農学部附属幼稚園ガラス窓新営	S-14	130	3.5			#		年報 X VI
	大学会館前庭記念植樹	L-M-15	131	3			#		
	泉町平川駅緊急地方道路整備工事 及び山口大学吉田地区 廣場整備(正面周辺)	E-11・12	132				#		
平成9年	泉町平川駅緊急地方道路整備 (信号機設置)	I-11	133	7			#		年報 X VII
	本部裏給水管埋設	K-M-13	134	70	溝、柱穴	弥生土器、土師器、 滑石製機造品	事前		
平成10年	人文学部・理学部講義棟新営	M-20	135	4			試掘		年報 X VIII

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積 (m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
平成5年	第2屋内運動場新設	G-H-16	136	144	捷	弥生土器、須恵器、 砥石	#		年報 XIII
	農学部給水管理設	N-P-18	137	9			#		
	高野整備 (原外旭船水管改修)	L-15 M-17-18	138	16			立会		
	農学部連合獣医学科棟新設	O-16	139	4			#		
	大学会館前庭パリカーポジ	N-14	140	1			#		
	大学会館前庭記念植樹	L-15	141	1.6			#		
	九田川河川局部改良	C-16 D-15-16	142	40			#		
	農学部電柱立替	V-17	143	0.2			#		
	農学部ガラス窓設置	S-14	144	10			#		
	教育学部給水管理設	H-J-19	145	15			#		
	環境整備(大学会館前庭)	L-14 M-13-15 N-14-15	146	140.9			#		
	H-20	I-19-21 J-20-21	147	361			#		
	環境整備(道路保存地区)	G-13 H-12	148	350			#		
	グランド屋外照明施設新設	E-20 F-21 G-18-22 H-19-20 I-21	149	600	網文河川、弥生住居、 礎、土壙、弥生～ 古墳河川、近世溝	縄文土器、弥生土器、 土師器、ガラス小玉、 砥石、磨石、敲石	事前 工法等変更		
	第2屋内運動場新設	G-I-15-16	150	726	弥生～古代漢、 貯蔵穴、土坑。 近世溝、土坑	弥生土器、土師器、 須恵器、砥石、磨石、 敲石、片、須恵器、 瓦質土器、 土師質土器、陶器、 鏡器、瓦、下駄	#		
平成6年	グランド屋外照明施設配線埋設	F-21 G-20-21 H-19-20	151	200	網文河川、弥生住居、 礎、土壙、弥生～ 古墳河川、近世溝	縄文土器、弥生土器、 土師器、ガラス小玉、 砥石、磨石、敲石	# 工法等変更		年報 XIV
	経済学部商品資料館新設	K-L-21	152	87.5	河川	陶器、磁器	試掘		
	実験施設処理施設新設	H-12-13	153	2	河川		#		
	体育器具庫及び便所新設	G-I-17	154	60	河川		# 工法等変更		
	経済学部商品資料館 仮設電柱設置	L-22 M-22-23	155	5			立会		
	人文学部前駐車場整備	K-23 L-22-23	156	6			#		
	教育学部附属養護学校 生活排水管改修	F-19	157	2			#		
	テニスコート改修	B-17 C-16-18 D-15～17 E-15-16	158	15			#		
	教育学部附属養護学校 生活訓練施設新設	B-20-22 C-20	159	16			#		
	陸上競技場整備(透水管埋設)	C-18 D-18-19	160	200			#		
	ハンドボール場改修(プレハブ設置)	K-22	161	30			#		
	野球場フェンス改修	H-22 I-21-22	162	3			立会		
	系統灌漑整備 (ボイラー室配電盤設置)	O-16	163	4	河川か		#		
	九田川河川局部改良	D-15 E-14-15	164	100			#		
	第2屋内運動場電柱仮設	G-14-15	165	0.5			#		
	教養部水道管破裂修理	I-16	166	2			#		
	グランド屋外照明施設配線埋設	E-20 F-20-21 G-18-19-22 H-19-20 I-20-21	167	150			#		
	公共下水道接続 (教育学部附属養護学校 ゴルフ練習場設置)	A-21	168	4			#		
	サークル棲給水管埋設	F-14	169	1			#		
	ブルーム新設給水管埋設	E-15 F-15-16	170	10			#		
	公共下水道接続 (汚水管雨水排水施設設置)	C-18	171	6	河川	土師器	#		
	教育学部ロープ設置(音楽棟)	H-17	172	10			#		

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積 (㎡)	遺 情	遺 物	調査区分	備 考	文獻
平成 7年	農学部旧実験研究施設新宮	Q・R-17	173	75	近世溝	縄器	試掘		
	農学部旧実験研究施設新宮	Q・R-17	174	520	中世井戸、近世溝	石斧、須恵器、縄器、瓦器	事前		
	公共下水道接続	C-18 E-16 G-14	175	70	溝、土坑、河川跡、柱穴	弥生土器、土師器	試掘		
	公共下水道接続	C・D-18 D・E-17 E・F-16	176	240	土坑、河川跡、柱穴	弥生土器、石器、骨角器	事前		
	農学部附農場牛舎新宮	T-10	177	22			試掘		
	施身宿舎改修	N・O-22	178	25.5	河川		試掘		
	第2学生食堂増築	N・O-15	179	48	柱穴、包含層	石鐵	試掘		
	第2階内運動場外周照明施設新設	G-15・16	180				立会		
	機器分析センター新館工事用電柱取扱	O-19~21 P-22	181				#		
	農学部附農場牛舎病院パリカーニ新設	S-20	182				#		
	吉田寮可燃ごみ焼却新設	N-10	183				#		
	農学部旧実験研究施設電気・情報ケーブル及びガス・給排水管布設	Q・R-17	184				試掘		
	情報処理センター新設	O-19	185				#		
	基幹環境整備(ATMネットワークケーブル布設)	E-19~20 F-18~19 G-18	186				#		
	基幹環境整備(外灯新設)	I-15~16 J-20 K-19 M-10~11 N-12 O-16~18~20 P-18~19 Q-17~18	187				#		
	基幹環境整備(施身宿舎・国際交流会館排水水管布設)	M-23 O-22	188	22.5	河川		試掘		年報 XVI
	基幹環境整備(外灯新設)	H-1~21~22	189	306	河川	縄文土器、弥生土器、土師器、石器	試掘		
	農学部附農場排水水管布設	S-10~11	190	93	包含層、ピット	土師器、須恵器	試掘		
平成 8年	陸上競技場鉄棒取扱	G-18	191	5.5	包含層		立会		
	農学部附農場排水溝改修	R-11	192	2.2			#		
	種野寮パリカーニ新設	O-20~21	193	7			#		
	サッカーフィールド排水管取扱	H-19~20 I-19	194	12	包含層		#		年報 XVI
	基幹環境整備(交通安全教育センター新設)	J-K-17	195	14.3	河川	縄文土器、須恵器	#		
	丸田川河川局地改良	E-14	196	18			#		
	農学部附農場道路舗装	K-12~13 L-12 M-11	197	27.6	近世用水路、溝状遺構	弥生土器、土師器、須恵器、陶器、磁器	#		
	本部裏排水管改修	K-14	198	2			#		
	農学部附農場畜産科畜病院 患畜舍廻廊改設	S-T-19	199	1			#		
	農学部附農場堆肥合造新宮	S-10	200	41.5			試掘		
平成 9年	農学部バイオ森環境制御施設新宮	Q-15~16	201	140	河川、溝	土師器、須恵器、製塙土器、石器	試掘		
	カーブミラー新設	M-11 N-21	202	0.8			立会		
	基幹環境整備(外灯新設)	J-K-21 K-L-22 L-23	203	23.5	包含層		#		年報 XVII
	共通教育棟エレベーター新設	K-16	204	42			#		
	丸田川河川局地改良	E-14	205	48			#		
	本部2号型西側パリカーニ新設	L-13	206	0.5			#		
	教育学部附農業技術学校 跡計場新設	D-21	207	1.4	包含層	土師器	#		
	基幹環境整備(教育学部附属農業学校排水水管取扱)	C-D-21	208	17	河川		#		
	基幹環境整備 (便所廻廊蓋去土すきとり)	O-16	209	40			#		
	第2学生食堂増築及び改修	N-O-15	210	730	廻柱建物、溝、土坑、柱穴	弥生土器、土師器、須恵器、陶器、磁器、石器、鉄製品	事前		
平成 10年	教育学部附農業技術学校給食室改修	C-21	211	9	縄文河川、土坑、柱穴	縄文土器、弥生土器	試掘		
	丸田川河川局地改良	E-F-14 F-13	212				立会		

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積(m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
平成10年	基幹環境整備(バリアー新設)	H-15 I-J-20 O-16-18	213				II		
	農学部動物用施設改修	Q-18	214				II		
	基幹環境整備(外灯新設)	L-17-19 M-N-18	215				II		
	理学部スクープ新設	M-18	216				II		
	ステンレス回転モニメント新設	M-13	217				II		
平成11年	第2学生食堂増築その他の伴う屋外電力線路施設整備	O-14~16	218		包含層、柱穴、河川	土師器、須恵器	II		
	九田川河川局部改良	F-G-13 G-H-12	219				II		
	第2学生食堂北西壁壁面新設	N-14	220				II		
	バリアー施設防護ネット新設	G-H-22	221				II		
	第1体育館・共通教育本館	H-15 K-16	222				II		
	スロープ新設	I-12 K-L-18	223				II		
	基幹環境整備(外灯新設)	L-15 M-N-17					II		
	総合研究棟新設	Q-18 R-17~19	224	250	河川	土師器、須恵器	試掘		
	総合研究棟新設	Q-R-18~19	225	830	河川、土坑	織文土器、土師器、須恵器、製塗土器、瓦質土器、石器	事前		
	職舎及び周辺施設改修	M-8	226				立会		
平成12年	架空電線取り外し埋設	O-15 P-15+16 Q-14+15+ 18-19 R-13-14 R-S-19 S-14	227		包含層		II		
	九田川河川局部改良	H-I-11-12 I-10-11 J-9-10 K-L-9	228				II		
	山口合同ガスガバナー室新設及びガス配管布設	O-P-22	229				II		
	基幹環境整備(バリアー新設)	N-22 M-10 V-17	230				II		
	あずまや新設	L-18	231				II		
	共通教育センター空調設備新設	J-16	232				II		
	基幹環境整備(外灯新設)	J-K-21 M-10	233				II		
	経済学部校舎改修(プレハブ校舎新設)	K-21	234	40	河川	織文土器	試掘		
	九田川河川局部改良(平成12年工事追加分)	L-8-9	235		河川		立会		
	総合研究棟新設屋外配管布設	Q-18	236				II		
平成13年	理学部改修1期工事屋外配管布設	M-18-19 M-N-20 N-19	237				II		
	九田川河川局部改良	L-8-9	238				II		
	基幹環境整備(外灯新設)	J-14-15 J-15 K-L-M-15 N-16 Q-T-V-17	239		河川		II		
	理学部校舎改修2期工事ポンプ室配管布設	M-19	240				II		
	理学部校舎改修2期工事自転車置場新設	N-20	241				II		
	第1学生食堂バリアー改修	I-J-19	242				II		
	経済学部校舎改修(プレハブ校舎新設配管布設)	L-21	243				II		
	農学部校舎改修(解剖実習棟プレハブ校舎新設)	R-S-19	244	520	欄立柱建物、柱穴、土坑、包含層、河川	土師器、須恵器(墨書き土器)、製塗土器、縦袖陶器、瓦、輪印、鉈頭石	事前		
	農学部附農場実験圃整地	O-14	245				立会		
	農学部校舎改修	N-Q-17-18	246		河川	織文土器	II		
平成14年	理学部改修3期工事(薬品庫掲示板・自転車置場新設)	N-O-19 M-19-20	247				II		

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積 (m ²)	遺情	遺物	調査区分	備考	文献
平成14年	東アジア研究科 プレハブ校舎新設	N-21	248				#		年報1
	農学部校舎改修(解剖実習棟 プレハブ校舎新設)	R-S-19	249		河川、包含層		#		
	教育学部トイレ改修	I-18	250				#		
	農学部附属農場ガス管漏洩修理	O-P-16 Q-15	251	12	河川		立会		
平成15年	教育学部附属養護学校給食調理員 専用トレン新設	C-21	252	1.7			#		年報1
	農学部農場施設南側塗装	P-Q-15	253	52			#		
	理学部中庭通路植栽新設	N-19	254	5.8			#		
	理学部中庭あづまや新設	N-20	255	6.8			#		
	基幹環境整備(外灯)	F-16, H-14 G-13~15・18 I-16・19 J-19, L-12 Q-15	256	11.5	河川		#		

白石構内

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積 (m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和58年	教育学部附属山口小学校・幼稚園運動場整備		1	60	古墳型穴住居、溝状造構	土師器、須恵器、瓦質土器、瓦、石製品、木製品	試掘		年報Ⅲ
昭和60年	教育学部附属山口小学校 排水管改修		2	1			立会		年報V
昭和60年	教育学部附属山口中学校 建物ローラー整備		3	2			n		
昭和60年	教育学部附属幼稚園 環境整備(樹木植樹)		4	1			n		
昭和61年	教育学部山口附属学校	幼稚園・ 小学校部分	5	57	中世土塙か	縄文土器、弥生土器、 土師器、須恵器、 瓦質土器、土師質土器、	試掘		年報VI
	污水排水管布設	中学校部分		20	河川跡か杭列	陶器器、不明鉄製品、 石礫、剝片、植物遺体			
昭和61年	教育学部附属山口小学校 電柱移設		6				立会		年報VI
昭和62年	教育学部附属幼稚園 遊戯室新設		7	40			n		年報VII
昭和63年	教育学部附属山口中学校 屋内消火栓設備改修		8	35	包含層	土師器、磁器、剝片	n		年報VIII
平成元年	教育学部附属幼稚園・ 山口小学校汚水管布設		9	260	弥生～古墳型穴住居、 土壙、溝、柱穴、 河川跡	縄文土器、弥生土器、 土師器、須恵器、 瓦質土器、 須恵器、 黒色土器、器、 二次加工のある剝片、 使用痕のある剝片、 剝片、石様、砾石	事前		年報IX
	教育学部附属幼稚園 バーンコート支柱設置		10	0.3			立会		
	教育学部附属幼稚園・ 山口小学校汚水管布設		11	170	弥生溝状造構	弥生土器、土師器、 打製石斧、 削器、剝片、石核	n		
平成2年	教育学部附属山口中学校 汚水管布設		12	70	溝状造構	縄文土器、弥生土器、 土師器、瓦質土器、 不明鉄製品、石礫、 鐵石、扁平打製石斧、 鐵石、剝片	事前		年報X
			13	130		弥生土器、土師器、 須恵器、土師質土器、 瓦質土器、 圓底陶器、 扁平打製石斧、鐵石	立会		
平成6年	教育学部附属山口小学校 ブル新営給水管埋設		14	3			n		年報XIV
	教育学部附属山口中学校 ブル新営給水管埋設		15	7			n		
平成7年	教育学部附属山口中学校 自転車駐場場新設		16				n		
平成10年	教育学部附属山口小学校 給食室改修		17				試掘		
平成12年	教育学部附属山口中学校 防球ネット新設		18				立会		
平成14年	教育学部附属山口中学校 給水設備改修		19				n		
	教育学部附属幼稚園 運動場整備		20		河川、柱穴	土師器	n		
平成15年	教育学部附属山口幼稚園底新設 山口小学校スロープ新設		21	27.7			立会		年報1
	白石地区市道歩道改修	幼稚園・ 小学校部分	22	1	河川		立会		
平成16年	教育学部附属山口小学校事務室新 設	幼稚園・ 小学校部分	23	101	河川、土壤主たは漂		n		年報2
	教育学部附属山口幼稚園・小学校 フェンス・通用門改修	幼稚園・ 小学校部分	24	11			n		

小串構内

調査年度	調査名	構内地図	地点	面積 (m ²)	遺 構	遺 物	調査区分	備 考	文献
昭和58年	医学部体育館新営		1	260		土師器、瓦質土器、石器	試掘		年報Ⅲ
	医学部巡回書類増築		2	4			立会		
	医学館体育館新営		3	1			#		
昭和59年	医学部浄化槽新営		4	44	近世溝	土師器、瓦質土器、磁器	事前		年報Ⅳ
	医学部体育館新営		5	65		土師器、瓦質土器、磁器	#		
	医学部基幹整備 (熱交換器設備)		6	28		動物遺体(貝殻)	試掘		
昭和60年	医学部臨床講義棟 病理診断棟新営		7	38			#		年報Ⅴ
	医学部附属病院 外来診療棟新営		8	390		土質質土器、瓦質土器、陶磁器	#		
	医学部基礎研究棟新営		9	10		近世陶器	#		
昭和61年	医学部看護師宿舍改修		10	25.5		近世陶磁器	立会		年報Ⅵ
	医学部看護師宿舍改修		11	20			#		
	医学部農場整備(樹木移植)		12	40			#		
昭和62年	医学部附属病院 外来診療棟新営		13	5			#		年報Ⅶ
	医学部附属病院 外来診療棟周辺 理整備等(雨水樹埋設)		14	18			#		
	医学部附属病院東駐車場改修		15	6			#		
昭和63年	医学部附属病院病棟新営		16	104		削器、ナイフ形石器、細石刃核	試掘		年報Ⅷ
	医学部附属病院運動場整備		17	300		二次加工のある削片、 使用痕のある削片、 削片、敲石、鍬、原石、 土師器、土質質土器、 瓦質土器、陶磁器	立会		
	医学部附属病院運動場整備		18	220			#		
平成元年	医学部附属病院MRI棟新営		19	45		削器、細石刃、 二次加工のある削片、 削片、石核	試掘		年報IX
平成3年	医学部臨床実験施設新営電気工事		21	0.5			立会		年報X I
平成4年	施却棟地盤調査		22				#		年報X II
平成5年	医学部臨床実験施設新営その他 医学部附属病院基礎設備 (焼却槽含む)		23	9			#		年報X III
平成6年	医学部附属病院		24	6			#		年報X IV
平成7年	医学部附属病院 看護師宿舍新営		25	300			#		年報X V
平成8年	医学部附属病院 屋外排水管布設		26	40			試掘		年報X VI
平成9年	医学部歴史碑・納骨堂新営		27	6			立会		年報X VII
平成10年	基幹環境整備 (看護師宿舍浄化槽撤去)		28	15.2			試掘		
平成11年	医学部附属病院 看護師宿舍新営		29	4			立会		
平成12年	医学部附属病院 土器		30	10			#		
平成13年	宇部市土地区画整理事業 (柳ヶ瀬丸河内線)		31	134	包含層、近世～ 近代用水路	削片、弥生土器、 土師器、陶器、磁器	事前	宇部市教育委員会と 共同調査	
平成14年	宇部市土地区画整理事業 (柳ヶ瀬丸河内線、医学部 敷地西側特殊道路)		32	379	包含層、近世～近代溝	削片、縄文土器、 弥生土器、土師器、 陶器、磁器	#	宇部市教育委員会と 共同調査	
平成15年	宇部市土地区画整理事業 (柳ヶ瀬丸河内線)		33	792	近世～近代用水路、 土坑	陶器、磁器、鉄製品	#	宇部市教育委員会と 共同調査	
平成16年	医学部附属病院立体駐車場新営		34	229	包含層	縄文土器、弥生土器、 土師器、陶器、磁器	試掘		
平成17年	医学部附属病院高エネルギー 機新営		35	13.25			#		
平成18年	総合研究棟新営		36	382	包含層	縄文土器、土師器、 須恵器、瓦質土器、 陶器、磁器	#		
平成19年	基幹環境整備(煙突)新営		37	76			試掘		年報I

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積 (m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
平成16年	医学部基幹棟改修備 (地下オイルタンク地)		38	144		縄文土器、土師器、陶器、磁器、石錐	試掘		年報2
	医学部職員宿舎他公共下水接続		39	400		弥生土器、土師器、瓦質土器、陶器、磁器	#		
	医学部総合研究棟北側 准耐圧用壁下取設		40	40.6			立会		

常盤構内

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積 (m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和58年	工学部校舎新築		1	70		瓦窓	試掘		年報III
	工学部図書館増築		2	70			#		
昭和59年	工学部尾山台舎排水管右設			20			立会		年報IV
昭和60年	工学部尾山台舎排水管取設等			65			#		年報V
	工学部受水槽改修		3	1.5			#		
昭和61年	工学部尾山台舎排水管改修			6			#		
	工学部身体障害者用スロープ取設		4	29			#		年報VI
昭和62年	情報処理センター(常盤センター) 空調設備取設		5	30			#		
昭和63年	工学部便却炉上廻新設		6	225			#		年報VII
平成元年	工学部夜間照明装置 及び防犯ネット設置		7	2			#		年報IX
	工学部記念植樹		8	2.5			#		
平成2年	工学部ガス管改修		9	45			#		年報X
平成3年	大学祭展示物設置		10	7			#		年報X 1
	工学部プレハブ研究・実験棟新築		11	6			試掘		
平成4年	工学部・工芸短期大学部の 改組再編・博士課程設置に伴う 建物等の新設		12	40			#		年報X II
	工学部および工芸短期大学部 職員宿舎改築		13	9			立会		
	大学祭展示物設置		14	7			#		
平成5年	工学部プレハブ研究・実験棟新築		15	12			試掘		年報X III
	工学部地域共同研究開発 センター新設		16	16			#		
平成7年	工学部国際交流会館新築		17	8		石錐	#		
平成8年	工学部国際交流会館新築		18	352	段状遺構	ナイフ形石器、剣片	事前		年報X VI
平成12年	工学部福利厚生棟新築		19	38.5			試掘		
平成13年	工学部インキュベーション センター新設		20	60			#		
平成14年	総合研究棟新築		21	13.5			#		
平成15年	工学部本館改修		22	428			立会		年報1
平成16年	工学部定速度応力腐食割れ 実験棟新築		23	20			試掘		年報2
	工学部先端固体素子実験室新築		24	52.5			#		
	工学部雨水幹線工事		25	9			立会		

光構内

調査年度	調査名	構内地区別	地点	面積 (m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和58年	教育学部附属光小学校 自転車置場設置		1	6	近世～近代石垣	瓦質土器、陶磁器、瓦	試掘		年報Ⅲ
昭和59年	教育学部附属光小・中学校 焼却炉新設		2				立会		年報Ⅳ
昭和60年	教育学部附属光中学校 外灯改修		3	1		土師器	#		年報Ⅴ
昭和61年	教育学部附属光小学校創立 記念事業(プロン像像建立)		4	2.5		土師器、須恵器	#		年報Ⅵ
昭和62年	教育学部附属光中学校 グラウンド防球ネット設置		5	2		弥生土器、土師器、 瓦質土器、 土師質土器、瓦	#	御手洗滴探集	年報Ⅶ
昭和63年	教育学部附属光小学校 遊器具移設		6	10		土師器、土師質土器、 陶磁器	#		年報Ⅷ
	教育学部附属光小学校 屋外スピーカー設置		7	0.5		土師器、土師質土器、 須恵器、瓦器、 瓦質土器、陶磁器、 土鍬	#	御手洗滴探集	
平成2年	教育学部附属光小学校 運動場改修		8	15		縄文土器、土師器、 須恵器、瓦質土器、 施釉陶器、磁器、 土鍬、剝片、瓦片	試掘	御手洗滴探集 遺物含む	年報Ⅹ
	教育学部附属光小学校 運動場改修		9	23	土壤	土師器、須恵器、 須恵器模倣土師器	事前		
平成3年	教育学部附属光中学校 武道館新設		10	38	土壤、溝状遺構	土師器、磁器、陶器	試掘		年報X I
	教育学部附属光小学校 屋外施設設置		11	18		土師器、石鍬	立会		
	教育学部附属光中学校 バックネット新設		12	0.5		土師器	#		年報X I
平成4年	教育学部附属光中学校 武道館新設		13	500	土壤、柱穴	縄文土器、須恵器、 土師器、瓦器	事前		年報X II
	教育学部附属光中学校 武道館地盤調査		14				立会		
平成5年	教育学部附属光中学校 武道館新設その他の 施設		15	6			#		年報X III
平成6年	教育医学部附属光小中学校 プール新設給排水管埋設		16	19			#		年報X IV
平成8年	教育学部附属光小・中学校 園障(外周フェンス・防球ネット)取設		17	7		陶磁器	#		年報X VI
平成10年	教育学部附属光小学校 給食室改修		18	6			#		
平成11年	教育学部附属光小・中学校 上水道(給水管)改修		19	132	古墳包含層、柱穴、 近世～近代土壙	土師器、須恵器、 韓式系土器、 壺形土器、陶器、磁器	試掘 立会		
平成12年	教育学部附属光小・中学校 護岸石積改修		20		石垣	陶磁器	立会		
	教育学部附属光小・中学校 上水道(給水管)改修		21				#		
平成15年	教育学部附属光小学校エレベータ 昇降路等新設		22	169	ピット、土壤、溝	縄文土器、土師器、 須恵器、瓦質土器、 陶器、磁器、石器	試掘 立会		年報I

その他構内

調査年度	調査名	構内地図別	面積(af)	造 構	造 物	調査区分	備 考	文献
昭和59年	学生部ポート貯蔵 合宿研修所整備	宇部市大字小野 宇土井	0.5			立会		年報IV
昭和60年	学生部コート貯蔵 合宿研修所整備	吉敷郡秋郷町 東宇中道				〃		年報V
昭和63年	熊野住給湯機器取扱	山口市熊野町3-21	7			〃		年報V
昭和61年	湯田宿舎給水管改修	山口市湯田温泉 6丁目8-29	35	杭		〃		年報VI
	経済学部職員宿舎 公共下水道切替	山口市旭通り 2丁目3-32	1		土師質土器	〃 6号宿舎		年報VI
	山口市 水の上町6-9		7		瓦	〃 2号宿舎		
昭和63年	経済学部職員宿舎 公共下水道切替	山口市白石 二丁目8-7	1		瓦池器、土瓶器、 土師質土器、 瓦質土器、陶磁器	〃 7号宿舎探査		年報VII
平成元年	本部職員宿舎 公共下水道切替	山口市水の上町 6-1	1			〃 1号宿舎		年報IX
平成2年	人文・理学部職員宿舎 公共下水道切替	山口市石観音町 1-25	1.2		陶磁器	〃 7号宿舎		年報X
	経済学部職員宿舎 公共下水道切替	山口市香山町 3-1	0.5			〃 3号宿舎		
平成3年	湯田宿舎八木給配水 その他改修	山口市湯田温泉 6丁目	30			〃		年報XI
	経済学部職員宿舎 電柱設置	山口市旭通り 2丁目3-32	0.5			〃		
	人文・理学部職員宿舎 公共下水道切替	山口市天花 932-2	1			〃		
平成4年	上野小路共同下水管布設	山口市上野小路 宇久保7-4	7			〃		年報XII
平成6年	湯田宿舎公共下水道接続 及び排水施設改修	山口市湯田温泉 6丁目8-29	44			〃		年報XIV
平成15年	ポート部合宿所給排水整備	宇部市大字小野 宇土井	80			確認		年報1
平成16年	湯田宿舎D棟自転車置場新設	山口市湯田温泉 6丁目8-29	11			確認		年報2

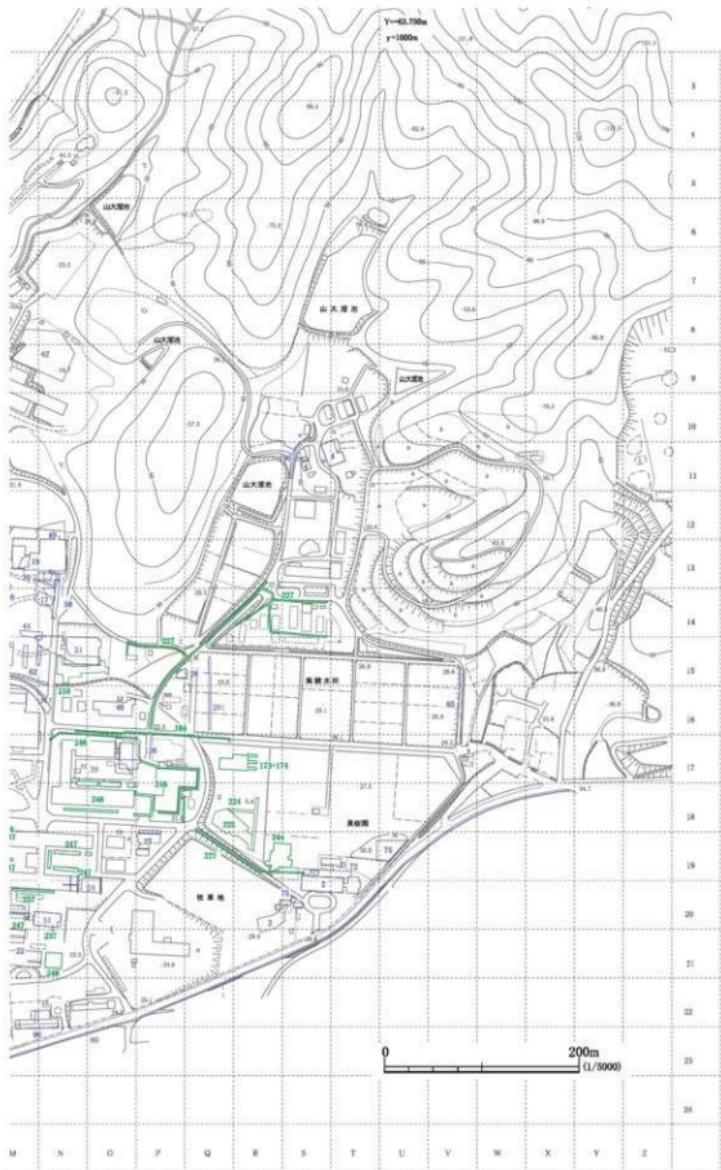
※文献① 山口大学吉田遺跡調査団『吉田遺跡発掘調査概要』(山口大学、1976年)

※昭和41年以降、吉田構内においては、工事に際し、随時継続的に調査を実施しているが、昭和52年以前の吉田遺跡調査団の開与した調査については、調査名をすべて把握しているわけではなく注意が必要である。



図34 山口大学吉田構内地区

山口大学構内の主要な調査



断面および主要な調査区位置図

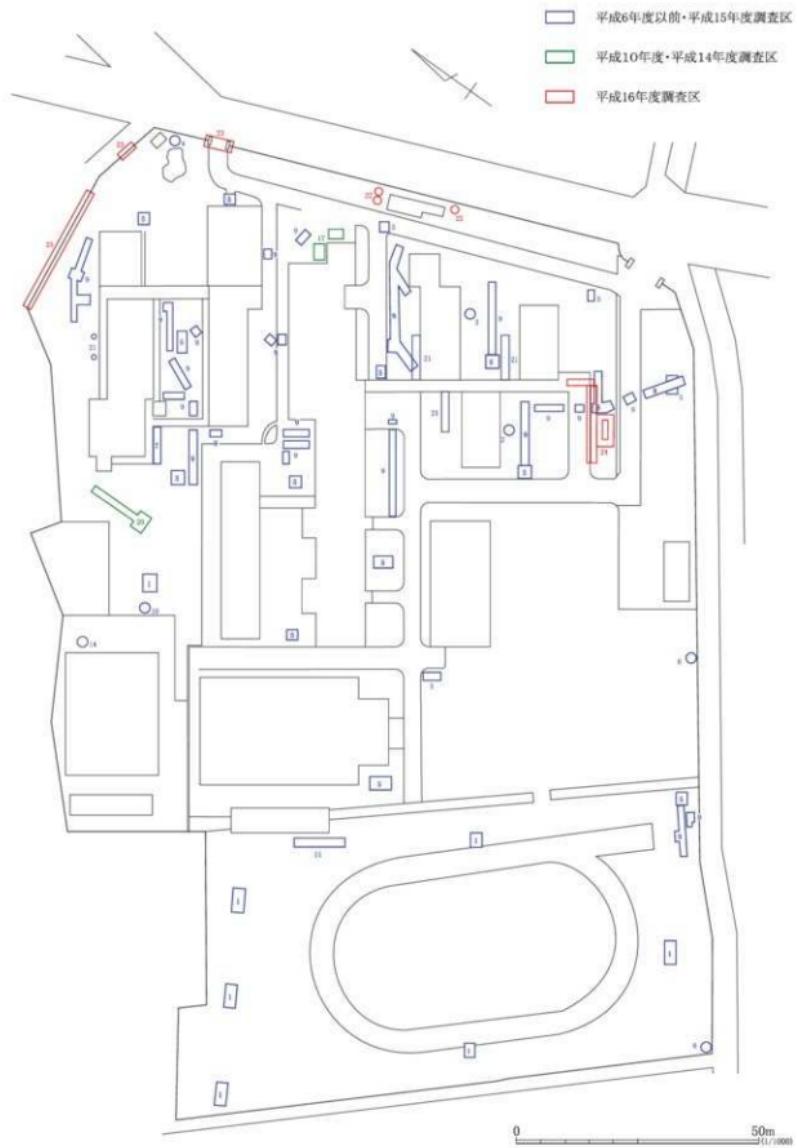


図35 山口大学白石構内（幼稚園・小学校）調査区位置図

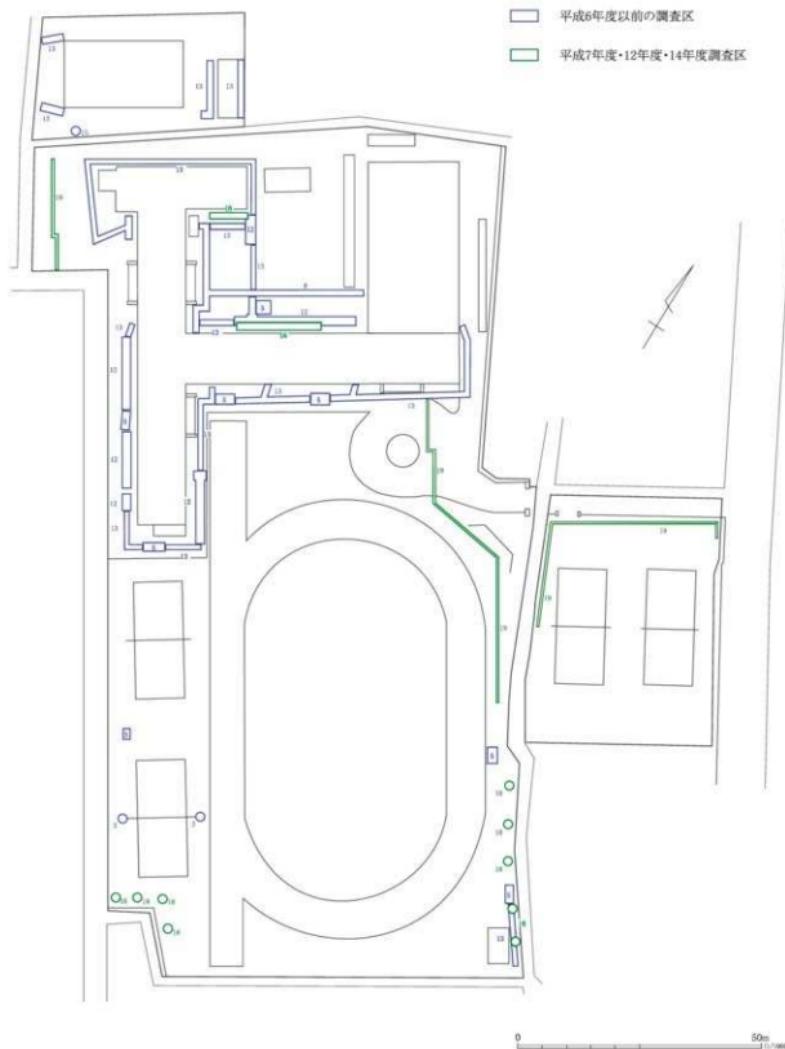


図36 山口大学白石構内（中学校）調査区位置図



図37 山口大学小串構内調査区位置図

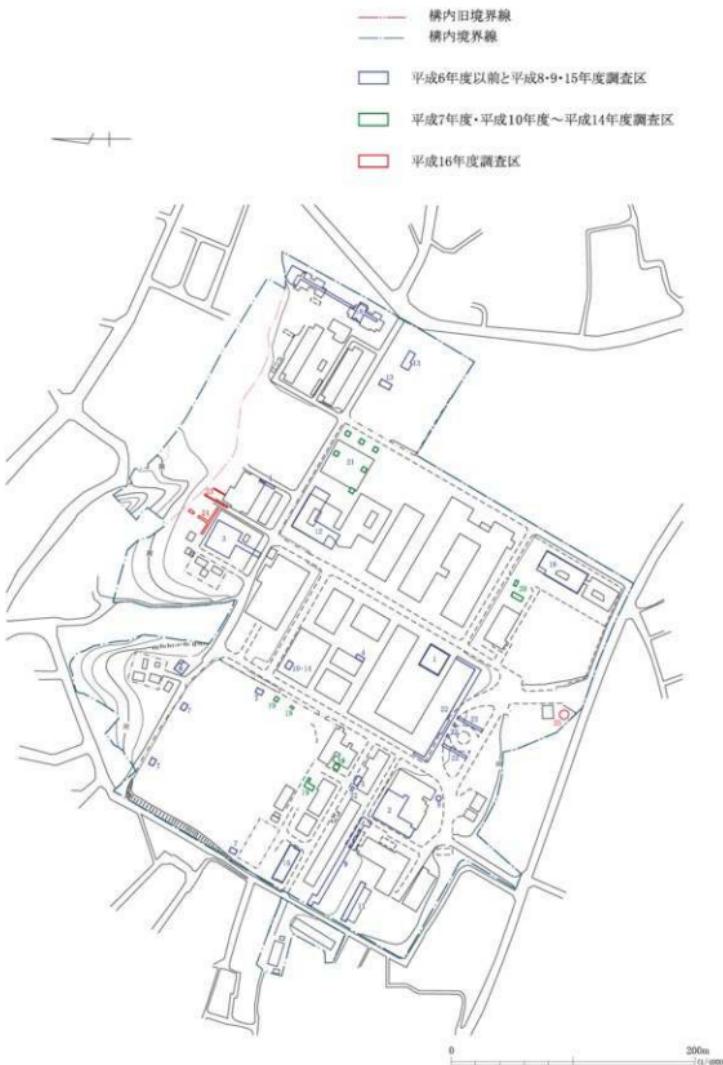


図38 山口大学常盤構内調査区位置図

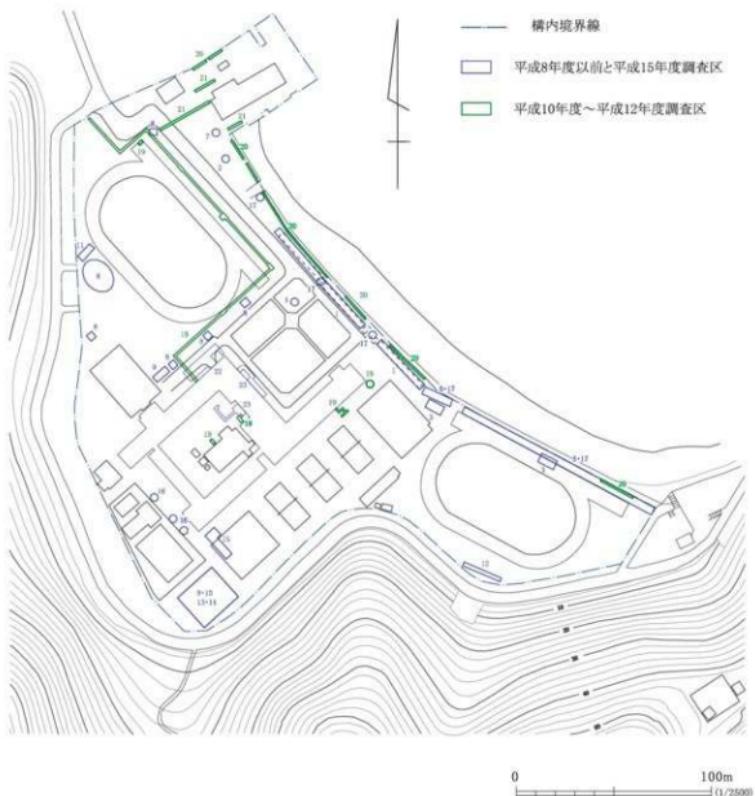


図 39 山口大学光構内調査区位置図

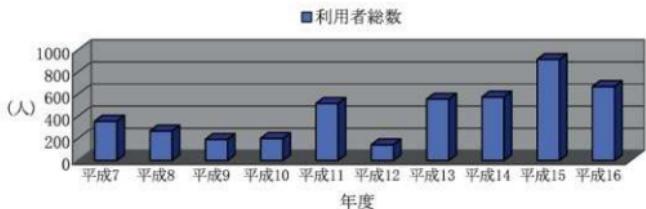
第2章 平成16年度山口大学埋蔵文化財資料館の活動報告

当館は、昭和53年(1978)設置以降、山口大学構内が所在する各遺跡の調査・研究を行うとともに、収蔵資料の展示・公開、また埋蔵文化財・考古学にかかわる教育活動を行ってきた。より具体的に述べると、展示・公開活動としては当館展示室における常設展示の他に年に1回の企画展示を行うこと、教育活動としては年に1回の市民対象の公開授業を開催すること、また学内の希望者に対して考古資料の取り扱い等の技術指導を行うことなどである。その他にも、学内外のニーズに応じ、随時展示解説会や出前授業などを実施している。

平成16年度は国立大学法人化の初年度であり、当館は山口大学学術情報機構の1組織として位置づけられることになった。つまり当館は埋蔵文化財を素材とした学術情報の収集・発信をさらに推進させることが期待されていると言える。

表7 埋蔵文化財資料館利用者の推移

年度	平成7	平成8	平成9	平成10	平成11	平成12	平成13	平成14	平成15	平成16
利用者総数	355	267	191	200	516	142	555	573	913	669



第1節 資料館における展示公開活動

第20回企画展「古代の周防國」を開催

主催 山口大学埋蔵文化財資料館

共催 山口大学エクステンションセンター

昭和63年度より毎年1回から2回開催してきた企画展も、平成16年度で記念すべき20回目を迎えることとなった。そこで第20回企画展は、当館による近年の調査で明らかになりつつある吉田遺跡の古代の

様相に焦点を当てることにした。

吉田遺跡の古代に関しては、墨書き土器や円面鏡、木簡などの文字と関連する資料や、古代官人の腰帶飾りである石製丸柄などの存在から、古くから「官衙」の存在が推測されてきた。近年の調査ではその可能性をさらに高める新資料が続々と発見されている。そこで今回の企画展では吉田遺跡の官衙関連資料と周辺地域の官衙関連資料とを比較



写真53 企画展ポスター・展示目録

展示することにより、古代周防國の歴史環境の復元を試みた。

吉田遺跡出土品以外の展示資料としては、山口市教育委員会、防府市教育委員会、小郡町教育委員会、財団法人山口県教育財団山口県埋蔵文化財センターの協力を得て、周防國府跡、周防銅錢司跡、陶窯跡群百谷1号窯、末田窯跡群、赤追遺跡、赤妻遺跡、下糸根遺跡、八ヶ坪遺跡など地域を代表する古代遺跡の出土品を一同に公開することができた。

企画展開催期間は平成16年11月6日から12月24日までと短期間開催ながら、入館者総数は295名におよんだ。観覧者からは、「硯の形がおもしろく、印象に残りました。」「古代人もベルトをしていましたことにおどろいた。」「遺物から当時の人々の生活を想像できることを実感しました。字を書くことができるほどの才がある人について驚きました。」「周防の國はすごいな♥と思いました。土器とともにスゴかったです。」などの感想とともに、「当時の生活でも、もっと具体的なことを知りたかったです。」「考古学における専門用語もいくつか説明してもらえばありがたいと思います」などの御意見も寄せられた。

当初短期開催として計画した企画展であったが、予想以上に展示への反響が大きかったため、関係機関の協力の下、「常設展」と名称を変更したものの同じ展示内容で開催期間を延長することとなり、結果的に1年内に及ぶロングランを記録した。

当館では、長年にわたる埋蔵文化財の調査・研究の成果を生かし、多方面から構内遺跡の情報を発信するとともに、今後とも「実物展示」を最大の特徴とした常設展・企画展を開催していく所存である。



写真 54 第 20 回企画展の展示模様

第2節 資料館における社会教育活動

第4回公開授業「古代人の知恵に挑戦！一弥生土器をつくってみよう！」を開催 はじめに

当館では、平成13年度より、考古学や埋蔵文化財、山口大学構内遺跡の調査研究成果を地域の皆さんに身近に感じていただくことを目的として、公開授業を開催している。

第4回目となる今年度の公開授業は、吉田キャンパスなどから出土した弥生土器を観察し、それらを参考にして実際に自分で土器をつくってみるという内容で、平成16年12月4日（大学会館会議室）、12月18・19日（埋蔵文化財資料館横）の延べ3回にわたり行った。今回参加していただいたのは、小学生3人、保護者・一般10人、総勢13人の皆様であった。以下で授業内容を報告したい。

平成16年12月4日(土)～粘土から土器をつくってみよう！

午前の部では、土器の歴史や弥生土器について、プリントやスライドにより学習した後、埋蔵文化財資料館の企画展「古代の周防國」を見学した。

午後の部では、館員から土器の製作方法について説明を受け、出土品や館員が製作した土器を見て学習した後、実際に土器の製作を行った。粘土は市販の野焼き用粘土を使用した。参加者は粘土の扱いに苦労していたが、大変熱心であり、終了時間までに2～3個の土器や土笛を作った。いずれも古代のイメージを形にした個性あふれる力作であり、その後、室内で自然乾燥させた。

平成16年12月18日(土)・19日(日)～土器を焼いてみよう！

土器の焼成にあたっては、近年の研究で弥生時代の土器の焼成方法として推測されている「覆い焼き」で、具体的には以下の順序で行った。

- ①地面に藁を敷いて薪を積み上げる。
- ②薪の上に土器を載せて藁で覆う。
- ③藁の上を赤土をこねた粘土により覆う。
- ④窯の下部に点火口を空けて、あらかじめおこしておいた炭火を入れ、窯の上部に空気穴を5～6ヶ所空ける。
- ⑤その後、約1日かけて焼き上げる。

上記の作業は自由参加としていたが、ほとんどの受講者が積極的に参加した。特に赤土をこねて粘土をつくる作業は、寒い上に汚れやすく、予想以上の重労働となつたが、参加者全員で2つの窯をつくり、午前11時に点火した。今回は温度計を準備できなかつたため、残念ながら温度計測を行っていないが、他の多くの実験例同様、徐々に窯の温度が上昇していく状況を観察できた。

12月19日(日)～土器の完成！

点火後、約23時間経過した19日午前10時から土器の取り出しを行つた。挨拶と状況の説明の後、随時説明、記録を行いつつ参加者全員で窯の上部を壊して土器を取り上げた。まだ、窯内は熱く、軍手着用の上での慎重な作業となつた。幸い、一つの土器も割れることなく焼き上げることができ、無事に公開授業を終了することができた。なお、参加者が作成した土器の一部は平成17年2月10日まで埋蔵文化財資料館で展示させていただいた。

公開授業を終えて

土器の歴史と弥生土器についての授業は小学生の参加者にはやや難解なものとなり、土器の製作にも苦労する傾向があるので、今後はより配慮する必要がある。しかし、土器の製作、焼成時の作業に

については、「また土器をつくるみたい」という声が参加者全員から聞かれ、大変好評であった。当館では、今回の授業と参加者からの声を踏まえ、体験メニューを増やすなど、さらに充実した授業を行いたいと考えている。

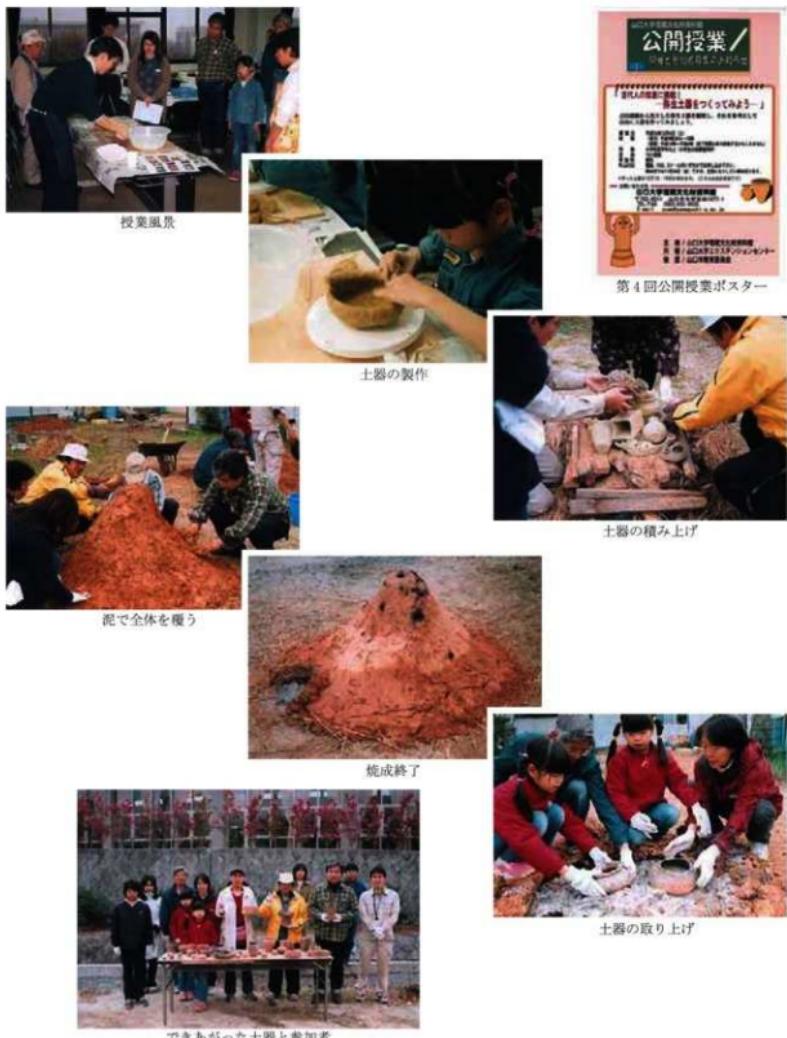


写真55 第4回公開授業の模様

付篇

山形重弧文覚書

田畠 直彦

1. はじめに

弥生時代前期の山口県西部の土器は「綾羅木式土器」としてよく知られているが、これに伴う特徴的な文様として山形重弧文がある。山形重弧文は壺の胴部に山形文と重弧文を連続的に描くことを特徴とし、山口県西部の響灘沿岸、現在の下関市域にほぼ限定して分布する文様である。齊一性の強い遠賀川式土器において、山形重弧文のように比較的狭い特定の地域に分布する文様は希であり、注目を集めてきた。

山形重弧文が施文された壺がまとめて検出されたのは、弥生時代前期の埋葬遺跡として著名な下関市豊浦町所在の中ノ浜遺跡¹⁾である。その後、下関市菊川町上原遺跡²⁾でも土壇や溝から同様の壺が多数出土した。上原遺跡を調査した富士整勇氏によれば、中ノ浜遺跡と上原遺跡は文様(山形重弧文)において、極めて特徴的な共通点を持つことを吉村次郎氏が早い段階で指摘している³⁾。また、富士整氏自身も上原遺跡出土土器の詳細な検討を通して、中ノ浜遺跡と上原遺跡が密接な関係にあることを強調している。

近年、近藤喬一・乗安和二三氏は『山口県史 資料編考古 I』⁴⁾で弥生時代前期の土器文様の集成と検討を行い、山形重弧文についても述べている。その分布については、響灘沿岸地域を中心東は山口盆地、北は石見地方にまで及んでいると指摘した。また、載頭山形文と重弧文を組み合わせて創出されて県西部で成立した独自の文様で、具体的には中ノ浜遺跡・上原遺跡の状況から田部盆地から川棚平野にかけての地域で新たに成立した文様としている。

なお、両氏の作成した集成図においては、中ノ浜・上原遺跡出土土器を中心に新たに採拓した山形重弧文の拓本が多数掲載されており、検討可能な資料が大幅に増加した。また、後述するように近年の発掘調査によっても資料が増加しつつある。

一方、筆者は吉田遺跡において附属図書館敷地から出土し、既に報告されている土器の中で山形重弧文が施文された壺の胴部片を確認した(92)。小片であるが、山形文は3条単位、重弧文は4条単位で施文されている。下部が欠損しているものの、残存部分から山形文と重弧文が連続して施文されていたと推測される。筆者の編年で II-IIIa 期に位置づけられ、恐らく響灘沿岸地域からの搬入品であろう。また、現在のところ山口県内では下関市以外における唯一の出土例であり、地域間交流を裏付ける重要な資料である。以上のような資料の増加を踏まえ、今回、山形重弧文が施文された土器の集成と若干の検討を行いたい。なお、全ての土器を実見していないので、詳細な検討は、別の機会にゆずりたい。

2. 山形重弧文とは

上記のように山形重弧文とは、山形文と重弧文をとぎれることなく連続的に描くことを特徴とする。いずれも壺の胴部に施文されており、現在のところ壺以外の器種に施文された例はない。山形重弧文の山形文を見ると、一般的な山形文とはやや異なる。山形重弧文の山形文の数は1-7まである。頂部の角度は約50-70度で、一般的な山形文の山形の頂部の角度が約90-110度のものが主体であるのに対して鋭い。これは、重弧文1単位に相当する幅に2単位以上の山形文を施文することに起因

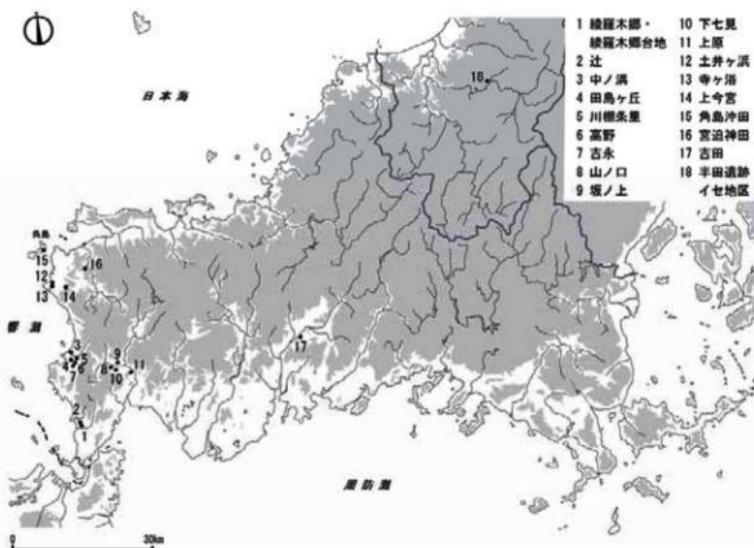


図40 山形重弧文施文土器の分布図

している。このため、山形文のみが残存する破片においても、頂部の角度が約50—70度であれば山形重弧文の一部である可能性が高く、さらに2単位以上の連続した山形文であれば可能性はより高くなる。

上記のような山形重弧文の山形文の形状は、一般的な山形文よりも90度回転させた羽状文に近似している。このことから山形重弧文は単に山形文と重弧文を組み合わせたのではなく、羽状文の属性も取り入れたと考えられる。現在のところ、山形重弧文が施文された最古の土器は中ノ浜遺跡出土の小型壺(5—10)である。これらは I a—I b期に位置づけられることから、山形重弧文は同遺跡が位置する川棚平野で弥生文化成立直後に生み出された文様と推測される。

3. 施文方法

施文方法については、松藤暢邦氏により詳細な検討がなされている¹⁰。松藤によれば、施文順序は I b期には向かって左から右方向に施文されたものが多く、II期以降、右から左方向へ施文されたものが増加するという。また、上記の順序とは関わりなく山形文→重弧文の順序で施文されたもの、逆に重弧文→山形文の順序で施文されたものも II期以降に増加するとともに、時期が降るにつれ1個体に施される山形重弧文の数が増加する傾向があるという。壺の胴部文様全般において横分割と文様が複雑化する方向性と基本的に軌を一にしているといえよう。

また、施文具について筆者がこれまで観察した範囲では、I a—I b期はいわゆるヘラ状工具とみられるが、II期以降は鋸歯状圧痕がつかない貝の腹縁やタマキガイの押圧によるものが主体となるようであり、これも壺文様全般の傾向と一致している。

4. 他文様との組み合わせ

山形重弧文と他文様との組み合わせをみると、①単独で施文されたもの、②羽状文と組み合うもの、③その他の文様と組み合うものに大別できる。I b期は全て単独で施すものであるが、II期以降、羽状文を主文様帶として、その下位に重弧文や載頭山形文・鱗齒文などの副文様帶が付加されるようになると、山形重弧文においても無軸羽状文の下位に施されるものが多くなる。しかし、III b期に至っても山形重弧文単独で施文されるものがあり(81、82)、古い属性も残存したことがうかがえる。

5. 分布

a. 地域

今回集成了93点のうち、川棚・吉永平野、田部盆地の遺跡からの出土土器が70点あり、全体の約75%を占める。川棚・吉永平野より南の地域では極めて少なく、綾羅木郷・綾羅木郷台地遺跡では3点しか報告されていない。膨大な報告資料から壺の胴部文様において山形重弧文が占める割合は数%以下と推測され、上記3点の壺も川棚・吉永平野の遺跡からの搬入品である可能性が高い。

一方、下関市豊北町ではこれまで土井ヶ浜遺跡出土例のみが知られていたが、今回、上今宮、寺ヶ浴、角島沖田、宮迫神田遺跡での出土が確認できた。これらの遺跡を含めて山形重弧文が施文された土器は17点あり、全体の約17%を占める。時期的にもI b～III b期までの資料が存在する。遺構に伴う出土例が極めて少ないので、壺の胴部文様において山形重弧文が占める割合は定かでないが、綾羅木郷・綾羅木郷台地遺跡よりも高率であることは確実であろう。以上により、山形重弧文は川棚・吉永平野、田部盆地を中心に以北の下関市豊北町にかけてが主な分布域と考えられる。

次に、川棚・吉永平野と田部盆地の遺跡における山形重弧文が施文された土器の出土状況を概観しておきたい。川棚・吉永平野では、中ノ浜、田島ヶ丘、川棚条里、高野、吉永遺跡で山形重弧文が施文された壺が出土している。中ノ浜遺跡出土の壺の胴部文様において山形重弧文が占める割合は未公表資料が多いため定かでないが、比較的まとまって資料が公表されている1次調査の報告が参考となる。富士塙氏は1次調査において、山形重弧文が施された壺を少なく見積もって43%強と推測している。また、5～7次調査においても、山形重弧文が施文された壺が多數出土している。

一方、近年、この地域では集落遺跡の調査が相次いだ。特にII期の環濠、土壙などが検出された吉永遺跡、III a～III b期の土壤が検出された高野遺跡からは当該期の土器が大量に出土している。吉永遺跡は中ノ浜遺跡から直線距離で約3km南、高野遺跡は直線距離で約2.1km南東に位置しており、やや離れているものの中ノ浜遺跡で埋葬が行われていた時期に存在した集落である。

吉永遺跡V・VI地区SD314では、報告書掲載の胴部に文様が施文された壺21点のうち、山形重弧文が施文されたものが4点、約19%を占める。他に山形重弧文が施文された土器が数点確認されているものの、報告書では山形重弧文の占める割合は低率であることが指摘されている。従って、山形重弧文の割合は多く見積もっても20%を越えることはないと推測される。高野遺跡では、報告書掲載の胴部に文様が施文された壺29点のうち、山形重弧文が施文されたものが11点、約41%と高率であるが、未公表資料を含めた割合は定かではない。仮に上記の割合が妥当であるとすれば、

山形重弧文は高野遺跡が位置する川棚平野に分布の中心があり、川棚平野と丘陵を隔てて南に位置する吉永平野は分布の中心からややはざれると見ることが可能であろう。また、上原遺跡を擁する田部盆地と川棚平野は川棚川の上流を遡り久野川を下るルートで結ばれており、密接な交流があったと指摘されていることから、山形重弧文は川棚平野と田部盆地を中心に盛行したと推測される。

一方、中ノ浜遺跡における山形重弧文の占める割合が吉永・高野遺跡よりも高率であるとすれば、中ノ浜遺跡では、副葬・供獻用に山形重弧文が施文された壺が意図的に選別された可能性を考えられよう。今後、各遺跡の未公表資料を踏まえた慎重な検討が必要である。

田部盆地では、山ノ口遺跡、坂ノ上遺跡、下七見遺跡、上原遺跡から山形重弧文が施文された壺が出土している。上原遺跡では、富士塙氏によれば、II～IIIa期の壺の文様のうち、山形重弧文の占める割合が約50%を占めるという。^{II-19} 下七見遺跡では公表されている資料を見る限り上原遺跡ほど山形重弧文は見られないが、未公表資料が多數あるため、状況は不明確で再検討が必要である。なお、上原遺跡、下七見遺跡では山形重弧文の下位に縱方向の弧文が施文された壺(56、67、73)が出土している。現在のところ、同じモチーフの文様は両遺跡以外では確認しておらず、小地域色と両遺跡の交流がうかがえる資料である。

b. 時期

時期別の分布をみると、Ia～b期に属するもの及び可能性のあるものは中ノ浜遺跡に集中している。しかし、少量ながら角島沖田遺跡でも認められ、島根県唯一の出土例である半田遺跡イセ地区出土土器もこの時期に所属すると考えている。胎土分析は行われていないが、恐らく搬入品であろう。^{II-20} 山陰地方の弥生文化の成立には響灘沿岸地域の集団が少なからず関与していると想定されるので、今後、山陰地方での類例の増加が期待される。^{II-21}

II～IIIa期に属するものが最も多く、今回の集成では71点、全体の約76%を占め、響灘沿岸全城での分布が認められる。しかし、以後は減少し、IIIb期には川棚平野、田部盆地以北で少量分布するのみとなり、中期初頭には消失する。^{II-22} IIIb期における山形重弧文の急減はこの時期に顕著となる壺文様の複雑化が深く関係していると考えられる。壺文様の複雑化については、筆者も近藤・乗安氏が述べるように、人口増加やこれに伴う社会的緊張、高潮の被害などにより社会の枠組みが揺らぎ、土器づくりにおける集団的規制が弛緩した結果と捉えている。こうした状況下において、弥生文化成立以来の伝統的な文様であった山形重弧文は急速に廃れたのであろう。

そして、中期初頭になると綾羅木郷遺跡では城ノ越式土器の存在に象徴されるように北部九州の影響が顕著となる。一方、川棚・吉永平野、田部盆地以北の響灘沿岸地域では、壺・甕において内折口縁が盛行するなどIIIb期の要素が残存し、次段階から北部九州の影響が顕著となる。このことから、上記の地域では山形重弧文の分布に象徴された紐帶が中期初頭までは保たれていたと考えられる。

6. おわりに

今回の集成で、山形重弧文は川棚・吉永平野、田部盆地を中心に以北の下関市豊北町にかけて分布し、響灘沿岸地域で最大規模の集落が存在した綾羅木郷・綾羅木郷台地遺跡では極めて少ないことが確認できた。山形重弧文を含めた土器の文様にどのような意味が込められていたのかは定かではない。しかし、主に川棚・吉永平野、田部盆地から下関市豊北町にかけて山形重弧文を用いた背景には、これらの地域間で陸路、海路を通じた密接な交流が存在したことを意味している。このことは、

從来から指摘されるように響灘沿岸における弥生文化の成立と展開を捉えるうえで注目すべき視点であろう。また、今後、山陰・九州など響灘沿岸地域と交流のあった地域でも、山形重弧文が施文された壺が出土する可能性は高い。課題は山積しているが、既報告資料及び遺構や他遺物との関連について検討を進めることにより、さらに踏み込んだ議論ができるこことを期待したい。

謝辞

小稿執筆にあたっては、下記の個人・機関に便宜をはかっていただき、有益なご教示を受けた。記して感謝いたします。

河田聰、河村吉行、宝川昭男、中村友博、乗安和二三、藤本有紀、松藤暢邦、下関市教育委員会、山口県埋蔵文化財センター、山口県史編さん室

[註]

- 1) 豊浦町教育委員会(編)(1990)『史跡 中ノ浜遺跡』豊浦(山口)
- 2) 富士埜勇「III遺構・遺物」菊川町教育委員会(編)(1976)『上原遺跡発掘調査報告Ⅰ』、菊川(山口)
- 3) 富士埜勇(1993)「山口県菊川町所在上原遺跡出土弥生土器」九州古文化研究会(編)『古文化談叢第(30)巻上』、北九州
なお、富士埜氏は山形重弧文を「重弧山形文」と呼称している。
- 4) 近藤喬一・東安和二三(2000)『6 集成図 弥生前期の土器文様』山口県(編)『山口県史 資料編考古1』、山口
- 5) 山口県史編さん室のご好意で掲載された拓本について、各遺跡の出土遺構と縮尺について確認させていただき、掲載を許して
いただいた。
- 6) 河村吉行(1985)「第2章中央図書館増築予定地M-16区の発掘調査」山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内進跡調査
研究年報II』、山口
- 7) 田畠直彦(2003)「山陰地方における綾羅木系土器の展開」近藤喬一先生退官記念事業会(編)『山口大学考古学論集』、山口
以下の編年は上記文献に基づく。
- 8) 掲載した土器実測図、拓本、写真は各文献から一部改変の上掲載した。
- 9) 今回の集成にあたっては上記を根据に判断し、山形のみが残存している破片も含めている。
- 10) 松藤氏が1993年度に九州大学文学部に提出した卒業論文「西部瀬戸内における弥生時代前期埴形土器の研究—山形重弧紋土
器を中心として—」による。ご好意により、言及を許していただいた。
- 11) 山形文1単位と重弧文1単位が組み合うものを山形重弧文の一単位とする。
- 12) 前掲註4
- 13) 各遺跡の未報告資料から、実際には150点以上は出土していると推測される。
- 14) 國分直一・伊東照雄・木下尚子(1988)「中ノ浜遺跡の弥生時代前記埋葬—第一次調査報告」梅光女学院大学(編)『地域文化研
究第3号』、下関
- 15) 前掲註3
- 16) 向上昭彦ほか(2003)「III調査の成果2遺物」山口県埋蔵文化財センター(編)『吉永遺跡(V地区)』山口県埋蔵文化財センター調
査報告第38集、山口
- 向上昭彦ほか(2004)「III調査の成果2遺物」山口県埋蔵文化財センター(編)『吉永遺跡(VI地区)』山口県埋蔵文化財センター調
査報告第43集、(財)山口県教育財團 山口県埋蔵文化財センター、山口

- 17) 谷口哲一(1999)「III調査の成果1、第一次調査(平成7年度)(2)遺物」山口県埋蔵文化財センター(編)『高野 遺跡(北地区)』
山口県埋蔵文化財センター報告第9集、山口
- 18) 富士埜勇(1986)「城山遺跡とみち」豊浦町教育委員会(編)『城山遺跡発掘調査報告』、豊浦(山口)
- 19) 前掲註3
- 20) 宝川昭男氏のご教示を得た。
- 21) 矢野謙一・中川寧・中村豊(1994)「島根県匹見町イセ遺跡の資料紹介~土師器・赤生前期・縄文晚期の土器~」鳥根考古学会(編)
『島根考古学誌』第11巻
- 22) 中村友博先生のご教示を得た。
- 23) 前掲註7、田畠直彦(2003)「長門北浦地域における赤生文化の成立」立命館大学考古学論集刊行会(編)『立命館 大学考古学論
集III』、京都
- 24) 前掲註4

遺跡文献

1. 伊東照雄(1981)「IV遺構と遺物2弥生時代(2)遺構と遺物」下関市教育委員会(編)『綾羅木郷遺跡発掘調査報告
第1集』、下関
2. 前掲註4
3. 伊東照雄(1980)「弥生式土器の文様と施文具」国分直一博士古稀記念論集編纂委員会(編)『日本民族とその周辺
考古篇』、下関
4. 前掲註1
5. 豊浦町教育委員会(編)(1990)『山口県指定史跡 中ノ浜遺跡環境整備報告書』、豊浦(山口)
6. 乗安和二三(1985)「V 遺物」豊浦町教育委員会(編)『中ノ浜遺跡第9次発掘調査概報』、豊浦(山口)
7. 前掲註14
8. 國分直一(1961)「無田遺跡と周辺の諸遺跡」山口県教育委員会(編)『山口県文化財概要第4集』
9. 藤本有紀(2005)「第五次調査」下関市教育委員会豊浦教育支所(編)『川棚条里跡4』、下関市文化財調査報告書1、
下關
10. 前掲註17
11. 前掲註16 向上昭彦ほか(2003)
12. 前掲註16 向上昭彦ほか(2004)
13. 河名達雄他「IV遺物1. 弥生土器」山口県教育委員会(編)『山ノ口遺跡』山口県埋蔵文化財調査報告第140集
14. 阿字雄徹他(1988)「坂の上遺跡」山口県教育委員会(編)『坂ノ上遺跡 植松古墳群』山口県埋蔵文化財調査報告
書第113集、山口
15. 磐部貴文(1989)「第4章遺物1土器」菊川町教育委員会(編)『下七見遺跡 I』、菊川(山口)
16. 宝川昭男(1992)「第IV章遺物1土器及び土製品」菊川町教育委員会(編)『下七見遺跡 II』、菊川(山口)
17. 前掲註2
18. 乗安和二三(1982)「II 調査の概要4. 出土遺物」豊北町教育委員会(編)『土井ヶ浜遺跡第7次発掘調査概報』、
北町埋蔵文化財調査報告第2集豊北(山口)
19. 乗安和二三(1983)「II 調査の概要4出土遺物(1)弥生土器」豊北町教育委員会(編)『土井ヶ浜遺跡第8次発掘
調査概報』、北町埋蔵文化財調査報告第5集、豊北(山口)

20. 乗安和二三(1984)「II調査の概要4出土遺物(1)弥生土器」豊北町教育委員会(編)『土井ヶ浜遺跡第9次発掘調査概報』豊北町埋蔵文化財調査報告第6集、豊北(山口)
21. 有福史博(2005)「第3章III寺ヶ谷遺跡各区の遺構と遺物」土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム(編)『土井ヶ浜遺跡周辺遺跡群 寺ヶ谷遺跡 広田遺跡 磐地遺跡』、下関市文化財調査報告書9 山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第38集、下関
22. 田部秀男(2003)「第4章第3節南地区的遺構と遺物」豊北町教育委員会(編)『中平尾遺跡・上今宮遺跡』山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第23集、豊北(山口)
23. 古庄浩明(2000)「四、出土遺物1、土器」角島・沖田遺跡豊北町教育委員会(編)山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第18集、豊北(山口)
24. 前掲註7 田畠(2003)
25. 堀田浩一他(2005)「III宮迫神田遺跡(2)遺物」山口県埋蔵文化財センター(編)『宮迫神田遺跡 的場遺跡』山口県埋蔵文化財センター調査報告第51集 下関市文化財調査報告書11 山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第40集、山口、下関
26. 河村吉行(1985)「第2章中央図書館増築予定地M-16区の発掘調査」山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅱ』、山口
27. 矢野健一(1993)「イセ遺跡」四見町教育委員会(編)『ヨレ遺跡・イセ遺跡・筆田遺跡』、四見(島根)
28. 矢野謙一・中川寧・中村聰(1994)「島根県四見町イセ遺跡の資料紹介—土師器・弥生前期・縄文晩期の土器—」島根考古学会(編)『島根考古学会誌』第11巻
29. 松本岩雄(1992)「石見地域」正岡睦雄・松本岩雄(編)『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』、木耳社、東京

表8 山形重弧文施文土器の集成表①

番号	遺跡名	地区・遺構名	時期	文様組み合わせ	備考	文献
1	綾羅木郷	V IV地[XL,N6018]	II	山形重弧文	拓本県史233	1, 2
2	綾羅木郷台地	明神地区	II	山形重弧文	拓本県史13	2
3	綾羅木郷	TT地[XL,N5305-1]	II ~ IIIa	山形重弧文		1
4	辻		IIIa	無軸羽状文+山形重弧文	拓本県史48	2, 3
5	中/浜	9次トレチ1[KST905刷藤	I a ~ I b	山形重弧文		6
6	中/浜	9次トレチ1[KST908供歎	I a ~ I b	山形重弧文		6
7	中/浜	5~7次F3区	I a ~ I b	山形重弧文		4
8	中/浜	5~7次	I a ~ I b	山形重弧文	県史拓本69	2, 5
9	中/浜	1次Bトレチ3	I a ~ I b	戴頭山形文+山形重弧文	拓本県史86	2, 3
10	中/浜	5~7次H4区2号遺構	I a ~ I b	山形重弧文		4
11	中/浜	1次第4石群	I b ~ II	山形重弧文	拓本県史73	2, 7
12	中/浜	5~7次	I b ~ II	山形重弧文	拓本県史79	2, 4
13	中/浜	5~7次	I b ~ II	山形重弧文	拓本県史78	2, 4
14	中/浜	5~7次	I b ~ II	山形重弧文+重弧文	拓本県史71	2, 4
15	中/浜	5~7次 I 2区1号遺構	II	有軸羽状文+山形重弧文	拓本県史97	2, 4
16	中/浜	9次Bトレチ4区第4解	II	山形重弧文		6
17	中/浜	5~7次 I 3区10号遺構	II	無軸羽状文+山形重弧文	拓本県史90	2, 4
18	中/浜	1次Aトレチ2	II	山形重弧文	拓本県史74	2, 7
19	中/浜	1次Aトレチ3, Bトレチ1	II	山形重弧文	拓本県史70	2, 7
20	中/浜	5~7次	II	山形重弧文	拓本県史80	2, 4
21	中/浜	5~7次	II	山形重弧文	拓本県史68	2, 4
22	中/浜	5~7次	II	山形重弧文	拓本県史84	2, 4
23	中/浜	1次Bトレチ	II ~ IIIa	山形重弧文	拓本県史76	2, 7
24	中/浜	5~7次	II ~ IIIa	山形重弧文	拓本県史81	2, 4
25	中/浜	1次1号石棺	II ~ IIIa	無軸羽状文+山形重弧文	33と同一か	7
26	中/浜	9次表探	II ~ IIIa	無軸羽状文+山形重弧文		6
27	中/浜	9次Bトレチ2区第4解	II ~ IIIa?	不明 山形重弧文(山形文)		6
28	中/浜	9次Bトレチ3区第4解	II ~ IIIa?	無軸羽状文+山形重弧文		6

表9 山形重弧文施文土器の集成表②

番号	遺跡名	地区・遺構名	時期	文様組み合わせ	備考	文献
29	中ノ浜	9次Eトレンド1区第2層	II～IIIa?	不明 山形重弧文(山形文)		6
30	中ノ浜	1次8号石棺	II～IIIa	無輪羽状文+山形重弧文		7
31	中ノ浜	9次表採	II～IIIa?	不明 山形重弧文		6
32	中ノ浜	1次	IIIa～IIIb	無輪羽状文+山形重弧文	拓本県史87か	2, 4
33	中ノ浜	1次	IIIa～IIIb	無輪羽状文+山形重弧文	拓本県史88	2, 4
34	中ノ浜	1次4号配石	IIIa	山形重弧文	拓本県史77	2, 7
35	中ノ浜	5～7次D1区4号人骨付近	IIIb	山形重弧文	拓本県史75	2, 4
36	田島ヶ丘		IIIb	無輪羽状文+山形重弧文	松藤氏教示	3, 8
37	高野	SK02043	IIIa	無輪羽状文+山形重弧文		10
38	高野	SK02043	IIIa	無輪羽状文+山形重弧文		10
39	高野	SK03054	IIIa	山形重弧文		10
40	高野	SK02016	IIIa	不明 山形重弧文(山形文)		10
41	高野	SK04069	IIIa	山形重弧文(山形文)		10
42	高野	SK03059	IIIa	山形重弧文		10
43	高野	SK03067	IIIa	不明 山形重弧文(山形文)		10
44	高野	SK03067	IIIa	山形重弧文		10
45	高野	SK03055	IIIa	無輪羽状文+山形重弧文		10
46	高野	SK03046	IIIa	無輪羽状文+山形重弧文		10
47	高野	SK03070	IIIb	無輪羽状文+山形重弧文		10
48	川棚条里	KT5C-SK175III	IIIa	無輪羽状文+山形重弧文		9
49	吉永	V地区KS3D314	II	網目文+山形重弧文		11
50	吉永	V地区KS3D314	II	山形重弧文		11
51	吉永	V地区KS3D314	II	無輪羽状文+山形重弧文		11
52	吉永	VI地区KS3D314	II	山形重弧文		12
53	山ノ口	SK49	II	山形重弧文		12
54	坂ノ上		II～IIIa?	不明 山形重弧文		13
55	下七見	第25地区SK20	IIIa	山形重弧文		14
56	下七見	第11地区SK20	IIIa	山形重弧文		15
57	下七見	第10地区SK6	IIIa	無輪羽状文+山形重弧文		15
58	下七見	第3地区SK3	IIIa	無輪羽状文+山形重弧文		15
59	下七見	第27地区SK24	IIIb	無輪羽状文+山形重弧文		16
60	上原	土壤28	II	山形重弧文	拓本県史113	2, 17
61	上原	土壤5	II	無輪羽状文+山形重弧文	拓本県史120	2, 17
62	上原	土壤5	II	山形重弧文	拓本県史104	2, 17
63	上原	土壤41	II	無輪羽状文+山形重弧文	拓本県史105	2, 17
64	上原	土壤33	II	山形重弧文+縱方向綫文		17
65	上原	土壤33	II	山形重弧文+縱方向綫文	拓本県史110	2, 17
66	上原	土壤61	II	山形重弧文		17
67	上原	土壤61	II	山形重弧文+縱方向弧文	拓本県史111	2, 17
68	上原	土壤70	II	無輪羽状文+山形重弧文	拓本県史106	2, 17
69	上原	土壤42	IIIa	山形重弧文	拓本県史107	2, 17
70	上原	土壤35	IIIa	山形重弧文	拓本県史109	2, 17
71	上原	土壤49	IIIa	無輪羽状文+山形重弧文		17
72	上原	土壤49	IIIa	山形重弧文		17
73	上原	土壤44	IIIa	山形重弧文+縱方向弧文	拓本県史108	2, 17
74	上原	土壤47	IIIa	無輪羽状文+山形重弧文	拓本県史121	2, 17
75	土井ヶ浜	7次	II～IIIa?	無輪羽状文+山形重弧文		18
76	土井ヶ浜	8次	II～IIIa?	不明 山形重弧文(山形文)		19
77	土井ヶ浜	9次	II～IIIa?	不明 山形重弧文(山形文)		20
78	土井ヶ浜	9次	II～IIIa?	不明 山形重弧文		20
79	土井ヶ浜	9次	II～IIIa?	不明 山形重弧文(山形文)		20
80	寺ヶ谷	SX0061	IIIa～IIIb	山形重弧文		21
81	寺ヶ谷	SX0056	IIIb	山形重弧文		21
82	寺ヶ谷	SX0056	IIIb	山形重弧文		21
83	上今宮	南地区Bトレンド3	IIIa～IIIb?	不明 山形重弧文		22
84	角島神田		I b	山形重弧文		23
85	角島神田		II	有輪羽状文+山形重弧文		23, 24
86	角島神田		II	山形重弧文		23
87	角島神田		II～IIIa	山形重弧文		23
88	宮迫神田	C区遺物包含層	II～IIIa	有輪羽状文+山形重弧文		25
89	宮迫神田	C区遺物包含層	II～IIIa	無輪羽状文+山形重弧文		25
90	宮迫神田	C区遺物包含層	II～IIIa	無輪羽状文+山形重弧文		25
91	宮迫神田	C区遺物包含層	II～IIIa	無輪羽状文+山形重弧文		25
92	吉田	附屬回廊第4層黒褐色粘土質土	II～IIIa?	不明 山形重弧文		26
93	平田遺跡	イセ地区C2区第3層	I b	山形重弧文		27～29

※時期は註7文献による。

※備考の県史と数字は、註2文献と挿図中の番号を示す。

※(山形文)は山形文のみ残存していることを示す。

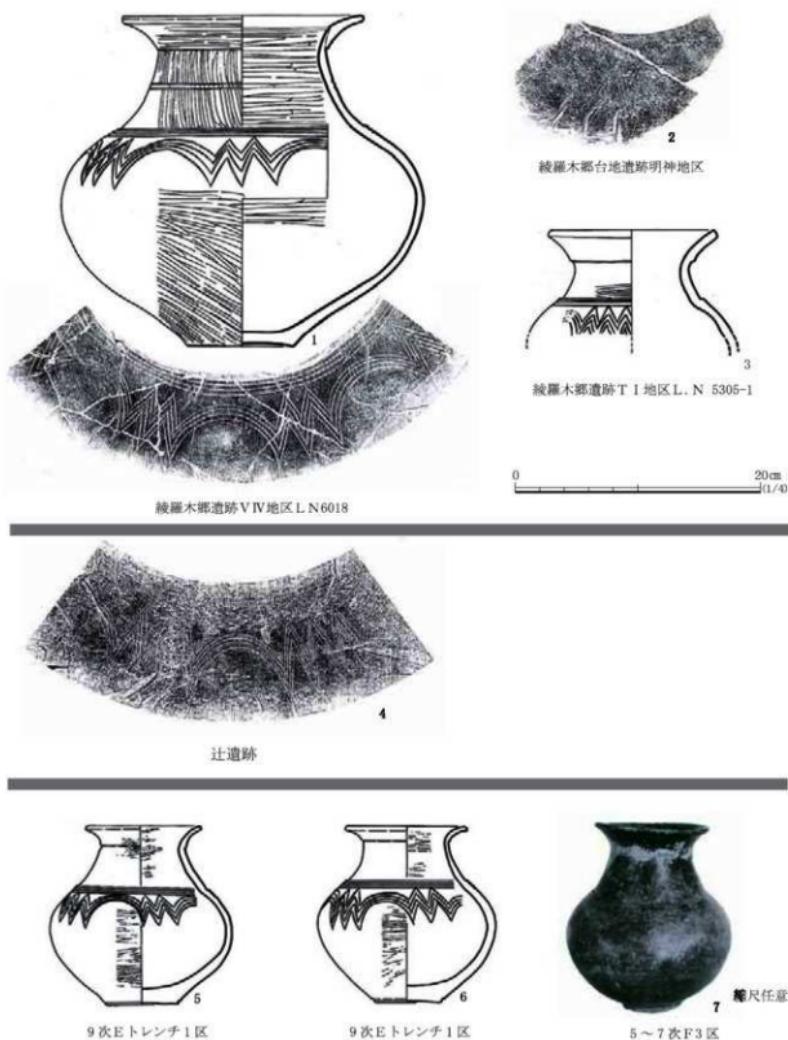


図 41 山形重弧文施文土器①(綾羅木郷遺跡・綾羅木郷台地遺跡、辻遺跡、中ノ浜遺跡)

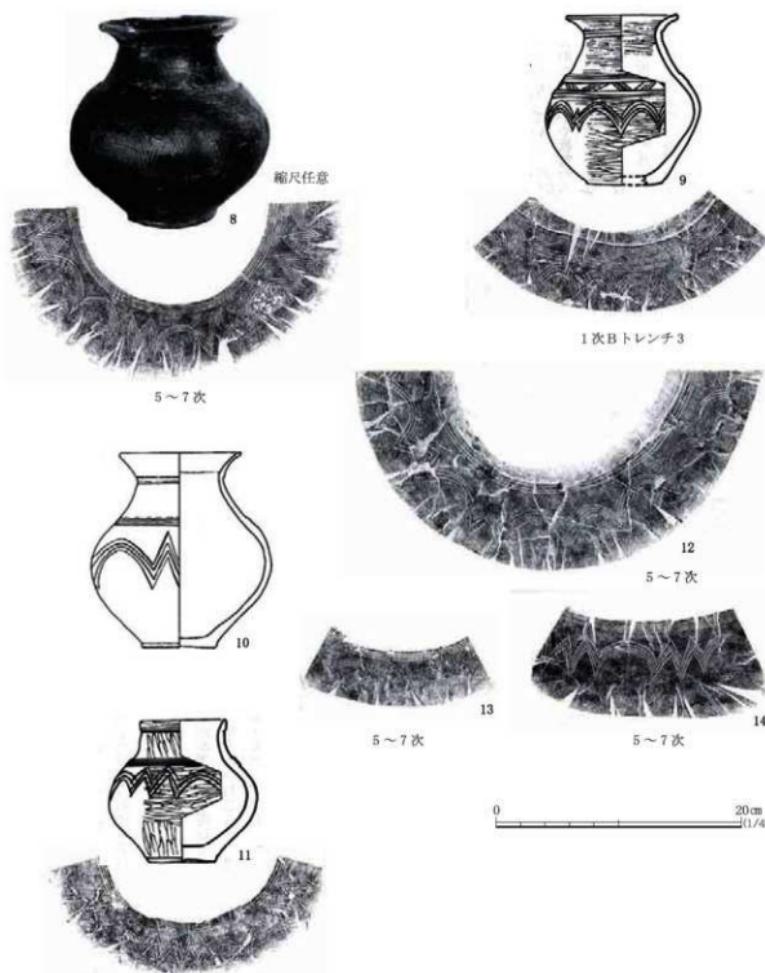


図42 山形重弧文施文土器②(中ノ浜遺跡)

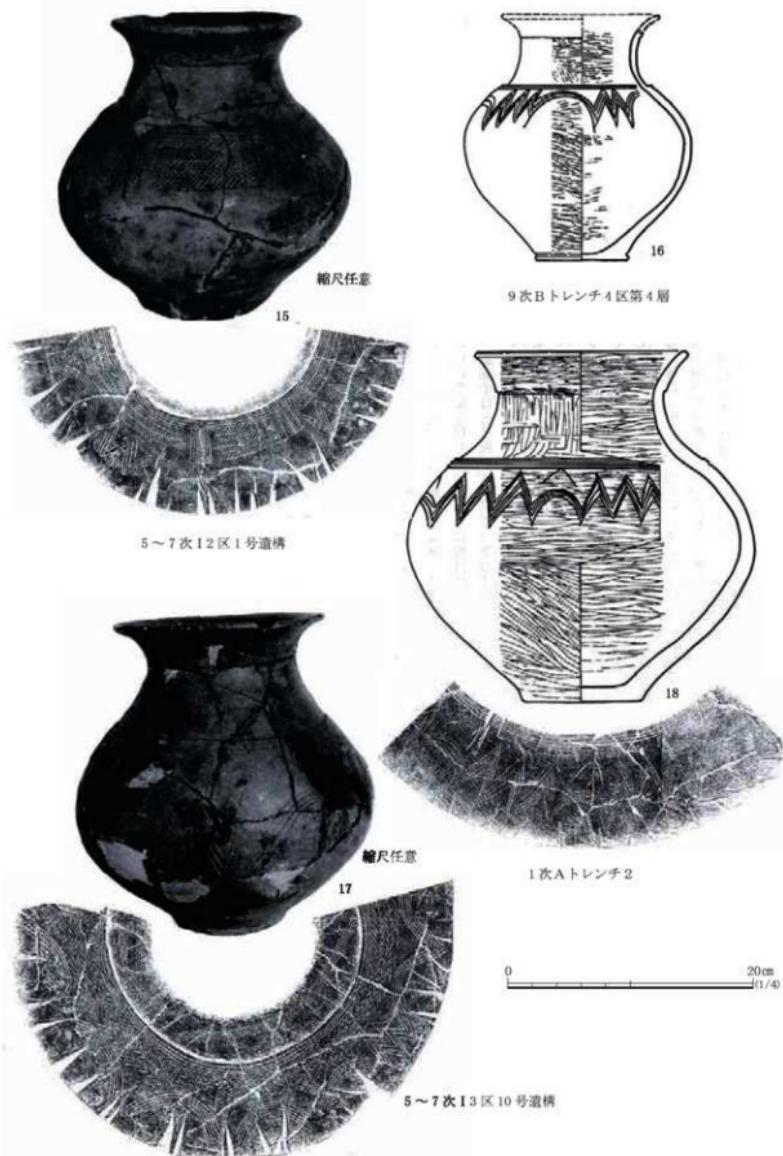


図43 山形重弧文施文土器③(中ノ浜遺跡)

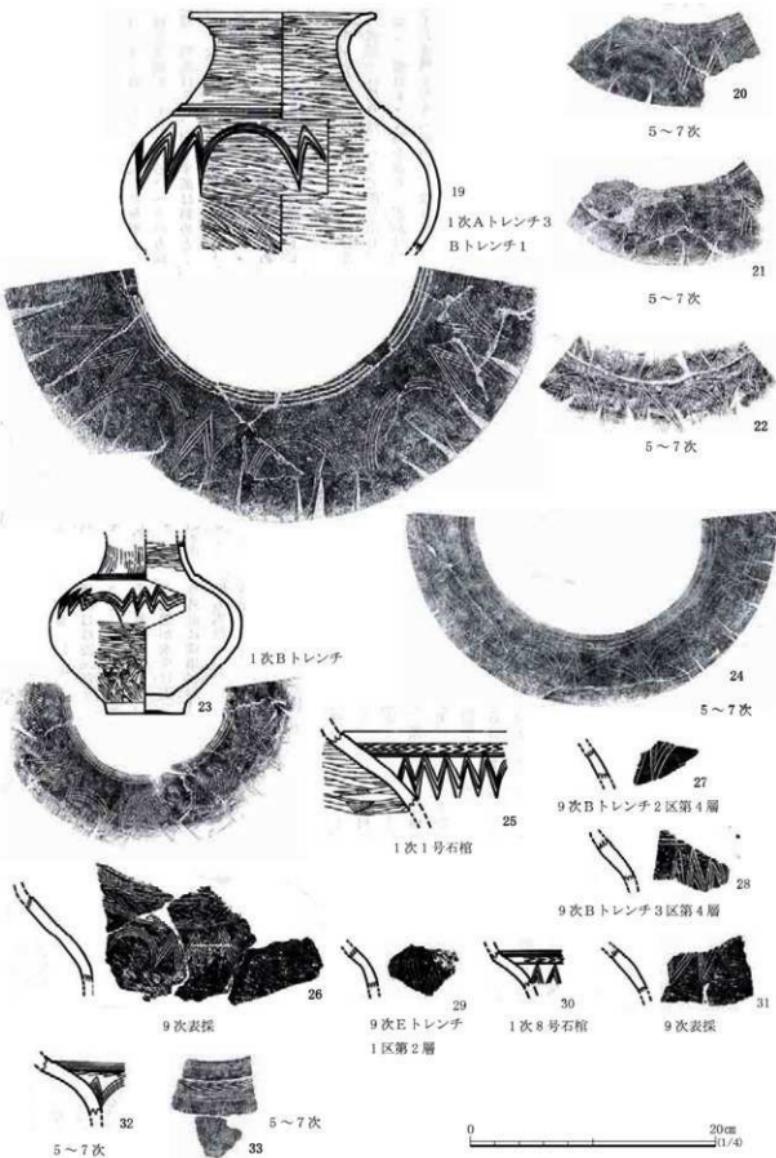


図 44 山形重弧文施文土器④(中ノ浜遺跡)

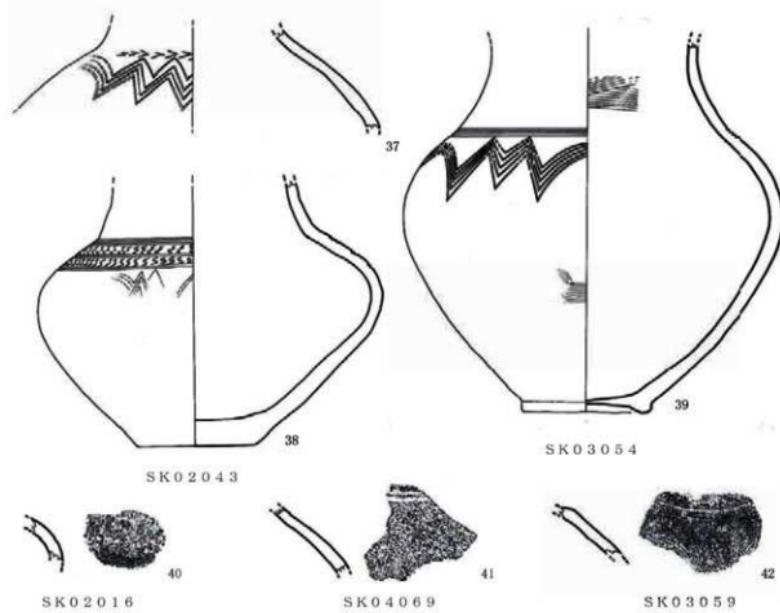
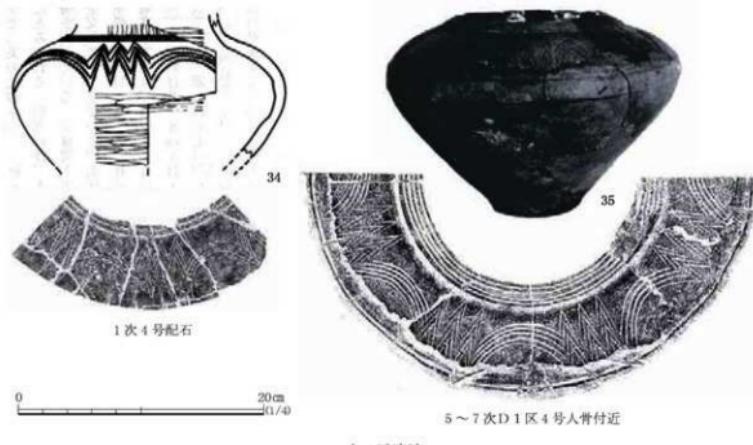
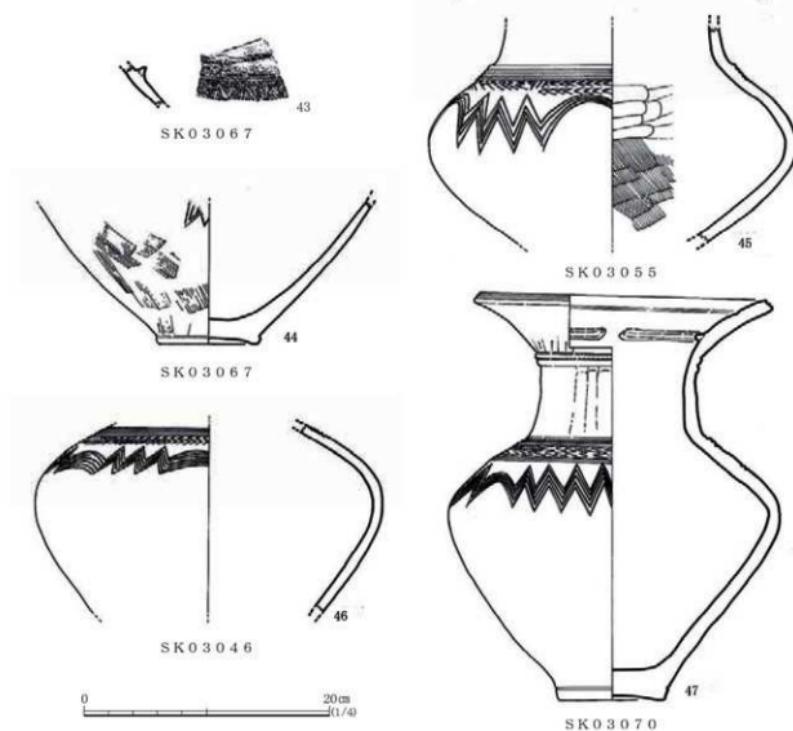


図45 山形重弧文施文土器⑤(中ノ浜遺跡、高野遺跡)



高野遺跡

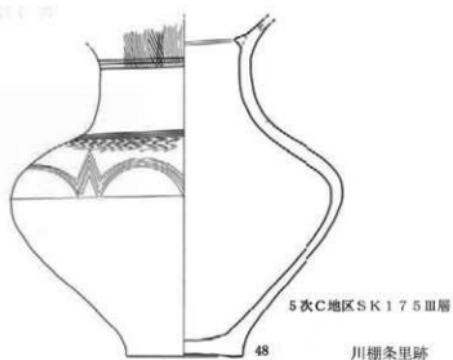
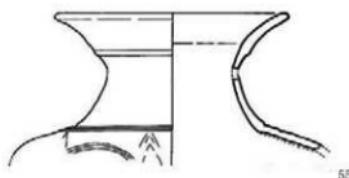
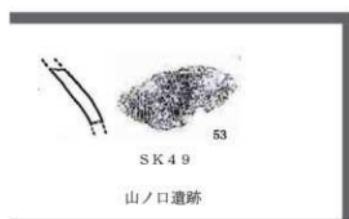
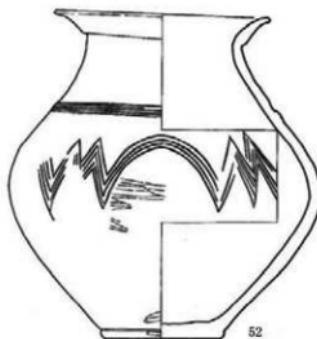
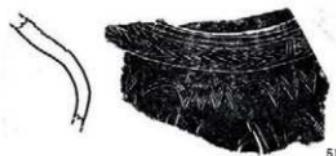
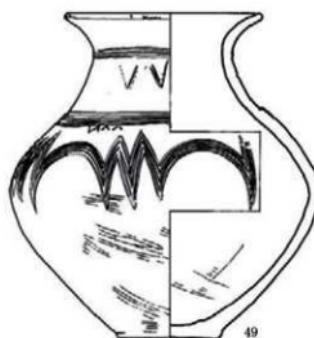
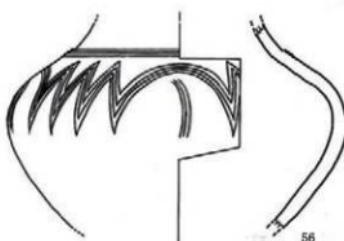


図 46 山形重弧文施文土器⑥(高野遺跡、川棚条里跡)



0 20cm
10/40



下七見遺跡

図47 山形重弧文施文土器⑦(吉永遺跡、山ノ口遺跡、下七見遺跡)

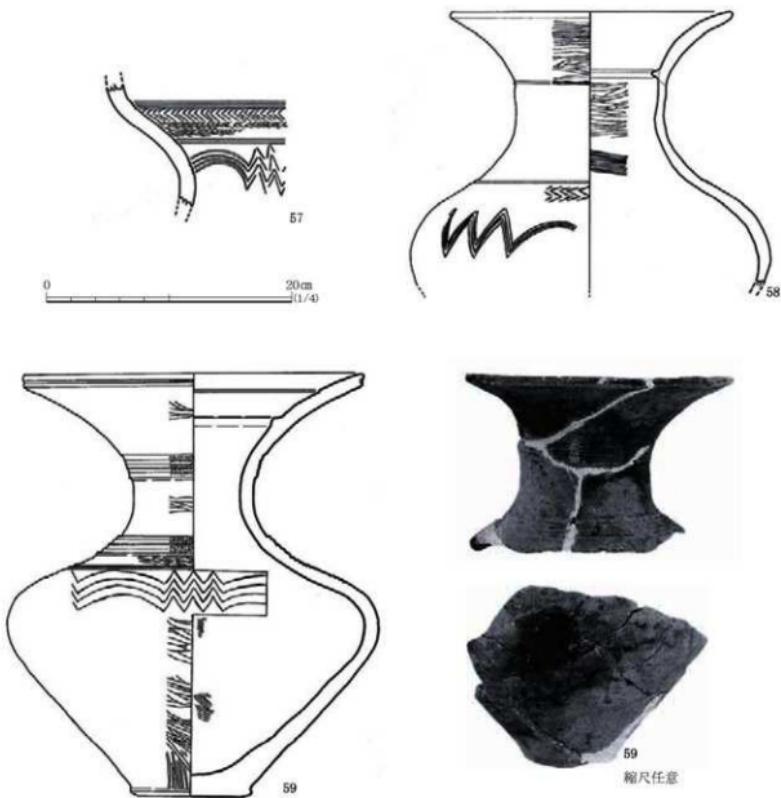


図48 山形重弧文施文土器⑧(下七見遺跡)

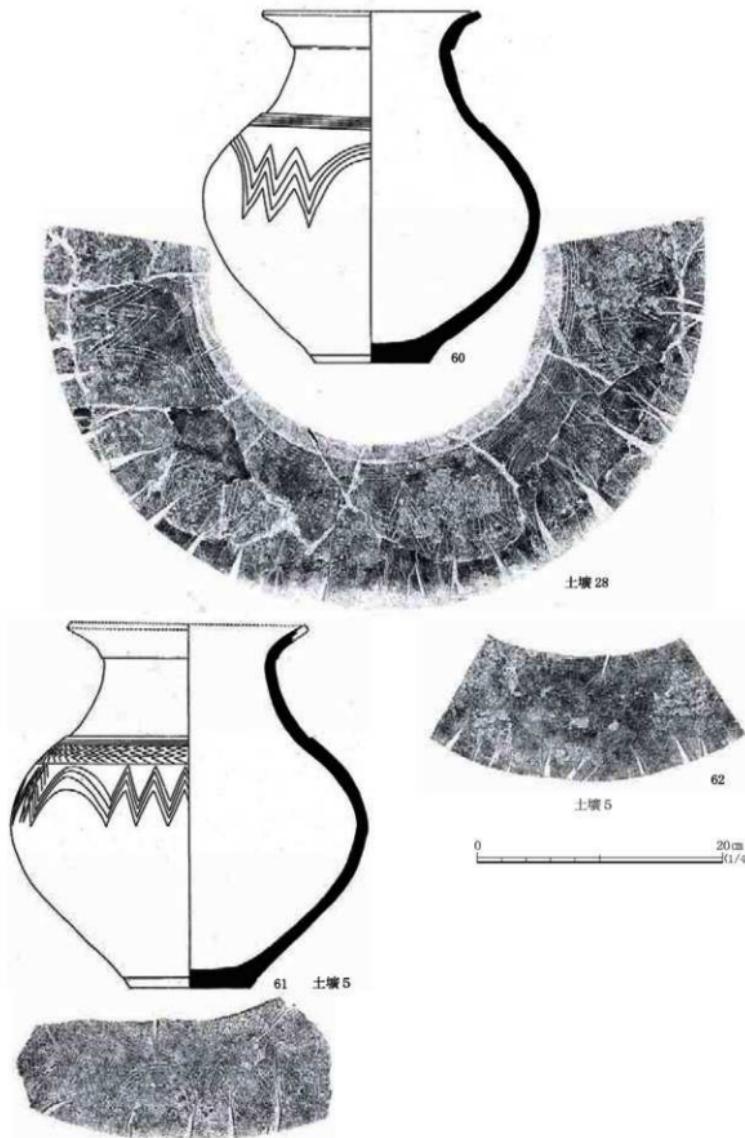


図 49 山形重弧文施文土器⑨(上原遺跡)

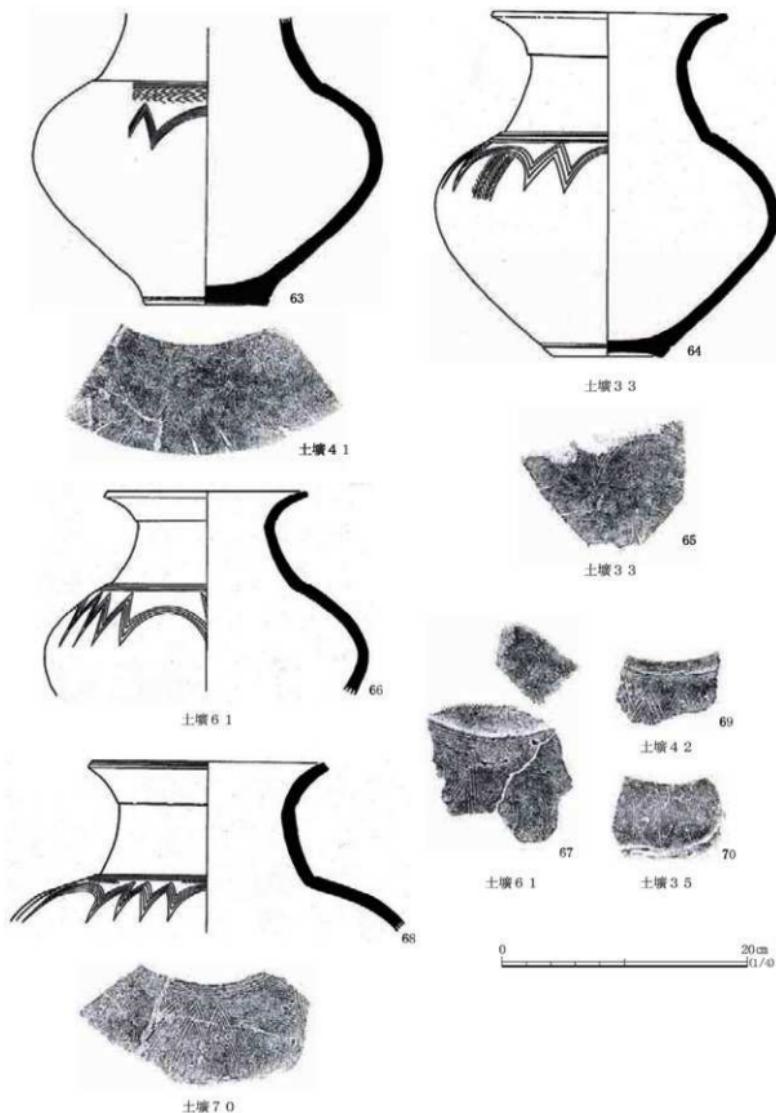
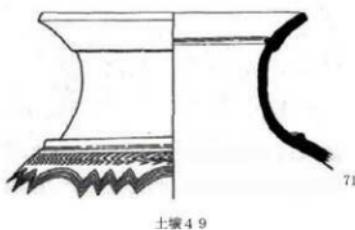
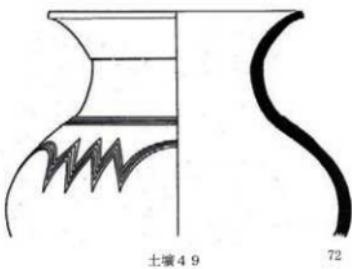


図 50 山形重弧文施文土器⑩(上原遺跡)



土壤4 9

71

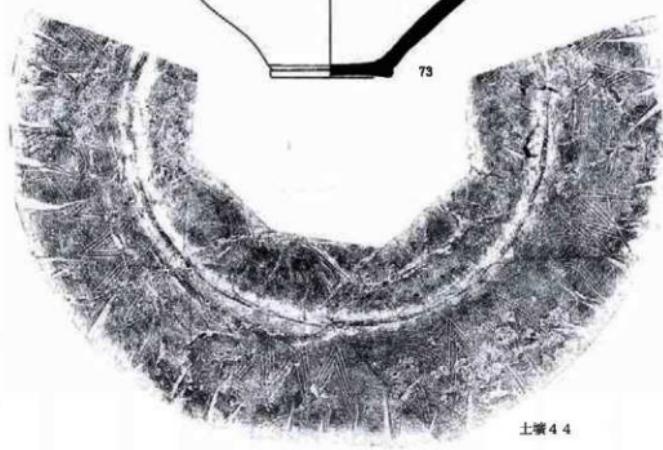


土壤4 9

72



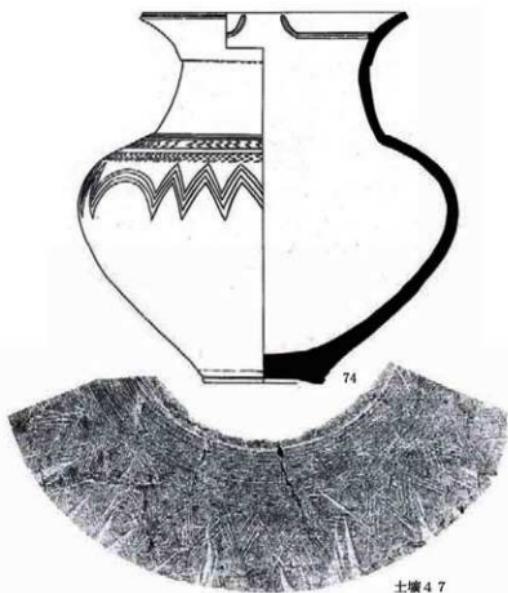
73



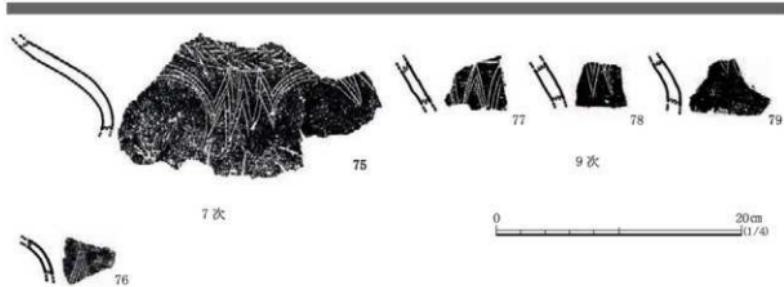
土壤4 4



図51 山形重弧文施文土器①(上原遺跡)



上原遺跡



土井ヶ浜遺跡

図 52 山形重弧文施文土器②(上原遺跡、土井ヶ浜遺跡)

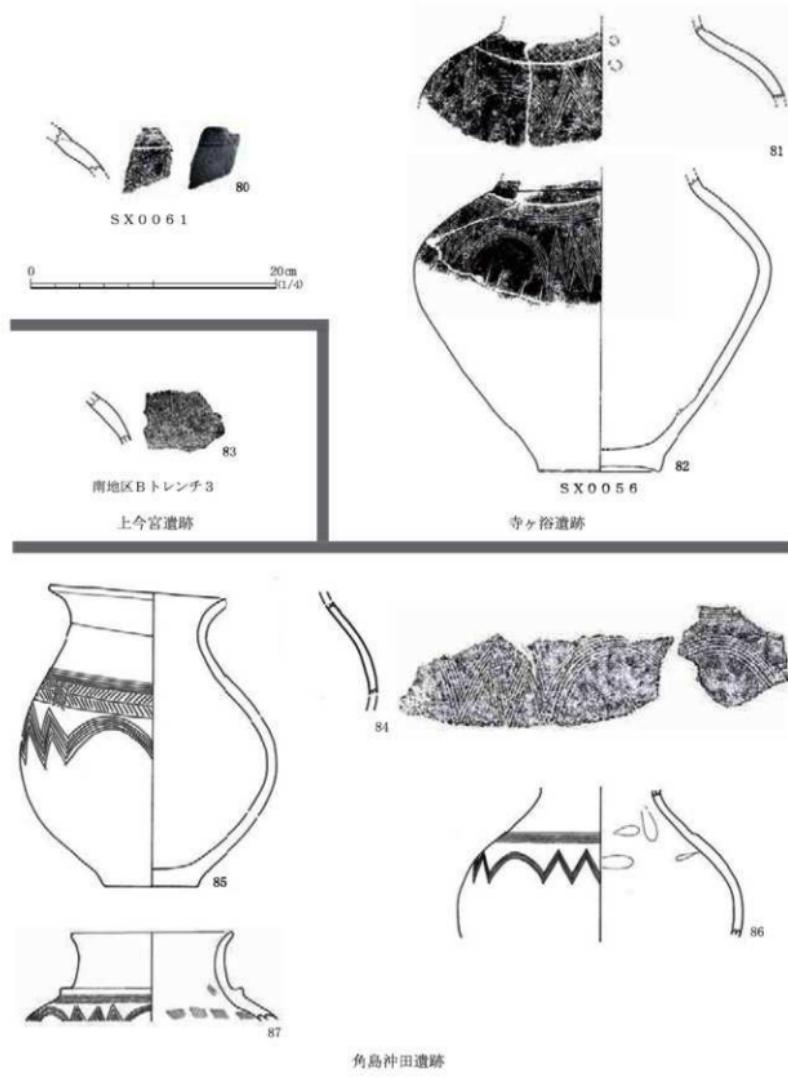
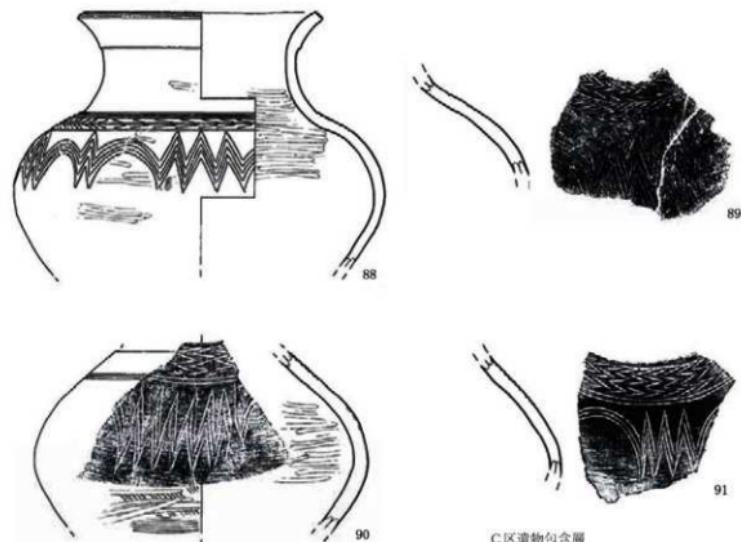
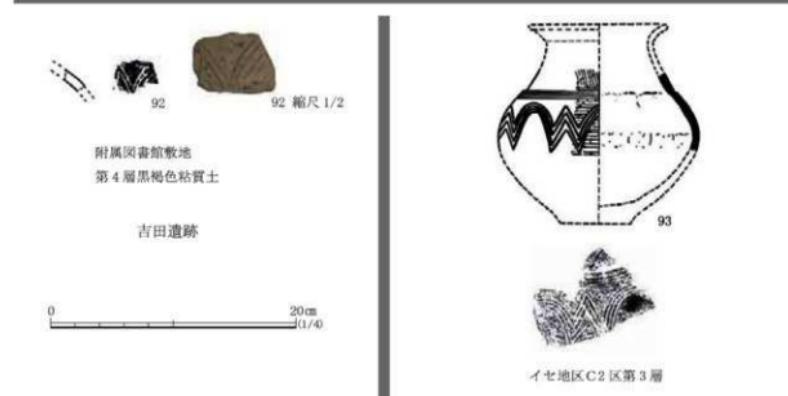


図 53 山形重弧文施文土器③(寺ヶ浴遺跡、上今宮遺跡、角島沖田遺跡)



C区遺物包含層

宮迫神田遺跡



八七地区C2区第3層

半田遺跡

図 54 山形重弧文施文土器④(宮迫神田遺跡、吉田遺跡、半田遺跡)

報告書抄録

ふりがな	やまぐちだいがくまいぞうぶんかざいしりょうかんねんぼう
書名	山口大学埋蔵文化財資料館年報
副書名	－平成16年度－
巻次	
シリーズ名	山口大学埋蔵文化財資料館年報
シリーズ番号	2
編著者名	田畠直彦 横山成己
編集機関	山口大学埋蔵文化財資料館
所在地	〒753-8511 山口県山口市吉田1677-1 TEL083-933-5035
発行年月日	西暦2006年(平成18年)3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
山口大学医学部構内遺跡	山口県宇部市南小串1丁目1-1	35203		33度 57分 36秒	131度 14分 52秒	20040817～ 20040928	144m ²	医学部基幹整備 (地下オイルタンク他)工事
山口大学医学部構内遺跡	山口県宇部市南小串1丁目1-1	35203		33度 57分 44秒	131度 15分 04秒	20041124～ 20050425	400m ²	医学部職員宿舎他 公共下水接続工事
山口大学工学部構内遺跡	山口県宇部市常盤台2丁目16-1	35203		33度 57分 28秒	131度 16分 26秒	20040831～ 20040903	20m ²	工学部定歪速度応力 麻食割れ試験用実験室 新設
山口大学工学部構内遺跡	山口県宇部市常盤台2丁目16-1	35203		33度 57分 29秒	131度 16分 25秒	20041108～ 20041115	52.5m ²	工学部光半導体素子 実験室新設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山口大学医学部構内遺跡	散布地	縄文～近世		縄文土器・土師器 陶器・磁器・石鍊	
山口大学医学部構内遺跡	散布地	弥生～近世		弥生土器・土師器 瓦質土器・陶器・磁器	
山口大学工学部構内遺跡	散布地	不明			
山口大学工学部構内遺跡	散布地	不明			

山口大学埋蔵文化財資料館年報
－平成16年度－

平成18年3月31日

編集 山口大学埋蔵文化財資料館

発行 山口大学

〒753-8511 山口市吉田1677-1

印刷 株式会社マルニ

〒753-0037 山口市道祖町7-13

YAMAGUCHI UNIVERSITY
ARCHAEOLOGICAL MUSEUM REPORT Vol.2

CONTENTS

Chapter I	The project on the Yamaguchi University campus in the 2004 fiscal year	1
Section 1	General outline of the project on the Yamaguchi University campus in the 2004 fiscal year	1
Section 2	Excavation on the Shiraishi campus "Shiraishi site"	5
Section 3	Excavation on the Kogushi campus "Yamaguchidaigaku-Igakubukounai site"	8
Section 4	Excavation on the Tokiwa campus "Yamaguchidaigaku-Kougakubukounai site"	13
Section 5	Excavation on the Hikari Campus "Mitara site and Tsukimachiyama site"	45
Section 6	Excavation on the other Campus	50
Appendix 1	The gist of researches and studies at Yamaguchi University in the 2004 fiscal year	51
Appendix 2	List of researches in Yamaguchi University campus	54
Chapter II	Report of the Yamaguchi University Archaeological Museum activities	74
Section 1	Exhibition activities	74
Section 2	Social education activities	76
Appendix	A memorandum about "yamagata jukomon" in yayoi pottery of Yamaguchi prefecture	78

Published by
Yamaguchi University Archaeological Museum
Yamaguchi, 2006